

# 百聞ハ一見ニ如カズ

旧制学習院歴史地理標本室移管資料

SEEING IS BELIEVING





# 百聞ハ一見ニ如カズ

旧制学習院歴史地理標本室移管資料

S E E I N G   I S   B E L I E V I N G





ごあいさつ

学習院大学史料館では、平成24～26年度の文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として「近代アジアへの眼差しと教育——学習院コレクションの総合的活用」というプロジェクトを進めております。その最初の成果として、旧制学習院歴史地理標本室から移管された資料の解説付き図録を作成いたしました。題して『百聞は一見に如かず——旧制学習院歴史地理標本室移管資料』。

このおなじみのことわざは『漢書』に由来するようで、すでに二千年の歴史を有することになりますが、インターネットが普及して多様な視覚的情報が瞬時に得られる今日、このことわざの正しさを実感する機会はさらに増えているように思われます。しかし、情報化社会の到来以前にも、特に教育の場において、視覚に訴える教材の有効性は十分に認識されていました。そこで、この図録に取り上げられているような「標本」が登場するわけです。もっとも、「歴史地理」と「標本」の組み合わせは少々奇妙に感じられるかもしれません。現代では、「標本」は生物学や鉱物学の分野のものだからです。また、教材としての標本というと、模型や複製が連想されますが、本書に取り上げたアジア関係の資料には、「実物」が少なくありません。その点では博物館の収蔵品と変わらないのです。古代中国の本物の出土品が「教材」であったというのは、たいへん贅沢な話です。と同時に、なぜそれが可能だったのか、という問題をも意識せざるを得ません。

「百聞は一見に如かず」であるとしても、それについて一度も聞くことがなかったとしたら、百回見てもなんであるかわからないかもしれません。この図録は、旧制学習院歴史地理標本室の資料200点余りをカラー図版で掲載し、解説を付けたものです。個々の資料の制作時期・素材・用途・特徴等が記され、判明している場合には、それが学習院の所蔵となった事情にも触れています。この解説を「聞く」ことで初めて、個々の対象がはっきりと見えてくるでしょう。さらに、それらを通して、旧制学習院における「東洋学」教育のあり方、さらには当時の日本のアジアに対する眼差しを「見る」ことも可能になると思われます。

本書が、学習院大学史料館のアジア関係資料を広く知っていただく契機となることを願っております。そして、刊行にご尽力いただいたすべての方々に心から御礼申し上げます。

2013年3月

高橋裕子  
学習院大学史料館館長



## 序文

本図録『百聞ハ一見ニ如カズ——旧制学習院歴史地理標本室移管資料』は、平成24～26年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業による研究プロジェクト「近代アジアへの眼差しと教育——学習院コレクションの総合的活用」によって作成されたものである。

「学習院コレクション」とは、旧制学習院の所蔵していた図書・教材・文書等を総称するもので、現在、大学図書館をはじめ、大学史料館、東洋文化研究所、学習院アーカイブズ等に所蔵されている。学習院大学に遺されている旧制学習院歴史地理標本室移管資料は、学習院の「東洋学」教育の方針に基づいて収集された教材資料で、大正・昭和期の日本がアジア諸国へ向けた「眼差し」を反映する非常に興味深いものである。

近代日本の国家形成において、統一された国家意識の確立と列強に脅かされることのない領域の確立は喫緊の課題であった。幕末の「開国」以来の混乱を天皇による親政によって收拾しようとした明治国家は、その正統性の保障を改めて必要とした。徳川幕府という一つの「旧い正統性」を覆して新たに建国された統一国家にとって、当時の論理に基づいた正統性の獲得への「合理的な説明」＝建国神話が必要とされたのである。

そこで重要な意味を与えられたものが、国民を創出するための新しい学校制度による教育である。なかでも歴史地理教育というものは、国家の自己認識、アイデンティティ形成において重要な意味を持つ。昨今の情勢を鑑みるまでもなく、一国の歴史とその領域の形成は国家の拠って立つ基盤であり、それを次世代に受け継ぐ歴史地理教育は、近代国家のナショナリズムをよく反映するものである。

白鳥庫吉の回想にあるように、学習院は日本の「東洋学」教育において重要な役割を果たしていた。学習院の「東洋学」教育はある意味で、その理想形を志向したものといえよう。そこで用いられていた旧制学習院歴史地理標本室移管資料はその「東洋学」教育の一端を今にとどめている資料群であり、「この資料がなぜここに遺されているのか」という問いからは、学習院のみならず、当時の日本が近代アジアに対し懐いた「眼差し」の様々が看取されることだろう。

最後ではあるが、本図録出版に際して数多くの方々から多大なご協力を頂いたことに、衷心より感謝を表したい。

2013年3月

大澤顯浩  
研究代表者  
外国語教育研究センター教授

長佐古美奈子  
学習院大学史料館

少し昔、テレビやインターネットが普及していなかった頃、生徒達は理科室の人体標本に軽い恐怖を感じ、地球儀を見て、遠い異国に思いを馳せた。いや、おそらく今でも実物やそれを象った標本の持つインパクトは映像に勝っているだろう。

明治5年(1872)、政府は学制を發布、義務教育制度を確立した。そして当時最先端であったペスタロッチの直観(実物)教授法を取り入れ、同24年には「小学校教則大綱」中で、例えば地理においては「地理ヲ授クルニハ実地ノ観察ニ基キ又地球儀地図写真等ヲ示シ児童ノ熟知セル事物ニ依リ比較類推セシメテ確實ナル知識ヲ得シメ又常ニ歴史上ノ事実ニ連絡セシメンコトヲ要ス」と教育に実物を活用することを推奨した。

それより以前、明治10年(1877)に華族子弟のための教育機関として開校した学習院は、神田錦町のその豪華な校舎の中庭に巨大な日本地図模型を造作している。同19年、神田校舎が火事で焼失した後、虎ノ門工部大学校跡へ校舎を移転するにあたっては、第3代院長大島圭介(1886～88在任)の尽力により各種教材を工部大学校より譲り受け、さらに1300円という莫大な予算を地理歴史標本購入費に計上している。

明治17年(1884)に宮内省立となった学習院は、同23年には帝国大学よりも文部省下の諸学校よりも早く、日本で初めて「東洋諸国の歴史」を授業科目とした。導入を決定したのは第4代院長三浦梧楼(1888～92在任)であり、教授したのは白鳥庫吉(1890～1921在任)であった。白鳥はその後、同39年、文部省と陸軍が共同で企画した「満韓旅行」に三島弥彦(1892～1907在学)ら学生とともに参加し、満洲・朝鮮地方を訪れた際に、標本を収集している。その標本のひとつが「広開土王碑拓本」であると思われる。現在も学習院大学東洋文化研究所に収蔵されているこの拓本については、以前より白鳥の収集に係るもの、と推測されていたが、今回の調査において『輔仁会雑誌』『満韓旅行記念号』(1906年発行)に「二十九日 白鳥先生は兼ねてより教場の内外折にふれ時に当たりて余等に語られし鴨綠江の一流冬佳江[ママ]の上流地方に有る高麗の廣開土王の事跡を刻める石碑を発掘運搬する計画熟したりとて此に一行と別れ単独入韓の途に就かれ余等は七時奉天を發し鉄嶺指して進行し南北に袖を分かちたり」とある記述を発見し、白鳥による拓本収集の可能性が高まった。No.30「太王陵出土太王陵銘条

磚」もこの時同時に収集されたのであろう。

しかし、後述するように歴史地理の標本室は関東大震災において焼失する。多少の標本類は救い出せたようであるが、巨大な紙製品である拓本が焼け残ったのは如何なる理由であろうか？明治30年(1897)より歴史地理課長を務めた白鳥庫吉は、同時に同38年より図書館長も勤めた。おそらく拓本をはじめとするいくつかの標本類は白鳥の手元——標本室以外の教室か図書館長室(現北別館・史料館)に置いてあったため、焼失を免れたのだろう。

明治23年(1890)に四谷に校地を移した学習院は、さらに同41年には目白に校地を移転した。四谷校舎においては「博物」標本室の存在は確認出来るが、「歴史地理」の標本室は部屋としては確認出来ない。しかし、目白移転に際しようやく「歴史地理標本室」が設置された(『学習院時報 第三号』1923年発行 学習院アーカイブズ所蔵)。『学習院明治四十年会計予算決算録』(学習院アーカイブズ所蔵)には「地理歴史標本200個」を購入したとの記録があることから、目白校地移転に伴い設置された歴史地理の標本室には白鳥庫吉収集の標本等とともに、新たに購入した標本類が収蔵されたのであろう。

大正元年(1912)、学習院にとって衝撃的な事件がおこった。第10代院長乃木希典(1907～12在任)の自決である。乃木は院長官舎ではなく、学生寄宿舎の事務棟「総寮部」に起居し、学生と寝食をともにする等、学習院学生を愛した。乃木の遺族からは、その学習院へ乃木遺愛の品が数多く贈られた。そのうちのNo.159「刀 銘信濃守藤原弘包」等は歴史地理標本室に収蔵し、保存していくことを決定したことが『雑件録 大正二年』(学習院アーカイブズ所蔵)にて確認される。しかし、『標本原簿』によればこれらの遺物は関東大震災以前より「図書課預かり」となっており、そのため焼失を免れている。

大正4年(1915)大正天皇即位を記念し作成された「大礼奉獻学習院写真」には歴史地理標本の写真が掲載され、白鳥庫吉らが収集したであろう「満洲土人器具」等が姿をみせている。しかし、同12年9月1日の関東大震災により歴史地理標本室は焼失した。教員達は炎の中、わずかに持ち出したものが出来なかった。標本類を再収集するために第14代院長福原鑣二郎(1922～29在任)は同じ宮内省所管の皇室博物館に標本の移管を依頼している



(「大正十三年七月十七日 宮内大臣へ上申 昨年九月一日震火災ニ依り焼失セル本院ノ博物標本類復旧ニ関シ帝室博物館所蔵品中本院ニ於テ必要ナル標本類ハ此際本院ニ保管転換相成候様致度此段上申候也」『雑件録 大正13年』学習院アーカイブズ所蔵)。また当時海軍兵学校在学中だった高松宮宣仁親王(1911~17在学)は同年10月20日に母校学習院を慰問し、すぐさま掛図、絵葉書帖等84件を寄贈した。板澤武雄(1921~38在任)ら教員達は翌13年夏新潟、富山、石川、福井、鳥取、島根へ標本収集に出かけ、各地の特産品を入手した。例えばNo.88「色絵山水文扇形皿 初代徳田八十吉 九谷焼」、No.130「扇面蒔絵長方盆 象彦」等はこの時に購入したものである。また島津製作所からは大量の標本(No.203「地層構造模型」他)を購入した。

明倫中学校校付属博物館の標本の移管を受け(No.57「鮭皮靴」等)、さらに南洋庁や北海道庁には寄贈依頼を出し、バター等の寄贈を受けている(バターは1935年廃棄)。その他、『標本原簿』にあらわれる寄贈者には浅野長武(1901~16在学、No.167「紺紙銀泥華嚴經断簡(二月堂焼経)」寄贈)や若王子文健(1890~96在学、No.188「工部大学校所用ジェラル洋瓦」寄贈)等がいる。また江藤濤雄、矢島透等古物商からの購入もあった。

幻灯を使用した授業も行なわれた。大谷勝真(1916~26在任)は外国書籍をガラス乾板に撮影し、投影する授業を行なった。東洋文庫設立に関わった石田幹之助からは大正13年(1924)に「満洲及支那各地絵葉書」345枚が寄贈されている。

昭和5年(1930)には鉄筋コンクリート造りの中等科教場(現西1号館)が竣工し、歴史地理標本室もその3階に再興された。同年には宮内省より昭和天皇大礼の際に使用されたNo.68「東帯(奏任官用緋袍)」等が保管転換された。同11年には再び高松宮よりNo.45「パラオ諸島アバイ模型」等が寄贈された。同16年学習院の校地を喜多見(現世田谷区成城)へ移転する話が持ち上がった。移転先は宮内省御料地であったため、帝室博物館内藤政光(1903~16在学)の指導のもと学習院史学会により発掘調査が実施され、その出土品であるNo.174「砧中学校7号墳出土遺物」等も収蔵品となった。

昭和20年(1945)8月敗戦により学習院は存続の危機に立たされた。その後同22年、私立学校として新たな出発をすることとなり、

同24年には学習院大学が開設された。中等科教場は大学が<sup>3</sup>使用することとなり、歴史地理標本室は閉鎖され、標本類は図書館へと移動した。同22年より学習院教授となった末松保和(1947~75在任)はその後図書館長となり、同27年の東洋文化研究所の開設にも尽力した。当時学生であった岡田茂弘(1946~52在学)によれば、末松は白鳥と同じ様に図書館長室にお気に入りの標本類を置いていたという。

歴史地理標本室が閉鎖された後の昭和25年(1950)、児玉幸多(1938~80在任)は教材としてNo.191「古代土器複製標本」を購入した。

昭和39年(1964)、前川國男設計の新図書館が竣工した。図書館長室も一部の標本類とともに新図書館へ移動した。掛図、絵葉書、書籍、写真等紙資料も新図書館の収蔵品となった。末松館長の意向か、「東帯(奏任官緋袍)」やNo.46「マーシャル諸島武器」も新図書館へ移動している。乃木希典の遺品は新図書館4階に「乃木室」が出来て、一括して保存されることになった。

昭和50年(1975)末松保和が退職した。この時になって初めて「広開土王碑拓本」は図書館登録され、「刀 銘 信濃守藤原弘包」とNo.162「スペンサー銃」は学習院総務課へ移管され鉄砲刀剣類所持等取締法に登記された。同年児玉幸多の尽力により史学科史料室を引き継ぎ、史料館が開館した。史料館の場所は旧図書館(現北別館)である。史学科より古文書を持って移動した旧図書館には、既に歴史地理標本室の標本があった。

その後図書館から「東帯(奏任官緋袍)」等を、東洋文化研究所からは末松が使用していた机の中に保管されていた「紺紙銀泥華嚴經断簡(二月堂焼経)」等を、総務課から「刀 銘 信濃守藤原弘包」と「スペンサー銃」をと、学内各所より歴史地理標本室標本の移管を受け、歴史地理標本室がいま再び、史料館にて蘇った。

「百聞ハ一見ニ如カズ」——標本達は今また、語り始めた。



# 目次

ごあいさつ .....	2
序文 .....	3
百聞ハ一見ニ如カズ—— 学習院歴史地理標本室来歴 —— .....	4
I アジアへの眼差し INSIGHT ASIA .....	7
コラム1 板澤武雄 .....	29
コラム2 高松宮下賜資料 .....	29
コラム3 明倫中学校付属博物館移管資料 .....	39
II 日本を知る COME TO KNOW JAPAN .....	43
コラム4 関東大震災後の標本収集 .....	79
コラム5 乃木希典 .....	89
コラム6 帝室博物館と学習院 .....	93
コラム7 宮内省移管資料 .....	93
コラム8 ドルメン教材研究所 .....	105
コラム9 島津製作所標本部 .....	105
百聞ハ一見ニ如カズ—— その広がり —— .....	113
歴史地理課教員一覧 .....	113
法量一覧 .....	114

## 凡例

- 本図録は平成24～26年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代アジアへの眼差しと教育——学習院コレクションの総合的活用」による研究成果の一部である。
- 本図録は、学習院大学史料館が所蔵する旧制学習院歴史地理標本室移管資料より207件を掲載した。
- 資料はおおよそ次の分類に従って配列した。
  - I アジアへの眼差し 地域(中国 朝鮮 台湾 南洋 北方 その他)
  - II 日本を知る 種類(工芸 歴史 考古 標本模型)
- 資料には掲載順に従って番号を付した。
- 各資料のデータは次のように記した。

- |   |        |
|---|--------|
| (1) 唐三彩馬俑   | (2) 1体 |
| (3) Figure of horse used as grave goods, Tang tricolour ceramic |        |
| (4) 唐   |        |
| (5) 史料館No.287   ラベルNo.1262                                      |        |
| (6) 歴史45   唐三彩馬   大正13年(1924)9月4日   江藤清雄/購入(75円)                |        |

- (1) 資料名 (2) 点数 (3) 資料名英語表記 (4) 資料の製作年代
- (5) 資料番号 史料館No. | 歴史地理標本室ラベルNo.
- \* 旧制学習院歴史地理標本室移管資料は、少なくとも3段階にわたり資料番号が付けられている。「史料館No.」はその中で最も新しい現用の資料

番号で、これは昭和59年度(1984)の第一次調査の段階で付されたものである。今回の調査で新たに存在を確認した資料は「A1～A13」とした。

- \* 資料には、歴史地理標本室の収蔵ラベルが貼られている場合がある。「歴史地理標本室ラベルNo.」には、このラベルに書かれた番号を記した。

## (6)『標本原簿』の情報

受入番号 | 資料名 | 受入年月日 | 来歴/受入形態(価格)

- \* 『標本原簿』とは歴史地理標本室の資料台帳である。「歴史」と「地理」の2冊があり、「歴史」は大正2年(1913)から昭和19年(1944)に、「地理」は大正12年(1923)から昭和14年(1939)に収蔵した資料が一部記載されている。『標本原簿』には、受入番号や資料名、受入年月日、寄贈者名、購入価格等が記載されている。

- \* 『標本原簿』の受入番号は、資料本体には付されていない。そこで、昭和59年度以降の調査で「歴史地理標本室ラベルNo.」と『標本原簿』の受入番号との比定が行われた。その比定に基づき、『標本原簿』の情報を記した。資料の付属品等から明らかになったことは、ここに「」で記した。

- 資料の解説について、文字は常用漢字を、数字は算用数字を用いた。但し、固有名詞や資料等へ書き込まれた旧字や俗字、漢数字はママとした。文言は概ね統一をはかったが、基本的に執筆者の表現を活かした。『「原簿」』は『標本原簿』を示す。著者による補足事項は「」で記した。

- 画像について、資料が複数点ある場合はそれぞれに枝番号を付した。

- 資料の法量は巻末に記載した。〈 〉は残存値を示す。不定形で大きさの計測が困難なものは重さを計量した。資料が多数ある場合は、最小及び最大のものを計測し(小)(大)で示した。

I

アジアへの眼差し

INSIGHT ASIA

## 穀粒文玉璧

1点

Jade Bi disk, a ritual implement with design of grained cereals,  
Warring States era-Han Dynasty

周～漢

史料館No.176 | ラベルNo.1009

歴史24 | 玉璧 | 大正11年(1922)12月27日 | 江藤満雄ノ購入(90円)

「玉<sup>ぎよく</sup>」とは美しい石の総称で、権力と財産の象徴である。玉製品のうち、玉璧は、円形で中心に小さい穴があり、内円の半径が外円の半径の半分以下のものをいう。天を祭る時に用いた。資料は中国大陸で製作されたもので、緑色の石を素材として、表面に穀物の粒状の文様を施している。『原簿』には「玉璧」とあり、江藤満雄より大正11年に90円にて購入した。江藤は大正から昭和にかけての骨董商で、西安の古玩街で日本や西洋の骨董商と交流していた。江藤を経由して日本にもたらされた中国大陸の骨董品は、例えば、「十六国後秦弘始四年遼東太守呂憲墓表」(石碑、書道博物館所蔵)、「仏三尊磚」(六朝造像磚、東京大学東洋文化研究所蔵)、「白釉花文枕」(磁州窯、東京藝術大学大学美術館所蔵)等が知られている。(村松)



## 2

## 玉璋

1点

Jade Zhang ritual blade used as a symbol of power in ancient  
China, Warring States era

周

史料館No.182 | ラベルNo.1027

歴史27 | 古玉璋 | 大正12年(1923)3月19日 | 江藤満雄ノ購入(80円)

玉璋は刀の形をした古代中国の玉器で、当時の社会においてある種の威信財(権力の象徴)として儀礼等に用いられた。龍山文化期の後半(紀元前3000年紀後半頃)から使用され始め、夏王朝の時代に相当する二里头文化期(紀元前2000年紀前半頃)にかけて特に盛行し、その後も重要な社会的役割をもった玉器として用いられた。

本資料は、龍山文化期や二里头文化期の玉璋に比べて簡略化された意匠となっており(上部は破損)、やや時代が下る時期の玉璋であると考えられるが、興味深いのは、この玉璋の一方の外面が磨きにより精緻に仕上げられているのに対し、もう一方の外面は磨きがなされていないばかりか、元々はひとつであったこの玉璋をさらに薄く半分にスライスした痕跡がそのまま明瞭に残されている点である。

これまでに知られる玉璋の中には1枚の原器をわざわざ薄く2枚に切り落とした例が少ないながらも存在することが知られ、そのことから玉璋にはある種の割符的な役割をもった瑞玉(天子が諸侯に地位の印として下賜する玉器)としての社会的役割・機能がある時期から加えられたとする考えがあるが、資料はまさにそうした事例を物語るきわめて貴重な資料といえよう。(久慈)





## 方格規矩鏡

1点

Mirror with geometric patterns of compass and carpenter's square, made of bronze, Han Dynasty

漢  
史料館 No.170

方格規矩鏡とは漢代から魏・晋代にかけて流行した銅鏡のひとつ。中央の鈕を方格（方形の区画）が囲み、その外側にT・L・V字形の文様がある。この文様をコンパス（規）と曲尺（矩）に見立てて名付けられた。資料は「凹帯複波縁文 方格規矩渦文鏡」と呼ばれる鏡で、背面の文様は半球状の円鈕を中心に方格と規矩文によって分割された内区と、2本線の三角文がめぐる外区に分かれる。鏡の直径は11.8cmで内区の直径は8.0cm。内区には8個の小乳が配され、その間を唐草状の渦文が埋めている。全体に暗青緑色を呈するが、鏡表の大部分は鱗状の錆で被われ、周縁には細かい欠損がある。『原簿』には記載がなく、出土地・入手経路とも不明。酷似した背面の文様を持つ鏡が中国・陝西省千陽県の新代の墓（紀元後1世紀前後）から出土している。（村松）



## 4

## 宜子孫銘方磚

1点

Square brick tile used to decorate tomb interior, Han Dynasty

漢  
史料館 No.93  
歴史68 | 漢宜子孫磚 | 大正14年(1925)8月2日 | 江藤瀧雄/購入(33円)

方磚とは方形の焼いたレンガのこと。建築物の床やレリーフとして用いられるが、資料は漢代の墓の内部を飾る磚と考えられる。磚の表面には「[宜]子孫/富番[繁]昌/樂未央」と記されている。子孫が富み繁栄し、長く楽しみ、その繁栄が尽きることがないようにという願いを示している。資料とは字体がやや異なるが、同じ文面の磚が河南省許昌市の漢墓より発掘されている。「昌樂未央」「長樂未央」という言い回しは、磚や瓦当・銅鏡に多くみられる吉祥語である。漢の長安城には「長樂宮」や「未央宮」という宮殿が建設された。（村松）



## 牛車型明器

1点

Figure of ox-drawn carriage used as grave goods, earthenware, Han Dynasty-Jin Dynasty

漢～晋

史料館No.23

歴史23 | 瓦牛車 | 大正11年(1922)12月27日 | 江藤清雄/購入(30円)

中国古代において、死者は死後も生前と同じ暮らしをすると考えられていたことから、墓主の生前の生活用品そのもの、もしくは、ミニチュアを墓に埋めた。このような副葬品を明器という。この資料は牛車を模したもので、車を挽く牛1頭と車から成っている。車は、2本の轅を有し、先端に軛がある。車体には室があり、2輪である。車輪・車体・牛の部品が別々につくられ、組み合わされている。漢代には、中国の西北部の甘肅省武威磨咀子漢墓から木製の彩色牛車が発見されているが、資料は陶製である。資料と類似した文物としては、河南省洛陽市邙山から出土した西晋時代のものがある(北京大学サックラー考古芸術博物館所蔵)。牛車は、漢代から晋代にかけて、一般的な貴族の移動手段のひとつとなった。(村松)



## 6

## 緑釉倉明器

1点

Figure of grain elevator used as grave goods, green-glazed ware, Han Dynasty-Jin Dynasty

漢～晋

史料館No.286 | ラベルNo.1362

歴史66 | 漢釉瓦甕 | 大正14年(1925)8月2日 | 江藤清雄/購入(28円)

円筒形の倉庫を模した漢代の明器。上部は屋根瓦を模し、中央部には空気抜き穴がある。3つの獣脚を有し、座面を除く全面に緑釉が施されている。器の内部には実際の穀物等を入れて埋葬される場合があり、湖北省江陵鳳凰山167号墓の倉の明器からは、梗米の稲穂が発見されている。このような円筒形の倉庫は「圜」と称される。前漢の西漢京師倉遺跡(陝西省華陰市)の発掘成果によれば、円形倉庫の下部は半地下部分で、上部に柱を立てて屋根を付けたと考えられる。官の倉は、租税として徴収した穀物の備蓄に利用され、また、災害発生時には被災民の救済のために倉を開き、食糧支援を行なうこともあった。(村松)





## 緑釉狗明器

1点

Figure of two dogs used as grave goods, green-glazed ware, Han Dynasty-Jin Dynasty

漢～晋

史料館No.5 | ラベルNo.1011

歴史25 | 緑釉狗 | 大正11年(1922)12月27日 | 江藤清雄/購入(15円)

2匹の並立する狗の陶製明器。上半部に施釉がなされている。イヌは狼が家畜化された動物で、古代中国では愛玩用・狩猟・祭祀・娯楽・番犬・食用等様々な場面で登場する。イヌの陶俑は河南・湖北・陝西・四川の漢墓から多く発見されている。漢の皇帝・景帝の陽陵からは、458点のイヌの俑が山羊・綿羊・猪や鶏等の家畜俑とともに出土している。冥界の案内役としての役割を有することもあり、一般的な漢墓からはひとつの墓あたり1匹のイヌの陶俑が出土する。資料のような2匹の並立型で5cmほどの小型のものはほとんどみられない。(村松)



## 北魏造像銘石片

1点

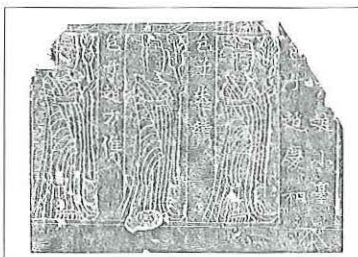
Fragment of Buddhist Stele, Northern Wei Dynasty

北魏

史料館No.92 | ラベルNo.1364

歴史67 | 魏画像石片(箱入) | 大正14年(1925)8月2日 | 江藤清雄/購入(55円)

造像銘とは、仏像や道教像に刻まれた銘文のことである。その内容は、(a)造像の年月日、(b)発願者の名とその身分や出自、(c)誰か何のために像をつくったか、(d)尊像の名称、(e)祈願する事柄、が主で、像が彫られていない空白の部分に埋めるように、石碑の正面下部・両側面・裏面等に刻まれる。北魏から唐代にかけて、在家信者や僧尼・道士を中心に組織された集団「邑義」の発願による造像が盛んに行なわれた。この邑義の一般構成員を「邑子」という。本石片の正面に「□□趙小台/邑子趙慶和/邑子朱統/邑子趙方儒」の文字(楷書)と3体の邑子像のみを残す。但し、上端と右端には邑子像の一部がみえ、右側に連なる邑子像については、その衣服の裾の形から、左向きで描かれていたと考えられる。おそらく「□□趙小台」「邑子趙慶和」の間を軸として、左右対称に配置されていたのであろう。一本一本の線は、溝の底が丸いU字の断面形になっている。これはのちに「丸彫」と呼ばれる刻銘技法の一種であるが、何度も鑿で打ち整えていく丁寧な技法で、この造像銘に温雅な雰囲気を与えている。購入時に添えられていたと思しき「魏画像石片」と墨書された札も併せて保管されている。(吉田)





## 唐三彩馬俑

1体

Figure of horse used as grave goods, Tang tricolour ceramic

唐

史料館No.287 | ラベルNo.1262

歴史45 | 唐三彩馬 | 大正13年(1924)9月4日 | 江藤清雄/購入(75円)

唐三彩とは、緑色・褐色・白色の3色(三彩)及び藍といった色彩を有する陶器を指す。唐代より製作が始まり、主に貴族等の墓の副葬品としてつくられた。唐の都・長安や洛陽から多く発掘される。国際的色彩の強い唐の文化を象徴するように、唐三彩の意匠には、馬や駱駝、西方系の顔立ちでヒゲをたくわえた人々等がみられる。資料は馬の俑である。俑とは「はにわ」を意味する。この俑は、灰白色の良質な粘土でつくられ、小さな粘土板の上に起立した馬は口を開き、やや左を向き、背に鞍が装着されている。欠失した左耳は石膏で補修され、黒漆塗で木製の台座に前後2本の金具で固定されている。出土地は不明。(村松)



## 唐三彩鎮墓獸俑

1体

Figure of tomb guardian used as grave goods, Tang tricolour ceramic

唐

史料館No.42 | ラベルNo.1253

歴史46 | 唐三彩鎮墓獸 | 大正13年(1924)9月4日 | 江藤清雄/購入(70円)

鎮墓獸とは、墓を守り悪霊(邪)を祓うために副葬された獸形・人面獸身等の木像・陶像のこと。このような像を副葬する習慣は、春秋時代には既にみられ、漢代を経て、特に唐代で流行した。唐三彩の鎮墓獸である資料は、灰白色の良質な粘土でつくられ、低い台座の上に跨踊した獸形の俑で、口を開き、牙をむき出しにした顔面は獅子に似るが、頭上にはやや湾曲した双角が生え、四肢の先は偶蹄に表現され、両肩に小さな翼を持つ。出土地は不明。(村松)



## 唐武人俑

2体

Figure of warriors used as grave goods, yellow-glazed earthenware, with black, red and green pigments, Tang Dynasty

唐

史料館No.276 | ラベルNo.1276

歴史47 | 唐武人大土偶 | 大正13年(1924)9月4日 | 江藤清雄/購入(50円)

2体ともに質感が似ているので、同じ墓から出土したのであろう。大きな武人俑は將軍、小さい方は兵士であろうか。白い胎土に黄釉を施し、その上に顔料を塗ることで甲冑や衣装等の細かな部分等を表現していたようで、今も黒・赤・緑の顔料が所々に残る。2体ともに、唐代に大流行した「明光鎧」を着用する。明光鎧は、胸と背を保護する楕円形の金属板があることが特徴で、戦場で磨き上げられた金属板が太陽の光を反射して「明光」のように輝くことからこの名が付いたとされる。ただ、この2体の鎧の背中に楕円の板は施されていない。大きな武人は、鎧の下は戦闘用の袍(上着)を身に着けた重装であるが、小さな兵士は一般の袍の上に鎧を付けただけの軽装のようである。2体ともに右手は腹の前に、左手は脇腹に添えられていて、戈や盾或いは剣等の何らかの武器を持っていたようである。武人らしくキリリと引き締まった表情をしている。(福島)



## 12

## 唐男性俑

1体

Figure of man used as grave goods, yellow-glazed earthenware, Tang Dynasty

唐

史料館No.A1 | ラベルNo.1361

黄色釉の男性俑。釉はやや緑がかっているようにもみえる。頭部以外には全て同じ釉薬が施されていて、いわゆる「唐三彩」のような塗り分けはみられない。頭巾をかぶり、何とも物憂げな表情を浮かべている。身に着けている袖の細長い袍は、襟もとが開けられており、裙(スカート)は膝丈になるようにベルトで固定されているようである。また、足元は丈の長いブーツを履いているようである。その造形は型によってつくられたようで、全体にぼんやりとして不明瞭であるものの、その反面、柔らかな風合いである。何かを握っているかのように、右手を上、左手を下にしているこのポーズは、馬や駱駝を牽く人物によくみられる。この男性俑も本来は馬や駱駝とセットだった可能性もある。(福島)





## 唐女性俑

1体

Figure of woman used as grave goods, colour painted earthenware, Tang Dynasty

唐  
史料館No.A2

緑色のショールが印象的な女性の加彩俑。長い筒袖の衫(シャツ)を着用し、その胸元は広く開いている。だらりと垂れた右手、腹部に添えられた左手は、ともに指先が袖に隠れていてみえない。紅白の縦縞の裙を履いている。このような縦縞の裙は、日本の高松塚古墳の壁画に描かれた女性像のものと通じるところがある。唐時代の女性俑は、唐初期の8世紀前半までは、本資料のようにすらりと細身で、8世紀の中頃からは、ふくよかな女性がつくれる。ウエストの上部に巻かれた黒い帯、裙の紅白、ショールの緑と唐代の女性の華やかさが表現されている。髪は、頭頂部から前方にかけてひとつに結わえられている。唇には、朱がやや残り、その表情は、穏やかに微笑んでいるようである。

(福島)



## 唐女性俑

1体

Figure of woman used as grave goods, colour painted earthenware, Tang Dynasty

唐  
史料館No.A3

髪を頭部でふたつに結った双髻(そうけい)が美しい女性の加彩俑。このような細身の身体は唐前期の作品の特徴である。袖の細長い衫の上に半袖の上着を着用し、その上からショールをまとっている。左手側のショールの端は帯の中に納められ、右手側の端を膝の下まで長く垂らしている。このようにショールの右手側の端のみを出すスタイルは、鄭仁泰墓から出土した女性俑にもみられる。また、唐前期の陵墓(章懷太子墓や節愍太子墓等)で発見された壁画にもこのようなショールをまとった女性は数多くみられるが、ショールを左右で重ねる場合には、この俑のように共通して右手側が上にくるようになっていて、当時の習慣が窺われる。ショールと半袖の上着の色は、ともに赤いが、その色はショールがやや薄く、上着は濃い。当時の女性の細やかな色合わせのセンスが窺える。なお、この俑の本体内部には、ラベルシール「927/10」が貼り付けられている。

(福島)





## 唐女性俑

1体

Figure of woman used as grave goods, colour painted earthenware, Tang Dynasty

唐  
史料館No.A4

高く結った髪型が見事な女性の加彩俑。正面から見るとL字型に結い上げているだけのようであるが、横からみれば扇が開いたように見える華やかな髪型で、初唐に流行した。これは、唐の段成式の『髻鬟品』で「半翻髻」<sup>はんはんけい</sup>と記されている髪型だとされていて、この髪型をした女性は、唐の初代皇帝・高祖李淵の宮中にいたと言う。その服装は、袖の細長い衫の上に赤色の半袖の上着を着用し、赤茶色と白の縦縞の裙を履いている。肩には朱色のショールを掛けており、左手側の端は、濃い赤色の帯の中に入れている。同じ赤色でも様々なトーンで塗り分けられている。残念ながら、その表情を窺うことは出来ないが、わずかに唇の朱が残る。おそらく、唐前半期の女性に特徴的な薄化粧を施された穏やかな表情をしていたのであろう。なお、本資料と同形の俑が、1987年に古代オリエント博物館で開催された企画展示「中国歴代女性像展」で展示されている。同じ型を使用し作製されたのであろうか。

(福島)



## 唐女性俑

1体

Figure of woman used as grave goods, colour painted earthenware, Tang Dynasty

唐  
史料館No.A5

髪や衣装が波打つ様子がよく表現された加彩俑。長く細い筒袖の衫を着て、その長い袖の先を両手ともに握り、その拳を胸の前で合わせている。その胸元は広く開き、衫の上には半袖の上着を着用している。丈の長い裙を履いていて、脚の付け根あたりで腰帯を巻いて前方で括っている。2003年に洛陽の関林1305号唐墓より発掘された「鞆を持つ女性俑」にもこのような腰帯を巻いた俑がみられる。髪型は、左右対称に頭頂部で結い上げられている。体つきが細身で、タイトにまとめられた髪型は、唐初期までの作風である。なお、1987年に古代オリエント博物館で開催された企画展示「中国歴代女性像展」での展示品に、頭部は異なっているが、身体の部分と同様の俑が展示された。また、本資料と頭・身体ともに近似した俑が、南京博物院に所蔵されているとの情報もある。型を用いて量産したと考えられる。

(福島)



## 明十三陵所用黄釉竜文軒平瓦片

1点

Eave roof tile used in the Thirteen Tombs of the Ming Dynasty, with yellow glaze and motif of five-clawed dragon, symbols of the Emperor

明

史料館No.32 | ラベルNo.122

歴史122 | 十三陵瓦(破片) | 昭和7年(1932)9月9日 | 酒井洋/寄贈

「明の十三陵」は、北京市内から北西に約50km、燕山山脈の支脈、天寿山南麓にある明代の皇帝の陵墓群である。この地には南京から北京への遷都を行なった明王朝第3代皇帝・成祖永楽帝を嚆矢とする13代の皇帝の陵墓があり「十三陵」と呼ばれる。

本資料は、この「明の十三陵」の建築物に用いられていたと考えられる軒平瓦(軒の先端部に用いられた平瓦)の一部(上部が破損)である。破損部を除く器全体に黄色の釉薬が施され、瓦当面(文様がある面)には中国皇帝の象徴である竜が型押しによって描き出されている。明代から清代にかけての中国における陰陽五行説(思想)では、黄色を物質の根源である土の色と考えていた。これに基づいて、黄色は皇帝を象徴する色とされ、皇帝以外のものがこの色を用いることは許されなかった。また同様に、元代以降の中国では、5本爪(指)の竜を皇帝そのものの象徴とし、皇帝以外のものが5本爪(指)の竜を用いることはかたく禁じてられていた。

皇帝の象徴である黄色の釉薬が施され、かつ皇帝そのものの象徴である5本爪(指)の竜が描き出されたこの軒平瓦は、まさに皇帝が眠る陵墓の建築物に用いられた瓦であることを雄弁に物語ろう。(久慈)



## 18

## 清昭陵所用黄釉单竜文軒丸瓦

1点

Eave roof tile used in Qing zhao ling, with yellow glaze and dragon motif, symbols of the Emperor, Qing Dynasty

清

史料館No.44 | ラベルNo.1368

歴史70 | 瓦(奉天昭陵(北陵)) | 大正14年(1925)9月7日 | 苗文華/寄贈

「清昭陵」は、現在の遼寧省瀋陽市北郊にある清の皇帝の陵墓群のひとつである。

12代続いた清の皇帝の陵墓は、永陵(遼寧省新賓満族自治県)・福陵(遼寧省瀋陽市東郊)・昭陵(遼寧省瀋陽市北郊)・清西陵(河北省易県)・清東陵(河北省唐山市)の5ヶ所にわかれて築かれているが、本資料はそのうちの昭陵(第2代皇帝・太宗ホンタイジの陵墓)に用いられていたと考えられる軒丸瓦(軒の先端部に用いられた丸瓦)である。玉縁と呼ばれる瓦の連結部及び半円筒形の丸瓦部の内面を除いた器全体に黄色の釉薬が施され、瓦当面(文様がある面)には中国皇帝の象徴である竜が正面を向いた意匠で型押しによって描き出されている。丸瓦部のやや後方には長方形(2.0×1.5cm)のいわゆる釘穴(瓦を固定するために用いる孔)があげられている。

No.17と同様、皇帝の象徴である黄色の釉薬が施され、かつ皇帝の象徴である竜が描き出されたこの軒丸瓦も、まさに皇帝が眠る陵墓の建築物に用いられた瓦であることを物語ろう。(久慈)





## 黄釉竜文磚片

1点

Yellow-glazed brick tile with dragon motif, symbols of the Emperor, Qing Dynasty

清  
史料館No.31

本資料は長方形を呈した磚の一部（左側が破損）で、内面（裏側）を除く器全体に黄色の釉薬が施され、外面（表側）には中国皇帝の象徴である竜が型押しによって描き出されている。

本資料の来歴や出土地等が不明のため、この磚が具体的にどのような建築物のどのような箇所に用いられていたものなのか明らかではないが、内面（裏側）には磚を固定するための下駄の歯状の突起の一部が残っており、壁等に嵌め込んで用いられていたものと思われる。（久慈）



## 緑釉唐草文磚片

1点

Green-glazed brick tile with arabesque design, Qing Dynasty

清  
史料館No.132

本資料も古代から中国で住居や墓、城壁等の建築物の床材や壁材として用いられてきた磚の一部（左側が破損）である。

長方形を呈し、内面（裏側）を除く器全体に薄い緑色の釉薬が施され、外面（表側）には唐草文（植物の花・葉・蔓等を圖案化した文様）が型押しによって描き出されている。

資料の来歴や出土地等が不明のため、この磚も具体的にどのような建築物のどのような箇所に用いられていたものなのか明らかではないが、No.19と同様に、内面（裏側）には磚を固定するための下駄の歯状の突起の一部が残っており、壁等に嵌め込んで用いられていたものと思われる。（久慈）



## 黄釉丸瓦片

1点

Yellow-glazed roof tile, Qing Dynasty

清  
史料館No.134

本資料は丸瓦（本瓦葺で、平瓦と組み合わせて用いる半円筒形の瓦）の一部である。断面がわずかに弧状を呈し、破損部を除く外面全体に黄色の釉薬が施されている。資料の来歴や出土地等が不明のため、この丸瓦が具体的にどのような建築物に用いられていたものなのかについては残念ながら明らかにしえない。（久慈）





## 施釉熨斗瓦

1点

Glazed roof tile, used under convex roof tiles, Qing Dynasty

清  
史料館No.72

熨斗瓦とは棟（屋根の頂部）を積むために用いられる瓦で、棟の最上部に載せる丸瓦（雁振瓦・衾瓦・冠瓦）の下に積まれる瓦である。

本資料は、長軸方向を正面にみた場合、中央部がややくぼみ、左右の両端がやや立ち上がった、いわゆる「反り熨斗瓦」で、外面（表側）の下半部に黒色の釉薬が施されている。左側の端部付近には円形のいわゆる釘穴（瓦を固定するために用いる孔）がけられている（外面（表側）は直径0.5cm、内面（裏側）は直径1.0cmほど）。

熨斗瓦には、半分に割って用いられる割熨斗瓦とそのまま用いられる丸熨斗瓦があるが、本資料は釘穴がひとつしかないことやその位置関係等から、割らずにそのまま用いられた丸熨斗瓦であると考えられる。本資料は釉薬が施された下半部が外側に向くように積まれたものと想定されるが、本資料の来歴や出土地等が不明のため、この熨斗瓦が具体的にどのような建築物に用いられていたものなのかについては残念ながら明らかではない。（久慈）



## 鉄鉱石

1点

Iron ore produced in Anshan Iron Mine in Manchuria

20世紀  
史料館No.316 | ラベルNo.1369  
地理231 | 鐵礦石 | 大正14年(1925)9月7日 | 鞍山製鉄所/寄贈

満洲における鉄鉱石の埋蔵量は、満洲国時代の推計によれば12億tといわれる。鞍山鉄山は、1909年に行なわれた満鉄の地質調査によって偶然発見されたもので、3億t強の埋蔵量があると推計された。1915年に「日支合弁鞍山鉄鉱振興無限公司」が設立され、以後は満鉄が実質的な経営を行なった（1933年に昭和製鋼所に吸収合併）。

鞍山の鉄鉱石の正式名称は赤鉄磁鉄石英片岩といい、貧鉄は含鉄品位平均35%、富鉄は50～60%、燐分0.02～0.1%、来雑物は主に硅酸である。本資料の含鉄品位は40%であり、貧鉄に属す。そのままでは溶鉄炉に入れて製鉄することが出来ないため焙焼還元法による加工が必要である。（長谷川）



## 焼結鉱

少量

Sintered ore from Anshan Iron Works in Manchuria

20世紀

史料館No.172 | ラベルNo.1371

地理233 | 焼結礦 | 大正14年(1925)9月7日 | 鞍山製鉄所/寄贈

焼結鉱とは、粉末化された金属を融点以下の温度で加熱（粉末冶金）して塊状に加工したものである。満洲最大の鉄山である鞍山から産出する鉄鉱石の多くは貧鉄であるため、鞍山製鉄所では還元焙焼処理が施されていた。その過程を経た鉄鉱を還元焙焼鉄と称する。還元焙焼鉄はクラッシャー、ボールミル、チューブミルの各機械で数度にわたり細かく粉碎される。粉碎した微粒子は磁性鉱化されているため、磁力選鉱機にかけると含鉄品位50%以上の積鉄（富鉄）だけが抽出される。但し、微粒子状では溶鉄炉に入れることが出来ないため、さらに焼結処理を繰り返し、塊状になった焼結鉄が溶鉄炉に運ばれ製鉄される。（長谷川）



## 還元焙焼鉄

1点

Beneficiated magnetized roasted ore made at Anshan Iron Works in Manchuria

20世紀

史料館No.317

地理232 | 還元焙焼鐵 | 大正14年(1925)9月7日 | 鞍山製鉄所/寄贈

満洲・鞍山で産出する鉄鉱石の多くは磁性の弱い赤鉄鉱で、かつ貧鉄（含鉄品位平均35%）である。製鉄には含鉄量50%以上が必要であるため、鞍山製鉄所は1926年に「還元磁化焙焼法」を発明し、貧鉄からも製鉄することが可能となった。その方法は、直立式の炉の上部から処理する鉄鉱を入れ、降下させながら熱し、炉底から噴出する還元ガスと混ぜ合わせるというもので、この処理によって赤鉄鉱は磁性鉱化し、同時に質が脆くなる。この処理が施された赤鉄鉱を「還元焙焼鉄」と称する。（長谷川）



## 撫順露天掘採集石炭

1点

Coal found in Fushun, China

年代不詳

史料館No.315 | ラベルNo.1366

地理230 | 撫順 露天掘古代高麗焼カマ跡/石炭 | 大正14年(1925)9月7日 | 金田鬼一/寄贈

撫順は、遼寧省北部・奉天（現在の瀋陽）の東方約45kmに位置する街で、豊富な石炭を産出する地として知られている。撫順における石炭採掘は12世紀頃、高麗人によって開始されるが、モンゴルの侵攻で高麗人が南部へ放逐された後は満洲地域の住民によって細々と採掘が行なわれるに過ぎなかった。19世紀末にロシアが採掘権を清から獲得し、日露戦後、日本が満鉄の傘下に炭鉱を経営した。炭質は長炎濃青炭で、揮発分に富み発熱量は良質である。付属札には「古代高麗焼カマ跡/石炭」とあるが、露天掘との関係は不明。（長谷川）





## 中国貨幣・齊法化鑄型片

一括

Chinese brass coins, Han Dynasty-Qing Dynasty  
Coins shaped like opened straight razors and farming tools,  
Warring States era and Xin Dynasty  
Fragments of the "Qi Fu Hua" pottery mold, Warring States era

①漢〜清 ②戦国・新 ③戦国

史料館No.①318, ②156, ③271・272 | ラベルNo.②1243 ③1363

②歴史42 | ②支那古刀及布貨標本 | ②大正13年(1924)9月3日 | ②島津製作所/購入(20円)

①は漢から清朝に至る約2000年間の中国貨幣標本である。4枚の台紙に貼られた円型貨幣は118枚。②は戦国時代の刀銭2点、布銭2点(河北・河南・山西省にあたる地域で製作されたもので、鋤を象っており発行地が記されている)及び王莽の新王朝の「貨布」の字を持つ布銭のセット。島津製作所製(→コラム9)。③は刀銭の陶範(陶製の鑄型)で「齊法化(「化」は「貨」の意)」の文字がみられる。戦国時代の斉国でつくられたものである。

秦王朝が成立すると、銭貨は円形方孔の半両銭に統一された。漢代でも四銖半兩銭等が鑄造されたが、盗鑄による悪銭の増加のため、武帝期になると新たに五銖銭が発行される。五銖銭は漢の滅亡後、隋に至るまで繰り返し改鑄されて用いられ続けた。

五銖銭の後継となったのが、開元通宝である。唐の冊封体制の拡大とともに海外へも伝播し、日本の皇朝十二銭のモデルとなった。

経済が著しく発達した宋代の貨幣鑄造量は歴代王朝中最多を誇る。宋銭は種類も豊富で、「元号+元宝(通宝)」という銭文の形式が確立した。アジア全域に流通し、日本へも日宋貿易を通じて大量にもたらされ、皇朝十二銭廃絶後の貨幣経済を支えた。

南宋以後の銅の減産、明代におけるメキシコ銀の流入により、紙幣と銀が取引の主体となると、銭貨は補助貨幣となり、鑄造量は激減する。とはいえ、清においても歴代元号を頂いた銭貨が発行されており、人々の経済活動には不可欠な存在であった。

①には、中国以外の銭貨も含まれている。朝鮮半島では長らく布を貨幣として使用していたが、李朝時代の経済発展とともに銭貨の需要が高まり、常平通宝が発行される。清の銭貨にならった真鎰質で、大きさ・金額の異なる数種が鑄造された。裏面にみえる「戸」は、鑄銭所である戸曹を示している。

寛永通宝は、江戸時代の日本で広く流通した銭貨である。銅製のほか、真鎰製や鉄製のものがあり、一文銭と、裏面に波の文様を持つ四文銭が発行された。300〜400億枚鑄造され、渡来銭を駆逐し、逆に銅の枯渇する中国へ輸出されるに至った。(青木)





## 殷代環首刀模型

1本

Knife modeled on a knife excavated from a site of the Yin dynasty, made of bronze, Qing Dynasty

清

史料館No.158 | ラベルNo.1355

歴史59 | 殷代 銅刀 | 大正14年(1925)6月27日 | 矢島透/購入(8円)

殷代の遺跡より出土した小型の青銅刀を模したものである。柄に輪を持った環首刀<sup>かんしゅとう</sup>という形式で、殷代全期間にわたって作製された最もポピュラーな類型である。

環首刀は鑿<sup>のみ</sup>や鋸<sup>のこぎり</sup>とともに出土する事例が多く、主に生産工具として用いられたとされる。刀身の峰の方が薄くなっており、木材等を刃に当て、押し出すようにして削ったのだらう。後代、木簡の文字を削る際に使用した削刀に似ており、削形刀とも呼ばれる。

殷墟出土の青銅刀は、中国北方地域のものとの類似性を指摘されており、戦利品や貢納品として殷王朝へ伝わったと考えられる。  
(青木)



## 対華二十一条条文飾り扇子

1本

Chinese anti-Japanese propaganda written on folding fan, ink on paper

20世紀

ラベルNo.1381

歴史71 | 扇子(排日宣傳用) | 大正14年(1925)9月14日 | 金田鬼一/寄贈

対華二十一条は、第一次世界大戦中の1915年に、山東省の旧ドイツ権益の継承、満鉄権益保持期限の99年延長等を日本が中華民国に対して要求し受諾させたものである。列国の目が欧州の戦乱に向いている隙に中国へ苛烈な要求を行なったこともあり、中国国内の反日感情に火を付けた。日露戦後から徐々に高まりをみせていた利権回収運動は、この時から激しさを増した。本資料には、日本による二十一条要求条文の中国語訳が記されるとともに、遼東半島先端にある旅順の絵が描かれている。旅順は、日露戦後に日本がロシアから租借権を引き継いだ街で、市街地南部に設けられた軍港の軍事的な価値は非常に高い。同条文には、大連とともに旅順の租借期限を99年間延長することが盛り込まれていたことから、日本の帝国主義的な要求を象徴するイメージとして扇子の意匠に取り上げられたのであろう。寄贈者である金田鬼一はグリム童話を日本に紹介したことで知られるドイツ文学者で、当時は学習院高等科の教授を務めていた。ドイツ文学者の金田がこうした博物資料を入手した経路は不明ながら、実父が帝室博物館の職員であったことと関係する可能性もある。  
(長谷川)



(条文)



(地図)

## 太王陵出土太王陵銘条磚

1点

Brick tile with inscription, excavated from the tomb of King Kwanggaet'owang of Koguryō

高句麗

史料館No.125, 126

太王陵は、現在の中国吉林省集安市、通溝盆地中部の禹山南、鴨緑江北に位置する。洞溝古墓群に含まれる大型積石墓で、墓の規模は一辺が65m、高さは14mである。墓主は高句麗第19代の広開土王（好太王）との説がある。本資料は「願太王陵安如山固如岳」（太王陵〔陵〕が山のように安寧で、岳のように強固であることを願う）と隸書体の銘文が型押しされていることから、太王陵の磚であることがわかる。太王陵銘条磚の銘文には「陵」と「陵」の2種があるが、本資料は後者の完整品である。太王陵の東北200mの所に広開土王碑があり、付近の將軍塚を含む一帯は世界遺産に登録されている。『原簿』には出土地及び来歴等の記載はない。学習院には「広開土王碑拓本」も所蔵されており、本資料とともに、その入手ルートは明らかではないが、明治期の白鳥庫吉の集安訪問と関連している可能性が高い。（村松）



## 新羅焼片耳付広口壺

1点

Jar with one ear, Silla earthenware, Three Kingdoms period

三国

史料館No.252 | ラベルNo.154

歴史154 | 百濟焼（昭和二年八月十日）朝鮮慶尚北道慶州兩班襄基潤邸内発掘 | 昭和10年（1935）10月24日 | 有馬華子/寄贈

新羅土器（新羅焼）は朝鮮半島南部の嶺南地方の古墳で出土する灰青色硬質土器（陶器）を示す。精選された胎土を使い、1000℃以上の高熱を出す登窯で焼成した土器である。轆轤を利用し、大量生産がなされた。新羅土器の基本器形には高い脚の付いた高坏と長い頸を有する長頸壺がある。新羅土器は原三国時代後期（3世紀）にはみられ、洛東江を境に新羅群（慶州土器）と伽耶群に大別される。長頸壺については、新羅群は台の付いたものが多いが、伽耶群はほとんど無台円底とされる。伽耶の土器は日本の須恵器の誕生に直接的な影響を与えたと考えられている。資料は無台円底の長頸壺で、把手を有する。底面のラベルには「慶州兩班襄基潤氏邸内出土 昭和2.8.10 有馬喬雄寄贈」とある。慶州は古代新羅の都である。『原簿』には「百濟焼」とあり、昭和10年10月24日に有馬華子の寄贈によるとある。華子の夫は大正天皇の侍従で、明治41年（1908）には、皇太子の韓国訪問に随行した有馬純文。純文・華子夫妻の子、喬雄は大正7年（1918）生まれで、寄贈時には9歳。学習院初等科に在籍していた。（村松）





## 珠文縁重弁十六葉蓮華文軒丸瓦片

1点

Roof tile with motif of lotus flowers and leaves, United Silla

統一新羅

史料館No.15-37

本資料は軒先に用いる瓦で、瓦当（先端の円形部分）の下半分及び筒部後半が欠損している。ほぼ同型の完全な形の瓦が新羅の東宮（太子の居所）の雁鴨池（月池）から発見されており、本品の出土地も慶尚北道慶州市である可能性が高い。雁鴨池は7世紀後半、三国を統一した新羅の文武王によって王宮（月城）の東に建設された。三国時代の新羅において瓦当に蓮華文が施されるようになるのは、仏教公認以降の6世紀半ばからである。本品は瓦当の縁に蓮珠文があり、その内側には蓮の花と葉の文様が二重に配され、花卉の内部には子葉が刻まれている。三国時代よりも精巧なデザインは、唐の文化の影響を受けた統一新羅時代の文物であることを示している。本品では欠損してわからないが、雁鴨池の出土品から、この瓦当の中心部にも蓮珠文が配されていると考えられる。どのような経緯で、いつ学習院に収蔵されたのかは不明である。（村松）



## 弘慶寺跡出土瓦片

2点

Roof tiles excavated from the site of Honggyōngsa, Koryō period

高麗

史料館No.①36, ②45

弘慶寺は韓国忠清南道安市に位置する。高麗時代の顯宗12年（1021）に完成した。完成時に先君の意を奉ずるという意味で奉先弘慶寺と称される。現在、寺院の跡には、寺の創建に関する記録を記した「奉先弘慶寺碑碣」（顯宗17年〔1026〕立碑）のみが残る。韓国の国宝に指定されているこの碑によれば、元々この土地は人の住むところから離れ、葦の生い茂る沢（池）があるような未開発の地で、盗賊がしばしば現れたという。ここは国内の各地へと繋がる要衝に位置したが、人々の往来は困難であった。そこで、顯宗は仏法を開き、道行く人を保護するために、奉先弘慶寺と広縁通化院という客館を建てさせたという。碑文は、高麗時代の儒学者・崔冲の撰、白玄礼の書である。この高麗時代の弘慶寺付近にて採取した平瓦片と丸瓦片が本資料である。平瓦片には「成歡弘慶院 June.14」、丸瓦片には「稷山成歡弘慶院」と墨書がある。また、寄贈時の札には、「朝鮮ノ古瓦／二片／西曆紀元一千二十一年ノ作ナリト云フ／二片共布目アリ／大正五年九月十四日寄付／弘慶寺ハ高麗王顯宗即位十二年竣工スト云フ。／忠清南道天安郡成歡面弘慶院里ニアル弘慶寺ノアトヨリ掘出シタルモノ／寄贈 清水元太郎」とある。（村松）



①表



①裏



②表



②裏

## 朝鮮家屋模型

1台

Model of traditional Korean house showing the structure of a floor heater

大正

史料館No.292

地理1 | 温突 | 大正12年(1923)5月1日 | 購入(83円60銭)

この模型は伝統的な朝鮮家屋における温突(オンドル)の仕組みや部屋の様子を説明したものである。温突とは、朝鮮特有の暖房装置のことであり、竈で煮炊きする熱気を床下の煙道(ヨンド)を通じて各房の暖を取れるようにした仕組みである。伝統的な朝鮮家屋では床上に油紙を貼り、床下に木や石を組んで各房につながる数条の煙道をつくり、その中を竈の熱気(煙)が通るようにしている。竈の焚口の反対側には大きく深い穴を開け、その上に煙突を立てることで煙を外に逃している。

本資料では、前方に焚口を設け、奥に赤い煙突を立ててあるのがみられる。床には油紙を再現したと思われる様子もわかる。さらに、蝶番によって左右に開閉出来ることで煙道の構造を確認することが出来るようになっている。また、朝鮮家屋においては、外を石壁で囲い、内には細木を組み土で固めた壁をつくり、油紙を貼るのが一般的だが、この資料ではその内部がわかるようになっている。(齊藤)



## 朝鮮農民風俗人形

2体

Clay dolls of Korean farmers

明治~大正

史料館No.21

朝鮮の農村の風俗をあらわした土製人形である。男性像は首と腕部分に破損がみられ、頭頂部を欠き、果物籠を背負っている。台座の裏には「正貨五拾五銭」と書かれた貼紙がある。女性像は頂部を欠失する。乳房を出し子供を肩に載せており、子育て中の女性の姿を表現している。

世界の風俗をあらわした人形は、博多人形師井上清助や島津製作所が製作したものが知られている。特に井上が製造・販売した学校用教材「井上式地歴標本」は、博多人形としての品質向上を追求したばかりでなく人類学者坪井正五郎の監修を受けており、工芸品としても標本としても高い評価を得た。本資料はこれらと比較して精彩に欠けることから、土産物として製作されたものである可能性がある。

なお、本資料と同形のものが大阪市立愛珠幼稚園に収蔵されているが、園所蔵の男性像は、果物籠ではなく薪を背負っており、女性像は頭頂部に籠を載せて片方の手でそれを押さえている。(佐々木・橋本佐)





## 朝鮮木靴ミニチュア

1足

Korean miniature wooden shoes, hollowed from a naturally grown tree

年代不詳  
史料館 No.81

木靴のミニチュア。現地では「ナマクシン」と呼ばれる。一本の自然木を刳り抜いて成形されていて、側面に花卉文を着彩する。裏面にはそれぞれ2枚の歯があり、どちらも鉛筆で「十文」と書き込まれている。

本資料の木質は不明だが、実物はヤナギかカワラハンノキを用いてつくられるのが一般的である。雨の後に泥道を歩く場合に使用するもので、荳油や蠟を塗って防水加工を施した。

本資料と同形のものが大阪市立愛珠幼稚園に収蔵されている。  
(佐々木・橋本佐)



## 竹筏模型

1艘/櫂1具

Model of catamaran from Taiwan, a sailing raft made of bamboo, wood, cane, linen, etc.

年代不詳  
史料館 No.79

船体は15本の竹系の素材を籐で結びつくられている。帆柱と6本の櫂は木製である。帆は籐の皮を編んだもので出来ており、縁には麻布が用いられ、9本の竹製帆桁を使用している。

「竹筏」は大竹の幹を用いてつくった大型の筏船で、台湾に特有のものである。大きく分けると海岸用と河川用があるが、いずれも水中に没入する部分が少なく浅瀬を自由に航行出来る特徴を持つため、主に岩石の無い海岸や流れの緩やかな河川で用いられる。

久保杉葉著『台湾土産』（1928年発行）は、竹筏が並ぶ当時の台湾の港の雰囲気을伝えている。「他所では見られない 名物の竹で造った筏 テツパイと謂ふのがある 丸竹を編んだ簡単な筏船で、其に乗つて 何の危険もなく大洋遠く漁に出かけるのだ想だ 外に赤色や 青色や 彩式した玩具の様な船が沢山港内に浮んでゐるのは美事だ」。

本資料と同形のものが大阪市立愛珠幼稚園に収蔵されている。  
(佐々木・橋本佐)



## 台湾産蛇木

1点

Cyathea lepifera (flying spider-monkey tree fern) from Taiwan

大正

史料館No.73 | ラベルNo.1173

地理81 | 蛇木 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(1円)

島津製作所から購入した台湾物産標本。「蛇木」は現地では「筆筒樹」と呼ばれる大型の常緑木性シダ植物で、和名を「ヒカゲヘゴ」という。「蛇木」の呼称は、落葉した痕が蛇の鱗のような文様になることに由来する。日本の奄美大島以南、台湾、中国福建省、フィリピン等に生息しており、日本では国内最大のシダ植物である。

台湾先住民族のヤミ族は、この木の樹液を洗髪剤にしたり、幹を灌漑用の引水管や釣針にしたりする。また天候不順や洪水等の際には食料にすることもあり、多様な使い方が出来る植物である。

(佐々木・橋本佐)



## 台湾産苧麻

1束

Ramie from Taiwan

大正

史料館No.87 | ラベルNo.1175

地理83 | 苧麻 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(50銭)

島津製作所から購入した台湾物産標本。「苧麻」はイラクサ科の宿根草の植物。茎からは良質な繊維が採れるので、東アジアの国々では古くから衣服用織布の材料として利用されてきた。

大正期、苧麻繊維の生産業は従来の手紡ぎ家内工業から紡績会社の設立へと移行していった。これに伴って苧麻の需要量は飛躍的に増大した。

(佐々木・橋本佐)



## 台湾蘭草製下駄表

2枚

Cover for Japanese-style geta sandal made from woven rushes, made in Taiwan

大正

史料館No.203 | ラベルNo.1401

地理254 | 太甲蘭下駄表 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(2円50銭)

下駄表とは、下駄の表面を覆うものである。箱の題箋には「下駄表 台湾新竹州苑裡街苑裡名産物太甲蘭製品」とある。

「太甲蘭」は三角蘭の別称で、カヤツリグサ科の多年草である。海岸等の水辺に群生し、蘭草とよく似た特徴を持つ。台湾の苑裡・太甲地域では19世紀初頭から農業の余暇に製作するものとして太甲蘭製品が多く製造されるようになった。代表的な生産品は帽子であったが、日本領有化以降は煙草入や紙入等もつくられるようになる。下駄表がつくられ始めたのもこの頃のことである。

(佐々木・橋本佐)





## 台湾蘭嶼ヤミ族帽子

1点

*Sakop*, men's hat of Yami people in Taiwan, made from coconut and cane

大正  
史料館 No.68

ヤシの実の殻を半分にしたものの周囲に、籐で編んだツバを付けた男性用の帽子サコップ。ヤミ族の使う帽子の中では、最も簡略なものひとつで、日常的に使用されるものである。儀礼用の特別な帽子は現在でも使われているが、こうした普段用の帽子は今ではあまり目にすることが出来なくなった。この帽子で注目されるのは、ヤシ殻の利用ということだろう。ヤシ殻は水の運搬、保管に使われるだけでなく、例えば敷地を掘削して土を排出する時に、ヤシ殻の一部を頭にのせて頭部の保護とし、運搬用の木皿に土をのせてそれを頭上で運ぶということが行なわれてきた。この帽子は、そうしたヤシ殻の利用体系の一部なのである。また、全体として編み笠のように三角錐に近い形になるが、こうした帽子が素材を銀に変えることで、儀礼用の最上級の帽子ボランガット (*volangat*) が生まれたと考えることも可能だろう。

付属札には大正4年(1915)3月25日に船橋光次郎が寄贈した旨が記されている。(乾)



## 台湾蘭嶼ヤミ族土製人形

2体

Clay dolls of man and woman, made by Yami people in Taiwan

大正  
史料館 No.228 | ラベル No.②301  
地理301 | 紅嶼島土製人形 | 昭和8年(1933)3月1日 | 板澤武雄/[寄贈]

ヤミ族は、男が土器をつくる。ヤミ族の暦でピタナタナ (*pitanaatana*)、もしくはパルポトウン (*pazpotoen*) と呼ばれる月(新暦では9月頃)が土器をつくる時期である。専門家はいないので、各自が必要な甕型や碗型の土器を野焼きでつくった。そうした時に、余った粘土で人形タオタオ (*taotao*) 或いは動物、舟等をつくり、土器と一緒に並べて焼くのである。もとは、自らの楽しみ、子供の玩具ためであるとされるが、日本時代になって土偶のような素朴さが知られるようになると、交易品、観光客の土産物としての需要が生じ、その目的で製作されるようになった。

標本は男女一対となっているが、大きさも不揃いであり(大きい方に乳房がつくられているので女性と思われる)、当初から一対のものとしてつくられたものであるかは疑問である。しかし、こうした男女の人形は、東南アジアではしばしば信仰上の目的(神像、祖先像)としてつくられることが多い。ヤミ族にそのような伝承はないが、早くに意味の失われた文化要素である可能性は十分考えられる。(乾)



## 千里眼・順風耳立像

2体(一対)

Pair of wooden statues of Chinese gods "Senri-gan" and "Jumpu-u-ji"

清  
史料館No.43 | ラベルNo.②302  
地理302 | 塑像(千里眼ト称ス) | 昭和8年(1933)3月1日 | 板澤武雄/  
[寄贈]

左手を額にかざして遠くを眺めるのが千里眼、右手を耳に添えてかすかな音も聞き逃すまいとするのが順風耳。いずれも航海の女神媽祖とともに祀られる中国の神である。千里眼は宇宙の万物をみることが出来、順風耳は世間のあらゆる音を聴くことが出来るという。ともに恐ろしげな表情をしているのは魔物を除けるためである。中国、台湾のほか、長崎等中国人が建てた寺にみられる。

いずれも木造、一材製。但し、丸彫かどうかは不明。両足首で台と接合しているかもしれない。胸と腹を露出するベストのようなものを着て、裙をはく。現状、漆箔を施すが、千里眼は青、順風耳は赤いからだであるといい、補修された可能性がある。千里眼は戟、順風耳は斧を持つのが普通だが、亡失する。

この像は板澤武雄が寄贈したものである。板澤は早逝した父の友人で『台湾文化誌』の著者である伊能嘉矩氏の下に中学時代から下宿し、弟子となった(→コラム1)。この2体の像は台湾からもたらされたものかもしれない。制作は清時代とみられる。

(浅見)



## 土製蓋付壺

1合

Lidded pot from Siam (present-day Thailand), pottery

20世紀  
史料館No.10 | ラベルNo.307  
地理307 | 暹羅土人釜 | 昭和8年(1933)7月5日 | 原田穀穂/寄贈

胴の丸い広口の素焼き壺で、つまみを有した蓋を伴う。茶陶として水指や建水等に見立てられた、いわゆる「ハンネラ」の壺型を呈する。口縁部は短く外反し、胴部との境に不明瞭な沈線が一条巡る。口唇内面は受け口状に浅く屈曲するが、伴う蓋は口径より2cmほど小さいことから、蓋を受けるためのものではないようである。胴部～底部外面は丁寧な横方向のナデ調整が施されているが、胴部下半の最大径付近に叩き具による調整帯があることから、ここで合体成形された可能性が考えられる。器壁は2mmと非常に薄く、胎土は赤褐色を呈し、0.5～1mmの雲母、石英、長石等を含む。

身蓋とも外面はススけており、外底面にはコゲが目立つ。また胴部上半には吹きこぼれ痕が顕著で、内底面付近には灰白色の微粒子状の付着物がみられることから、実際に炊飯等に使用していたことが推測される。現在のタイ周辺で製作されたものであろう。

なお、胴部中位には直径2mmほどの外側からの焼成後穿孔がひとつ認められ、「歴史地理標本室307」ラベルにより塞がれているが、その意図は不明である。原田穀穂は図書館書記。(長佐古)





## 板澤武雄

板澤武雄は日蘭交渉史の研究で知られる歴史学者である。

板澤は、人類学者伊能嘉矩をはじめ、学界を牽引する多くの学者たちに囲まれて少年期を過ごした。大正5年(1916)に東京帝国大学に入学し、国史学を専攻した。卒業後は宮内省図書寮に勤務したが、その頃学習院教授であった大谷勝真に誘われて同10年に学習院講師となる。その翌年から約20年の長きにわたって学習院で教授を務めた。

板澤が学習院教授になった直後の大

正12年(1923)9月1日、関東大震災が発生した。板澤は焼失した標本類を新たに収集するために日本各地に足を運び、様々な工芸品類を購入した。本図録に掲載している工芸品類の多くは、この時に板澤らの努力によって収集されたものである。また、板澤自身が寄贈した資料として朝鮮・台湾の民族資料が数点含まれている。これらの寄贈年代は明らかではない。しかし大正14年に伊能が亡くなり、この時板澤は伊能旧蔵の民族資料を台北帝国大学に寄贈していることからす

ると、おそらく学習院にある資料も同時期に板澤が寄贈したものではないかと推測される。

板澤は学習院をはじめ、東京帝国大学や日本大学、成蹊大学等で教壇に立った。国史学ばかりでなくあらゆる問題に精通し、また学生の指導にも熱心に取り組んでいたという。帝大で同僚であった東洋文庫主事石田幹之助は後に「この点稀に見る方として常に敬服してをつた」と語っている。(橋本佐)

## 高松宮下賜資料

大正12年(1923)の関東大震災で学習院は授業用の図書・標本・機械類多数を失った。このため、各方面から教材等の資料を収集するとともに、皇族・華族からも寄贈を求めた。当時、海軍兵学校在学中の高松宮宣仁親王は上京、兄摂政宮を見舞うとともに学習院の被災状況

を視察し、皇子御殿所蔵の器具・書籍類84件を下賜した。下賜された資料は学内の博物学科・歴史地理学科等に配分されて、石鏃1件・日本内外の写真帖30冊・歴史地理関係絵葉書帖11冊・歴史掛図及び掛台123件・各種製品標本3件・各種模型2件等が歴史地理標本室に収蔵

された。さらにその後、昭和3年(1928)及び同8年の海軍遠洋航海演習で南洋方面に行った際に現地で献上された品々を、同11年に学習院に下賜している。(岡田)

## パラオ諸島アバイ模型

1点

Abai, meeting house model in Palau islands

昭和

史料館 No.294

地理 315 | 南洋土人家 | 昭和 11 年 (1936) 3 月 3 日 | 高松宮殿下/御下賜

パラオ諸島(現パラオ共和国)で年齢階梯毎の男子集会所・宿泊所用の大型建物として集落毎に建設されていたアバイの家屋模型。昭和 8 年 (1933) 7 月連合艦隊演習に参加して南洋庁が所在したパラオ諸島に寄港した高松宮宣仁親王への南洋庁献上品のひとつで、同 10 年度に高松宮家から学習院に下賜された(→ コラム 2)。家屋内部に「アバイ模型一個 北部総村長 テンレイ」と墨書された短冊形和紙の添紙が収められている。縮尺は不明ながら約 1/10 と推定される。

高床式で椰子葉葺きの大きな切妻造りの屋根を持つ長方形平面の木製家屋模型で、一本の蒲鉾形木製台上に並べた 5 本の横材の上に組まれた土居桁に桁行き 8 本、梁行き 4 本の柱を立て、各面中央の開口部を除いて全体に板壁を回らし上端に長押を置く。屋根は周囲の柱ではなく、壁の内部に立てられた左右 4 本ずつの内柱上の虹梁と又首が支える。又首上端の棟木から左右に架けられた垂木上に椰子葉が葺かれている。両妻部は大きな破風板が立てられ、屋根の両端部には木製の覆い板が付く。柱・壁下端・長押・破風板・屋根妻覆い板等には各種の絵画・文様・記号が彫刻され、黄・白・黒・赤の 4 色に彩色される。特に正面破風板の外面にはパラオ諸島の始祖伝説の一節を描き、背面破風板にもそれに続く始祖伝説の一節とみられる絵が彫り込まれている。(岡田)





## マーシャル諸島武器

5点

Weapons in Marshall Islands, made of mangrove

昭和

史料館 No.312

地理317 | 南洋土人輸入(五本) | 昭和11年(1936)3月3日 | 高松宮殿下/  
御下賜

「献上品在中(朱書)(式個之内二) 東京市芝区西台町一 高松宮邸 石川別当心得殿行キ 南洋廳ヤルット支廳出シ」と蓋に箱書のある木箱に収納されている。昭和8年7月に連合艦隊の演習で当時南洋群島と呼ばれたミクロネシアのパラオ諸島にある南洋庁を訪問した高松宮宣仁親王に、南洋庁が管内の支庁で新調させた献上品の一部である。石川別当心得は石川忠吉で、高松宮家創設から長く宮家事務官を務めた。

南洋庁ヤルット支庁が置かれたヤルット島等のマーシャル諸島(現マーシャル諸島共和国)で新たに制作された槍5種類。①は穂先に逆鉤等の加工の無い槍で、穂先・柄末端ともに尖る。タ

コノキ製市松文様編物の握りに「Piter」と書かれた名札が付く、現地名か。但し、この形の槍は現地で一般的に「ウディル」と呼ばれている。②は二又の穂先をもつマングローブの一木製で、柄部にタコノキ繊維製の市松文様編物の握りが付く。穂の基部に「Luneto inimen Lobuin」と書かれた名札が結ばれている通り穂先が二又や逆鉤等、突起のある槍を現地名で「イニメン・ロブイン」と言う。柄の末端は本来尖っていたが、現状では運送の都合上か切断されている。③は穂先に鉤のあるマングローブ一木製で柄部にタコノキ繊維製の市松文様編物の握りがある。現状では穂先が先端から63.5cmで折損し、柄末端が切断されている。④も同じく両端を尖らせた槍で、マングローブ製、握りの編物が無い。⑤は太く短めの槍で、穂先と柄部は円形断面だが、穂元部は断面方形を呈し各稜に溝を穿ち22対と16対の鮫の歯が藤状の繊維で連結して埋め込まれ、土で固定されている。現地名「ラジャラチ」と呼ばれ、酋長専用の武器である。握りの編物を欠く。

(岡田)



## マーシャル諸島帆船模型

1艘(付属品付)

Model of boat with outrigger in Marshall Islands

昭和

史料館 No.293

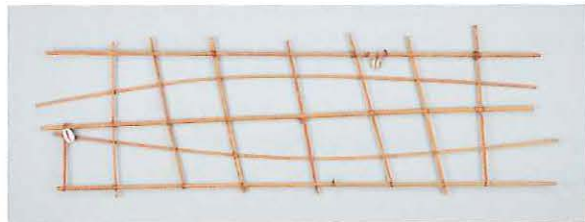
地理316 | 南洋土人舟 | 昭和11年(1936)3月3日 | 高松宮殿下/御下賜

檣とともに南洋庁ヤルート支庁から高松宮家に献上された「式個之内」に相当するもので、マーシャル諸島(現マーシャル諸島共和国)で制作された大型の舷外浮材付き帆船(アウトリガー)の模型である。縮尺は不明ながら1/10ないし1/20位であろう。

船体の両舷側の曲線は左右相称でなく浮材が付属する側の舷が丸みを帯びる。船体は一木の削り舟の上に左右の両舷板と首尾両端の削り材とを縄で繋ぎ合わせて構成し、丸みを帯びた舷板上から直角に6本の腕木を出して舟形をした浮材を連結し、腕木上に丸太を並べて緊縛し荷物置場とし、その上に船体の両側に張り出した板の間を構築してタコノキ製の倉庫を置き、反対側に同じくタコノキ製の敷物を丸めて置く。帆柱は船体外側の腕

木基部の立てられ、上下2本の桁に結ばれたタコの葉蓆製の三角形帆が付く。帆には三角形を連続させた文様が編み込まれており、酋長用の船を模した可能性がある。下桁先に付く鳥羽は本来には酋長用の船の帆柱先端に付けられた軍艦鳥の羽を模したものかもしれない。帆網は帆を帆柱に固定し、船首・船尾・浮材に結ばれている。付属品に既述の倉庫・敷物の他櫂1組(2本)・湊汲み・海図等がある。海図は0.5~1.1cm前後の細い木材縦8本、横5本を格子状に結び合わせたもので、縦38.0×横118.0cm、中央材の基部と端部材の2ヶ所に鳥の方向を示す宝貝が結び付けられている。

(岡田)





## ミクロネシア狩猟・漁撈具

21点

Implements for hunting and fishing from Micronesia, made of mangrove

大正

史料館 No.306 | ラベル No. ③ 1160, ④ 1161

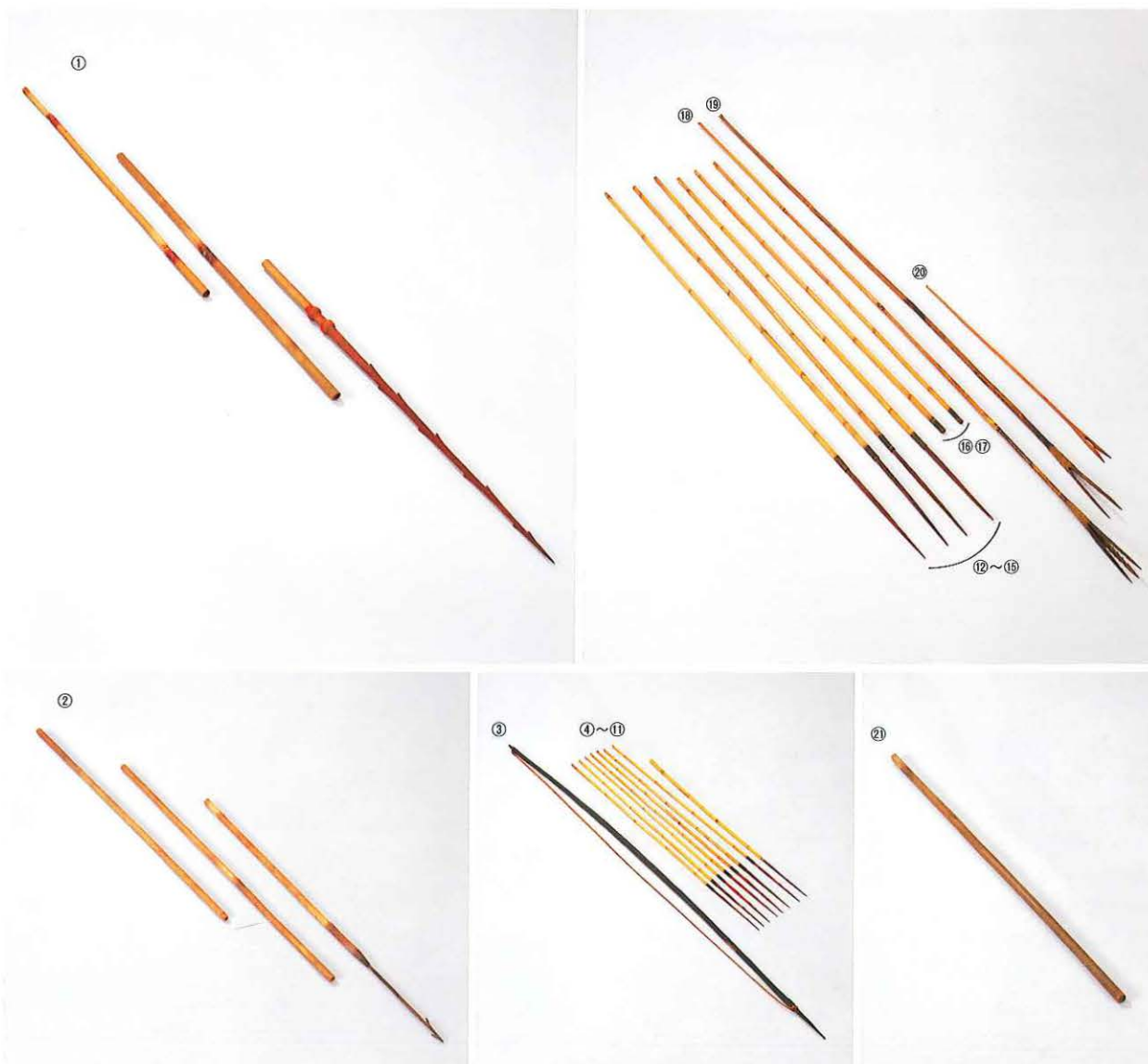
地理 68 地理 69 地理 70 | 南洋土人用竹槍 南洋土人用弓 南洋土人用矢 |

大正 13 年 (1924) 5 月 12 日 | 野村益三 / 寄贈

『原簿』では「南洋土人用」とだけ記されて委任統治領の南洋群島内の地域を明示していないが、パラオ諸島等の西カロリン諸島の産と推定される。寄贈者野村益三は学習院卒。幼少期から南洋について多大の興味を寄せ、第一次大戦後は南洋水産協会等を興した。

①はマングローブ製穂先に篠竹製の柄が付く鉈で、穂先に片逆鉤を刻みベンガラを塗り柄との接続部2ヶ所に土性材料で膨

らみを付けて固定する。柄は運送のためか3分割されている。②は片逆鉤のある鉄製穂先を篠竹製柄に挿入し土で固定した鉈で、同じく3分割されている。なお、『原簿』には「槍」と記載されている。③はマングローブ製の断面扁平な長弓で全体に黒く墨を塗り、籐製の弦が付く。「1160」と記された「歴史地理標本室」ラベルが貼付されている。④～⑪はマングローブ製の片逆鉤付き鏃を篠竹製矢柄に挿入して糸を巻き付けて固定しベンガラを塗った矢で、④に「1161」の「歴史地理標本室」ラベルが貼付されている。⑫～⑮も同じくマングローブ製鏃付きの矢だが、鏃に逆鉤が無い。⑯・⑰は鏃を欠いた矢柄。⑱・⑲は三叉の鏃のある矢で、3本の逆鉤付き鏃を糸で固定して柄に挿入している。⑳はマングローブ製二又の逆鉤付き鏃である。⑯・⑰いずれかの矢柄と組んでいた疑いもある。㉑用途不明の木製棒で樹種不明、麻紐2条が付属し、「歴史地理標本室」ラベル貼付痕跡がある。(岡田)



## ヤップ島石貨

1枚

Rai of Yap Island, Micronesia

年代不詳

史料館No.39

地理292 | 南洋石貨 | 昭和6年(1931)3月17日 | 購入(10円)

「ライ」または「フェ」と呼ばれるミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ島の石貨。伝統的な貸借関係や詫び等の気持ちをあらわすツールとして現在も使われている。その価値は大きさや重さとは関係なく、その石が運ばれてきたストーリーとそれを語る人の弁舌能力によっても変化する。大きさは直径30cmくらいの小型のものから3m以上の大きなものまで様々ある。石材の大部分はパラオの鍾乳石を切り出してカヌーで運ぶが、その労苦は大変なもので、それがまた石貨の価値を高める要因ともなった。大小となく、家の周囲や路傍等に飾りの様に並べられている様子はヤップ島独特の風景である。

(佐々木・橋本佐)



## ヤップ島首飾り

2連

Men's necklace from Yap Island, made of spondylus

昭和

史料館No.211 | ラベルNo.318

地理318 | 南洋ヤップ島カナカ族男子専用首飾 大型小型二種入 | 昭和11年(1936)11月17日 | 松田正之/寄贈

共箱蓋裏に貼付された紙には資料についての説明が書かれている。それによると、大きい方は「ガウ」と呼ばれるものである。ウミギク貝の赤い部分を若石大の円盤状にして穴を開けて連ね、クジラの骨で装飾する。一種の装飾品であるが、家宝として代々尊貴するものである。小さい方は「ツルワ」という。円盤状と短冊形に削られたウミギク貝で構成される。いずれもチャモロ族の副業として製作したものだとされる。チャモロ族はミクロネシア、マリアナ諸島の先住民族である。

松田正之は男爵で、昭和7年から翌年まで南洋庁長官を務めた人物である。

(佐々木・橋本佐)



## 貝製品

3点

Shell objects

年代不詳

史料館No.211

①タケノコ貝類は世界中に100余種類知られているが、太平洋諸島にはその多くが分布する。大型種の「リュウキュウタケ」の殻は貝斧に利用された。②シャコ貝製斧はヤップ島からポリネシアのクック諸島まで広い範囲にわたり出土する貝斧である。太平洋諸島では古くからシャコ貝を生活用品として利用してきた。③ウミギク貝製首飾りはツルワよりも一回り小さい。麻紐を軸に、106枚のウミギク貝を組紐で区切ってつくられている。(佐々木・橋本佐)





## 南洋特産物標本

1組

Specimen of products from southeast Asian Islands

昭和

史料館 No.108・52

地理 291 | 南洋特産物標本 | 昭和4年(1929)11月13日 | [南洋協会]/  
購入(18円)

東南アジアの産物標本。ひとつ目の標本セットにはチーク材やカポール材等が、ふたつ目には燕巣やサゴ椰子等が、3つ目にはゴム種やニッパ椰子実等が収められている。またその他に椰子の実、シュロ製うちわ、ニッパ椰子、籐の葉、ゴム、マングロー

ブの枝葉等が付属する。

南洋協会は、大正4年(1915)創立された団体で、南洋事業推進のために産業や貿易制度、風俗等の調査に当たった。官民の有力者の賛助を受けて発展し、後に商工省の委託を受けてシンガポールやジャカルタの商品陳列所の経営を行なう等、南洋諸島各地で活動した。付属する説明書によると、この標本は小中学校の児童に海外知識を教授し海外雄飛を鼓舞することを目的として作製されたものである。適当な代表的物産品の実物を標本にして、写真や説明書とともに実費頒布した。(佐々木・橋本佐)



## ココヤシ葉製籠

3点

Basket made from coconut leaves, widely used in the Pacific region

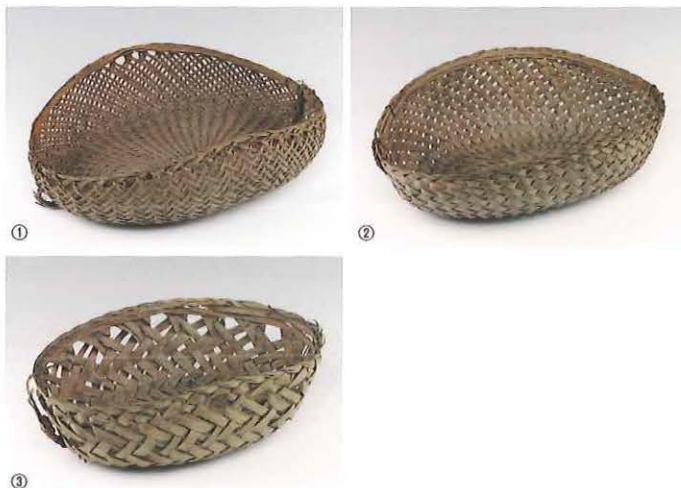
年代不詳

史料館 No.133

ココヤシ葉でつくられた籠。大中小の3点ある。いずれも底面に組込があり、ザル編みになっている。

ココヤシは太平洋地域に広く分布しており、食料或いは生活材料として余すところ無く活用出来る植物である。東南アジア諸島に暮らす人々にとっては生活必需品であり、ココヤシ葉で出来た籠は、衣類入や雑貨入等として日常的に使用する。

(佐々木・橋本佐)



## パラオ諸島木皿

2枚

Wooden round tray and wooden oval tray, used in Palau Islands

大正

史料館 No. ①83, ②152

パラオ諸島で用いられる木皿。学習院庶務課作成の寄贈品帳簿『寄贈品取扱簿甲』に南洋庁から大正14年(1925)5月13日に「食器(木皿) 式枚」を貰い受けたことが記されている。おそらくこれは本資料を指しているのだろう。①円形の皿は平底で、底面に割損がある。内部に「デラケルル」と鉛筆書がある。②楕円形の皿は高台があり、飾り紐を付属する。全体に赤土で塗装されている。いずれも一木を刳り貫いて製作されており、縁の上部には貝の象嵌が施されている。パラオ諸島では円形に近い形の皿を「オルシャール」、楕円形の皿を「オガル」と呼ぶ。どちらも食品を盛る食器で、オルシャールはパラオ島の主食であるタロ芋やパンノキの果実を、オガルは魚を盛る際に用いる。(佐々木・橋本佐)



## ポーンペイ島腰蓑

1領

Grass skirt from Pohnpei Island, made of hibiscus bark or coconut leaves

大正

史料館 No.75

地理288 | 南洋土人衣服及用具 | 大正15年(1926)9月2日 | 愛知縣立明倫中学校附属博物館/寄贈

靱皮製の腰蓑。上縁の紐に垂緒を並べて植え付けている。付属する標本札には「婦女ノ腰被 南洋ボナペ島婦人ノ腰部ヲ覆フモノ 大正四年八月持参 河村信一寄贈」とある。河村信一は旧制第八高等学校(現名古屋大学)教授である。大正4年(1915)、高等学校学生らの南洋視察旅行に、引率者として参加した。その際、パラオ島の大酋長婦人から腰蓑をもらい、明倫中学校で行なった講演会の時に披露している。おそらく本資料がそれに相当すると思われる。明倫中学校附属博物館を経由して学習院に移管されたものであろう(→コラム3)。(佐々木・橋本佐)





## カンジキ

2足

Hokkaido Ainu wooden snowshoes

明治～大正

史料館No. ① 135・136, ② 137・138

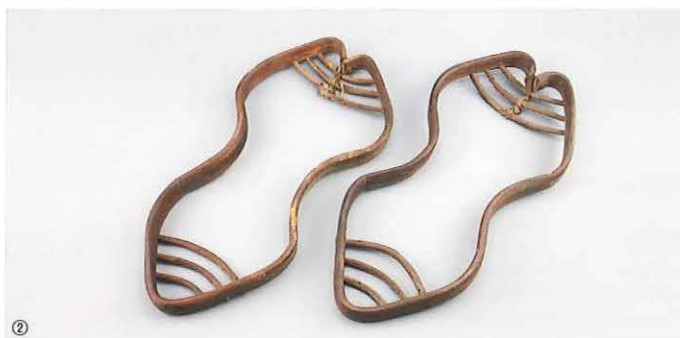
地理 286 | 北海道アイヌ人衣服及用具 | 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日 | 愛知  
縣立明倫中学校附属博物館 / 寄贈

アイヌ民族の木製カンジキ。楕円形のものと瓢箪形のものがある。

楕円形のカンジキはアイヌ語で「テシマ」といい、軟らかい雪を歩く際に用いる。ふたつの山型の本を上下に組み合わせて、それらを針金、紐で留める。留め穴が複数あり、その時々によってサイズを変えることが出来る仕組みになっている。瓢箪形のカンジキはアイヌ語で「チンル」という。こちらは堅い雪を歩く際に用いる。いずれも標本札が付属し、「ガンジキ 北海道土人ノ用具 雪上ヲ歩行スルニ用フ 本館備品」とある。「本館」とは愛知県立明倫中学校付属博物館のことを指す。 (佐々木・橋本佐)



①



②

## 鮭皮靴

1足

Hokkaido Ainu shoe, made from salmon skin

明治～大正

史料館No. 28

地理 286 | 北海道アイヌ人衣服及用具 | 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日 | 愛知  
縣立明倫中学校附属博物館 / 寄贈

鮭の皮でつくられた靴で、完成品と未成品がある。鮭皮靴はアイヌ語で「チェブケリ」と呼ばれる。「チェブ」は鮭、「ケリ」は履物を意味する。

完成品は内部を稲藁で成形し、麻紐を掛けている。爪先をシナノキの糸で括っている。それぞれ標本札が付いていて、完成品には「鮭ノ皮ノ靴 北海道土人雪上歩行ニ用フ 明倫中学校付属 本館備品」、未成品には「サケノカワグツ 北海道土人製品」とある。アイヌ民族は基本的には裸足で生活するが、雪上を歩く際にこれを用いる。靴の素材になる魚皮はサケやイトウ等で、川に遡上したものが良いとされる。背びれの部分が靴底の中央になるようにつくられており、滑り止めの役割を果たしている。

(佐々木・橋本佐)



## Hokkaido Ainu straw sandals, made from grape straw

明治～大正

史料館No.86

地理 286 | 北海道アイヌ人衣服及用具 | 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日 | 愛知  
縣立明倫中学校附属博物館 / 寄贈

ブドウの蔓で出来た草鞋。アイヌ語で「ストゥカプケリ」という。付属の札に「シュプケイレ 膽振国ムカハニテ得 Shu Tu Keire MuKaWa, in the Iburi province」とあり、北海道鶴川で採集されたものであることがわかる。

鶴川は日高山脈北部の狩振岳からむかわ町へ向かって流れる河川である。「ストゥカプケリ」はアイヌ民族が夏季に山野を歩く際に使用する履物。おおそ日本の草鞋と同形であるが、紐通しの穴が6つ付いているのが特徴である。これは足を保護するという目的よりも、これを履けば蛇が嫌がって逃げるといふ、蛇除けのまじないとして用いる。

(佐々木・橋本佐)



## Model of Hokkaido Ainu loom, used to weave the everyday clothing material unique to the Ainu

明治～大正

史料館No.77・80

地理 286 | 北海道アイヌ人衣服及用具 | 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日 | 愛知  
縣立明倫中学校附属博物館 / 寄贈

アイヌ民族の織機の模型で、アイヌ語では「アットゥシカルベ」。「アットゥシ」とはアイヌ民族の衣服である。「アットゥシ」の主材料はシナノキやオヒョウ等の樹皮繊維で、美しい独特の文様を織り込んでつくられる。整経の方法は分離整経式で、製織には輪状綜統と開口保持具を用いる。手動式のもので、織り上がりは四角形、地組織は平織である。

機械の部位の名称が付属する木製の標本札に書き込まれている。またその札には、アイヌ人「シクトル」の名が記されており、その来歴を明らかにしている。

(佐々木・橋本佐)



## Hokkaido Ainu arrow and quiver, made from wood, birch bark, cherry bark and bear skin

明治～大正

史料館No.289・290

地理 286 | 北海道アイヌ人衣服及用具 | 大正 15 年 (1926) 9 月 1 日 | 愛知  
縣立明倫中学校附属博物館 / 寄贈

木製の本体の上に樺皮を巻き、さらにその上に桜皮を巻いている。蓋部分は熊皮製。矢筒は、アイヌ語で「イカヨップ」という。矢は、下半分及び鏃を欠く。矢はアイヌ語で「アイ」という。付属する標本札の書き込みには、わずかに「イカ」の文字がみえることから、イカヨップと記されていたと考えられる。

(佐々木・橋本佐)





## Paddle with engraving of Hokkaido Ainu pattern

年代不詳

史料館No.321-12

柄の部分にアイヌ文様を彫刻する。「ペラ」とは匙、飯笥、織物の笥を指す。アイヌ民族は機織や漁撈、料理、儀礼等、様々な場面で笥を用いるが、本資料の用途は不明である。本資料は末松保和所用机の引き出しの中に入っていた資料群のうちの1点である。  
(佐々木・橋本佐)



### コラム 3

column

#### 明倫中学校付属博物館移管資料

「明倫中学校付属博物館」は明治33年(1900)に設置された尾張徳川家の私立中学校「明倫中学校」の付属博物館である。この博物館は同24年創立の「愛知教育博物館」を母体としている。愛知教育博物館は愛知医学教授奈良坂源一郎が会長を務める「浪越<sup>なみのり</sup>博物会」が設立した博物館で、実物実業について研究・公開することを目的とし、約1万5,000点にも及ぶ動植物の標本を所蔵してい

た。明倫中学校付属施設となった後も、県内小学校の修学旅行の見学地として利用される等、広く公開・活用された。

大正7年(1918)、明倫中学校は愛知県立となった。これに伴い同13年に校地を徳川家に返還することになったが、博物館は移転代替地を得ることが出来ず、閉館が決定した。一方、学習院は関東大震災により多くの教材資料を焼失したばかりで、日本各地へ資料の提供を募って

いた。同14年、学習院は徳川家当主徳川義親を通して愛知県へ問い合わせ、博物館の資料を貰い受けることとした。その翌年、博物館は惜しまれつつも閉館し、資料の一部は学習院へ送られた。

現在、学習院に残されているこれらの資料は、明倫中学校付属博物館の活動を今に伝える貴重な存在となっている。

(橋本佐)

## 石造菩薩坐像

1点

Seated *Bosatsu* (a Buddhist saint), made of stone年代不詳  
史料館 No.164

蓮弁形の輪郭の中に蓮台上に坐す菩薩をあらわす。菩薩は髻を結び、上半身裸で左肩から右脇腹をわたる条帛、左肩から腹まで垂れる紐を掛け、下半身に裙を着ける。へその下に裙の上端があるが、脚の形がかくれずにみえており、布が密着している表現とみられる。しかしその下端は明瞭でない。右腕は前膊を膝に乗せて手首先を外に垂らし環状のものを持つ。左腕は腰の外側の地面について、花の茎を取る。右脚を立て左脚をねかせて坐す。像の右方に七層塔をあらわす。

髻頂部と七層塔頂部の球形飾りに朱が残り、像表面のまだら状の色と石の色が異なるので彩色されていたらしい。

上脛の厚い容貌、やわらかな肢体の表現等からインド或いは東南アジアの作とみられる。小ぶりで、胸飾、耳や手の指等の彫刻は粗略である。近代の作だろう。(浅見)



## 石造宝冠如来立像

1点

Standing crowned *Nyorai* (a Buddhist saint), made of stone年代不詳  
史料館 No.165

上面と底面に柄穴<sup>はざ</sup>をつくり、背面は中央約15cm、幅で2cmほど突出し、左右は鑿で平らに整えているので、建築の一部だったとみられる。前面は方形無地の平面に蓮台上に立つ像があらわされる。像は頭部、両腕、膝以下が欠けており、名称を確定する根拠がないが、頭部上方が長く円筒形なので宝冠を戴くのだろう。耳飾り、胸飾りを着け、着衣が背後、脛脛まで覆うので、宝冠と装身具を着ける如来であると考えられる。ウエスト以下の腰の丸み、脚の形がくっきりとあらわれるのは裸なのではなく、布が体に密着している表現である。しかし、胸や腹の起伏、へその窪みはあらわさない。右腕は肘を曲げて掌を正面に向ける施無畏印、左腕は垂下して掌を正面に向ける与願印だったようだが、確定は出来ない。

制作地はインド或いは東南アジアだろう。時代の判定は困難である。(浅見)





## 盾

1点

## Buckler from Oman

年代不詳

史料館No.254

歴史48 | 阿剌比亜民族橋 | 大正13年(1924)9月4日 | 内藤智秀/購入(13円)

皮製。中央部が盛り上がった変わった形をした盾。表面には何重もの波紋が描かれ、十字型のふたつの飾り金具が施されている。裏面には持ち手があり、その両端に金属製のリングが付属する。

本資料はイギリスの帝国戦争博物館が所蔵する盾(資料番号EPH10004)と酷似する。この盾は1957年にオマーンの سلطان からイギリス空軍少将ロレンス・シンクレア(1908~2002)に下賜されたものである。このことから本資料もオマーン製であると推定される。

通常オマーンの盾は水牛やサイ、象等の大型動物の首部分の厚い皮からつくられ、銀(合金)の十字型の飾りが付けられる。剣や矢による攻撃をはねのけるために、このような円錐の形状をしているのだという。

内藤智秀(1886~1984)は西アジア史を専門とする歴史学者。外務省海外調査員として中東各地を外遊したのち、お茶の水女子大学や慶應義塾大学、國學院大學、聖心女子大学等で教鞭を執った。  
(橋本佐)



## ハンジャル

1口

## Khanjar Persian dagger, made of iron

年代不詳

史料館No.235

歴史50 | 古代波斯人武器 | 大正13年(1924)9月4日 | 内藤智秀/購入(16円)

鉄製。鞘、柄、刀身の根本に金メッキで植物文様が施されている。これはハンジャルという短剣で、中東各地でみられるものである。地方や民族によって様々な形状、呼称、文様を持つ。男性は、これを常にベルトに挟んだり掛けたりして携帯し、武器としてのみならず、宗教的・伝統的な儀式等の際にも用いた。現在でもイエメン等では成人男性がこれを身に付ける習慣がある。

本資料の製作地域は不明である。『原簿』に「<sup>ペルシヤ</sup>古代波斯人武器」とあることから、その名の通りイラン製とも考えられるが、但し「古代」のものではないだろう。  
(橋本佐)



## バークカヌー模型

1艘/楫1具

Model of bark canoe, originally made by North American Indians

年代不詳  
史料館No.74

付属する標本札には「南米土人用船形 吉田高春寄贈」とあるが、本資料は北米インディアンの船「バークカヌー」の模型である。

バークカヌーは1本の釘もボルトも使わずにカバノキの樹皮と木材だけで組み立てられる船で、大きいものでは全長6mほどになるものもある。川や海、湖等のような場所でも航行することが出来、その性能の高さは16世紀に北米に入植したヨーロッパ人たちを驚愕させた。次第に北米におけるヨーロッパ人の毛皮交易に盛んに用いられるようになり、毛皮交易会社の自社工場でもバークカヌーを製作するようになる。

バークカヌーは部族によってデザインやフォルムが異なるが、この模型はカナダ東海岸のマレシート族のカヌーに近い形状をしている。このように舳先と艫が低いカヌーは物の運搬に最も都合が良く、貿易にはよく利用された。（佐々木・橋本佐）



## 花蓆

1枚

Rug made from rush

明治～昭和  
史料館No.161 | ラベルNo.1258

藁草製の敷物。編組織は緯五枚縹子織、経糸は綿或いは麻とみられる。多彩に染められた極細の緯糸が緻密に織り込まれて縞や市松文様をなし、薄手で軽量である。『原簿』には大正13年(1924)9月22日に「印度人製敷物」を購入したという記録が残されているが、本資料に該当するかは不明である。角に付いた紫の飾り糸や、日本における敷物の標準的な寸法である一畳とはサイズが異なる点からも、外国製と考えられる。

本資料は、No.78の「<sup>ぼっかんさなだひも</sup>麦稈真田紐」と同時期に輸出品として岡山県で生産が盛んであった、花蓆を彷彿とさせる。なお、岡山の花蓆製造は、明治11年(1878)に都宇郡帯江新田村(現倉敷市茶屋町)の磯崎眠亀による<sup>いそがきかん</sup>錦莞蓆の発明が始まるが、その契機は、1873年のウィーン万国博覧会に出品されていたインド・セイロン産の<sup>うろうびんせん</sup>龍鬚蓆であったという。岡山の藁工業の説明資料として用いられたものか。（橋本旦）





# II

日本を知る

COME TO KNOW JAPAN

## 束帯（奏任官用緋袍）

1具

Sokutai formal dress, worn at a state ceremony at the Imperial Court of Japan

昭和

史料館No.295

歴史96 | 奏任官束帯（緋袍） | 昭和5年(1930)2月13日 | 宮内省／寄贈

昭和3年秋に京都で行なわれた昭和大礼に際して調進された、奏任官用の縫腋（文官用）緋の束帯。緋袍は五位の位袍とされてきた。奏任官とは、大日本帝国憲法下で首相・各省大臣の天皇への奏請により任用された高等官である。昭和大礼では紫宸殿の

儀に際し、庭上の司鉦・司鼓、弓・胡籥の威儀物捧持者を務めた人々らがこの束帯を着用した。大正大礼に比べて経費節約が唱えられ、冠服調製費が抑えられたが、一方で故実調査がなされ、成果が装束に反映された。大正大礼の折の奏任官の緋袍が紅色で、僧侶の法衣の色目に似ていたことから、昭和大礼ではこの袍の色目のように、故実に随い改められた。大礼に際しては予備の束帯が作製され、未着用の束帯が多数あったことを『昭和大礼記録』は伝えている。使用痕跡が認められないこの束帯は、昭和4年5月20日に宮内省大臣官房用度課から、繚袍等とともに学習院に保管転換されたものである（→コラム7）。（田中潤）





## 束帯（奏任官用標袍）

1具

*Sokutai* formal dress, worn at a state ceremony at the Imperial Court of Japan

昭和

史料館No.300

歴史97 | 奏任官束帯（標袍） | 昭和5年(1930)2月13日 | 宮内省／寄贈

標袍は六位の位袍として用いられてきた。昭和大礼では、紫宸殿の儀に際し、庭上の鉾・楯の威儀物捧持者を務めた人々がこの束帯を着用した。宮内省では大礼で着装にあたる衣紋方の育成のため衣紋講習を行ない、学習院からも3名が受講してい

る。大礼では当日の雨天や動作、発汗による汚損を考慮し、儀式毎に所役人数分の束帯が準備され、高等官用の束帯300組、判任官用の束帯85組が調製された。紫宸殿の儀当日と、大嘗祭の終了間近には小雨が降り準備が功を奏している。この束帯には汚損があるものの、緋袍同様に未使用で学習院に納められたと考えられてきた。今回の調査で、着装後の所作を容易にする「取り流し」という方法で袖口を縫い留めた標色の共糸が鱗袖に残存していることが確認された。併せて「取り流し」された状態で汚損したことが、袍に残る染みの痕跡から明らかとなり、大礼時の汚損かは定かではないが、着用に供されたことが確認された。（田中潤）



## 衣冠単 (奏任官用夏緋袍)

1具

Ikan formal dress, worn at a state ceremony at the Imperial Court of Japan

昭和

史料館 No.302

歴史98 | 奏任官衣冠単(夏) | 昭和5年(1930)2月13日 | 宮内省/寄贈

装束の地質を異にする夏用冬用の服制変更は、立夏・立冬を境として行なわれた。大礼は、紫宸殿の儀・大嘗祭を中心として秋に行なわれたため、着用の装束は冬用であった。しかし、大礼の準備は事前より進められ、夏季に行なわれる儀式も存在し、夏用として奏任官衣冠単が4組調製され、名古屋賢所仮殿及大嘗宮

地鎮祭の儀及び、齋田拔穂の儀の所役が着用した。京都皇宮で行なわれた大礼には賢所の動座があり、途中名古屋離宮(現名古屋城)に1泊の駐輦があったため、賢所仮殿が名古屋離宮内御深井丸に造営され、この地鎮祭所役が着用した。昭和3年8月5日には、京都皇宮仙洞御所内に造営された大嘗宮の地鎮祭の儀に掌典2名がこれを着用している。また滋賀県と福岡県に設けられた悠紀・主基の各斎田から大嘗祭に供される米を収穫する拔穂の儀は、同年9月16日、9月21日に行なわれ、掌典各1名が着用し執り行なった。この夏用の衣冠単もその折の一具と考えられる。(田中潤)





## 冠

3頭

*Kammuri crown, made of silk, worn at a state ceremony at the Imperial Court of Japan*

昭和

史料館No.297・298・301

昭和大礼の奏任官の束帯・衣冠単に伴った文官用の垂纓の冠3頭。冠の表面と纓の薄絹には文様が配され繁文の冠と呼ばれ、無文の遠文の冠と区別された。通常縹袍着用者は遠文とされるが、奏任官であるため縹袍でも繁文冠が用いられた。昭和大礼では所役の冠の文様が俵菱から四目菱に改められた。頭に直接戴き、紙縫を用いて着用する冠の性質上、硬質の冠は接触する額に負担がかかることから、額の部分にはゴムを入れて柔軟さをはかる等の工夫がなされた。大正大礼では、着用した者のほとんどにその装束を下賜したため、冠は着用する各人の寸法を調査して作製されたが、昭和大礼では期日切迫等の諸事情から、着用者が普段使用している帽子の寸法を問い合わせた。この冠は頭部の蒸れを除くために、前頭部が竹で編まれた籠目の透額とされているが、小雨の降った紫宸殿の儀では、庭上参役者の中にはここから雨水が襟元まで流れ込んだ者もいたという。

(田中潤)



## 挿頭

1本

*Kazashi, hair ornament, worn at a state ceremony of the Imperial Court of Japan*

昭和

史料館No.299

歴史100 | 挿華 | 昭和5年(1930)2月13日 | 宮内省/寄贈

元来は、冠の後方で髻を納めた巾子と呼ばれる部分の根元に、左右にわたされた上緒に挿しかけられた季節の花の折枝や造花のことを指した。大嘗祭や儀礼等に際し、参列する上卿以下が冠に挿したもので、今日でも葵祭では葵桂を冠の上記の部分に飾る等挿頭の古様が伝えられている。近世に至り、銀等の金属で折枝を模して作製された。近代以降は、即位礼の大饗に際し、天皇皇后へ悠紀・主基地方の風俗歌から取材した銀製の洲浜に載せて供進され、参列者にも賜った。この挿頭は昭和大礼に際して下賜された。意匠は御所の仁寿殿の梅と、清涼殿の呉竹・河竹に因んだ竹とを併せたもので、昔は辰の日と巳の日の節会に賜った古事により、2本を併せている。純銀で製作された折枝2本は、元を銀線で巻いて固定し、鞘の形の厚紙に金具で留められている。蝶鳥を描いた紅白紙の鞘で包み、本紅の水引で結んだ挿頭を紙箱に入れて賜った。

(田中潤)



## 鞆

1足

Kanokutsu boots, made of leather and silk, worn with Sokutai dress

昭和

史料館 No.296

歴史99 | 鞆 | 昭和5年(1930)2月13日 | 宮内省/寄贈

革製黒塗の深靴の一種で、「靴沓」とも書かれ、東帯の式正の際の履物とされる。通常の際に用いられる木製漆塗の浅沓に対して、節会等の厳儀に用いられた。元来は革6枚を縫い合わせたので六合靴の名称があり、騎馬用として足の当たりへの配慮から、上部に毛織物の氈を配した。氈は靴氈と称され、近代以降は赤地蟹牡丹文様の大和錦が用いられた。馬上からの靴の脱落を防ぐため、足首を皮帯で締めたが、靴全体が締めた状態で形式化して塗り固められると、靴帯も形式化し、込を内部に設けて足の当たりを和らげるのに用いた。昭和大礼では、大正大礼の際に鞆の美錠が歩行の際に摩擦して脱落した例がみられたことから、装飾として固着されることとされた。紫宸殿の儀では、挿鞋を用いた昭和天皇を除き、東帯を着用した皇族以下の所役は、殿上においても鞆を着用したが、これは、紫宸殿を石敷の大極殿代と位置付けた古制に則したものである。(田中潤)



## 竹製汗除肌着

1枚

Underwear made to protect clothes from sweat and to keep cool, made of bamboo

年代不詳

史料館 No.153

竹製の汗除胴着。発汗による着衣の汚損を避け、着衣下の通気のために着用された。節を除いた太さ2~3mm、長さ1cm弱の竹管に軽く捻りのかかった綿糸を通し、菱繋ぎの形態で組み上げている。襟・袖は無く、左右の胴部で前身頃と後見頃が繋がっており、その下には馬乗り(スリット)がある。胴部には2段にわたって亀甲文繋ぎが配されている。現在では、僧侶や神職が襦袢の上に同形態の簾製の汗除を使用している。(田中潤)





## 綿糸見本

1組

Specimen of 16 sizes of cotton threads

大正

史料館No.56 | ラベルNo.1228

地理136 | 綿糸標本十六種一組 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所]購入(5円)

この綿糸見本は島津製作所標本部の製作である。見本糸を収納する共箱の蓋裏には、全16点の内容に関する記載がみられ、糸の太さから、極太糸4点、太糸(3番糸)3点、中糸(2番糸)2点、細糸(1番糸)3点、極細糸4点の5種類に分類されている。極太糸は、いずれも縫りの掛けられていない単糸で、十手・十二手・十三手・十四手と分けられている。十手等の手とは、番手と呼ばれる綿糸の太さを示すもので、数字の若いものほど太い糸である。こうした綿糸番手の分類はイギリス式のもので、明治中期には日本に定着したとされる。明治20~30年代までは12番手までが極太糸と分類されている。

(田中潤)



## 繊維見本

1組

Specimen of 20 kinds of textiles made in Toyama

大正

史料館No.84 | ラベルNo.1281

地理168 | 富山縣下産標本織物切レ 20種 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(8円)

20点からなる繊維の見本裂で、端の部分に名称が記入されている。内容はジョーゼット・洋傘地等で、ジョーゼットは、総縫取、二重経ボーダー紋等の種類に分けられる。このうち5点には、「富山市大泉町五八一 株式会社富山県織物模範工場」の印が捺され、近代における人絹羽二重の特産地富山の生産品の様相を伝えている。

(田中潤)



## 繊維見本

1組

Specimen of 14 kinds of *habutae* silk made in Fukui

大正

史料館No.313 | ラベルNo.1287

地理174 | 福井縣産羽二重裂地 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(3円)

全14点からなる絹織の裂見本。1番に「1287」と番号の記されたラベルが貼られ、13番・14番には織成の折に付けられた「二尺」・「一尺」と墨書された和紙の紙縫りが結び付けられている。1番から4番は白無地の羽二重で、2番は綾羽二重である。5番は白無地の小皺の縮緬。6番から11番までは織り柄の縞、12番は紬、13番は博多織、14番は松や鶴等の瑞祥柄の帯地である。いずれも左右に織耳が残り、13番の博多織は織り止めがなされていて見本用とされたことがわかる。

(田中潤)



## 麦稈真田紐

3点

Three types of *Sanada* flat braided cord made of straw, made in Okayama

大正

史料館No.①149, ②78, ③151 | ラベルNo.1394

地理247 | 麦稈真田(三種) | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(2円80銭)

「OKAYAMAKEN JAPAN 浅口郡六條村山下岸一 岡山縣真田同業組合証票」の札とともに伝えられた麦稈真田紐3種である。麦稈真田とは麦わらを材料にして、真田紐のように編んだ紐のこと。岡山県西南部の小田郡、浅口郡等を中心に、欧米に輸出される等、農家の副業として盛んに生産された。生産は明治末年から大正半ばが最盛期とされ、大正15年に刊行された『岡山県案内写真帖』には、この資料と同様の麦稈真田紐の束が掲載されている。(田中潤)



## 麦わら帽子

1点

Straw hat

大正

史料館No.85 | ラベルNo.1408

地理261 | 麦稈念編帽子 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(6円)

本資料は大正期から昭和初期にかけて流行した麦わら帽子の一種で、いわゆる「カンカン帽子」と呼ばれるものである。カンカン帽子は麦稈真田等の素材をプレスで固く成型し糊付けしてつくられる。頭頂が平たく板状という特徴的な形をしていて、軽くて耐久性がある。カンカン帽子という語源には諸説あるが、「カンカン」と音がするほど固いことに由来するとされている。野外スポーツが盛んになった19世紀のヨーロッパにおいて、ボート遊び用の男女の帽子として流行したが、日本では男性だけの夏のフォーマルな帽子として普及した。

麦稈製糸巻と同時に受入となっているところから、麦稈細工製品の標本として購入されたものと考えられる。(橋本佐)



## 麦稈製糸巻

10点

Square spools decorated with braided straw

大正

史料館No.260 | ラベルNo.1406

地理259 | 糸巻 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(1円)

本資料は糸巻に色とりどりの麦稈細工を貼り付けたものである。麦稈細工とは彩色した麦わらで種々の文様を織ったものを用いた工芸品で、真田紐のように組紐にして籠や帽子の素材としたり、装飾として箱等の側面に貼り付けたりしたもの等がある。明治末年には、色や幾何学的な複雑な文様を学び構造力を養う材料として小学校教材に用いられることもあった。(橋本佐)





## 襖張用芭蕉布

1点

*Basho-cloth for making fusuma (Japanese sliding doors)*

大正

史料館No.265 | ラベルNo.1415

地理268 | 芭蕉布 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(3円50銭)

芭蕉布は、琉球芭蕉(糸芭蕉)と呼ばれる、通常の芭蕉より一回り小さい種類の芭蕉の、葉鞘から製作される。刈取られた葉鞘は外側からウワホー、ナーウー、ナーグー、キャギの4種類の繊維に分けられ、木灰汁で煮込まれた後に不純物を除去されて糸となり織り上げられる。織り上げの後に米粥を発酵させた「ゆなじ汁」で洗い上げられ織物として完成する。芭蕉布は内側の繊維で織られたものほど柔軟で高級なものとされた。

襖の壁紙としての芭蕉布は東の葛布、西の芭蕉布と並称して愛され、高級料亭、旅館、旧家において珍重された。新品の風合いはもとより、経年の変化により飴色の光沢をもった状態が好まれた点は、葛布と同様である。本件は大正14年12月に那覇市西本町の眞比□城商店から3円50銭で購入されたもので、「四丈襖張芭蕉布」と付札に記載がみられる。(田中潤)



## 博多織袋物

1枚

*Handbag with tokko (a Buddhist ritual instrument) pattern, made from Hakata textile*

大正

史料館No.212 | ラベルNo.1142

地理59 | 博多織手提袋 | 大正13年(1924)2月25日 | 購入(2円30銭)

今日の博多織は天正年間(1573~92)に竹若伊右衛門が創始したとされている。この資料にもみられる伝統的な博多織の文様は、密教法具の独鈷等を写したものとされており、江戸時代に至り黒田氏の庇護を受けて扶持も与えられ、幕府への献上品、藩の軍旗、陣羽織の製作を行なった。元禄時代以降織屋の数が増加すると株仲間が組織され、運上銀賦課の体制が整えられた。明治期になると品質の低下と相まって衰微したが、明治19年(1886)には博多織同業組合が成立し、品質の向上を企図した活動により伝統の技術を今日に伝えている。この袋物は桐箱の蓋裏に「博多織・松居特製」のラベルがあり、博多織の品質低下に危惧を抱き、同16年中州に博多織の工場を開設して、品質の改善に務めた松居元右衛門の製品との関係が想定される。松居家は元彦根藩井伊家の御用商人で、京阪神への博多織交易の窓口を務めていた。(田中潤)



## 灰釉流走駒文浅鉢 相馬駒焼

1口

Bowl with horse motif, pottery with ash glaze, Somakoma ware, marked "Tashiro" and "Hokkyo"

大正

史料館No.227

地理103 | 相馬焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(2円50銭)

見込に二頭の馬が駆ける姿を、軽妙な筆遣いで躍動感を持って鉄絵で描く、相馬駒焼の器である。いわゆる「相馬焼」は相馬藩の御用窯である田代窯でつくられた「相馬駒焼」と、一般向けで安価な浪江市の「大堀相馬焼」に区別されるが、本作は前者のものである。轆轤挽き成形の浅鉢形の器で、口縁部を波形に変形させている。本作を彩る印象的な貫入は、相馬駒焼では「青ひび」と呼び、ケヤキ灰釉を厚掛けし、素地との熱膨張率差を利用してわざとヒビを出すものである。駒文の前脚が前方へ突き出す特徴等から、作者は明治から大正にかけて活躍した12代田代清治右衛門と推察される。高台際の銘「田代」「法橋」は11代田代清治右衛門によって明治9年(1876)より刻印され始め、それ以降、現在まで続いている。また、底面に島津製作所のラベルが貼られている。

(近藤)



## 色絵金彩縞に丸文蓋付徳利 九谷焼 2口(一対)

Pair of sake bottles with lid, with design of stripes and roundels, signed "Kutani Bizan", Kutani ware

明治~大正

史料館No.190 | ラベルNo.1282

地理169 | 九谷焼標本徳利 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(8円)

明治25年(1892)から昭和11年(1936)にかけて操業した石川県金沢の清水美山堂製の徳利一対である。薄くつくられた素地に幾何学文様による絵付が精緻に施されている。細かい柄が充填された縞文様を横断するように配された金彩で縁取った丸紋の中は、密集した白盛の細かい点描で埋め尽くされている。これは「白粒」と呼ばれる技法で、大正元年頃から能美地方を中心に流行した。また、美山堂創業者の初代清水美山(1861~1931)は金沢九谷の名工として知られ、本作には、彼が明治15年に創始した盛金絵付の技法が遺憾無く発揮されている。花唐草文や花菱、七宝繋ぎ等の幾何学文だけでなく、帯状の区画内に菊花文や桜花文が不規則に散らされた上に先述の丸紋を大胆に配しており、単調になりがちな幾何学文に独特のリズムを与えている。徳利の口縁にまで金彩が施され、丁寧な作風である。底面には「九谷美山」という銘が書かれている。

(川合)





## 色絵金彩鳳凰文蓋付碗 九谷焼

2合(一対)

Pair of cups with lid, with phoenix motif in *kinrande* style, Kutani ware

明治~大正

史料館No.173 | ラベルNo.1181

地理89 | 九谷焼 金蘭手 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(5円)

明治38年(1905)に金沢片町で開店し、戦後まで続いた納賀花山堂製の蓋付湯呑一対。九谷焼における金蘭手の技法は慶応元年(1865)から明治2年までの5年間山代へ招聘された京焼陶工の永楽和全によって伝えられ、その技法は、九谷焼の伝統として根付いた。本作は赤地に金彩を施し、針書によって細かい文様をあらわしている。鳳凰の周りには唐草文が描き込まれ、蓋の鈕周辺と胴下部には青色で雲気文が巡らされている。口縁部に金彩が施され、蓋には吉祥文を配している。九谷焼は同11年の明治天皇北陸御巡幸の時より名声が揚がり、それ以来輸出品以外に土産用や進物用に求められるようになったため、煎茶器や湯呑、菓子器、酒器等が主製品になったという。花山自身も趣味として陶磁器をつくるものの、本作には「花山」銘が入っていない。付属する箱には島津製作所のラベルが貼られている。(川合)



## 達磨置物 九谷焼

1体

Figure of Bodhidharma, porcelain with overglaze polychrome enamels, Kutani ware

明治~大正

史料館No.205

地理91 | 九谷焼 赤九谷 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(5円)

禅宗達磨大師の九谷焼立像。重厚感のある体に赤い法衣をまとい、耳輪をしている。指先まで規則正しく揃えられた右手には、説法等で威儀を正すために用いる払子を持つ。眉間に皺を寄せ口角を下げてやや厳しい表情を浮かべ、剥き出した目は微かに赤色をさし充血している様子である。肌には鉄化粧が粗く施され自然な浅黒い肌の質感を出しており、釉薬がたっぷрикаかった艶のある赤い法衣とうまく調和している。

身体に張り付いているような長い払子や、腹に沿わせ密着させた右手、背面のゆるやかな曲線から、それほど複雑ではない型成形でつくられた量産品と思われる。

九谷焼において置物生産が盛んになっていくのは明治24年(1891)以降である。明治末期にはさらに量産が進み低価格で販売されていたが、本作もおそらくその時期に製作された土産物のひとつであると推察される。背面に島津製作所のラベルが貼られている。(尾留川)



## 蝦蟇仙人置物 九谷焼

1体

Figure of Gama Sennin, a hermit in ancient China who was a toad charmer, Kutani ware

明治

史料館No.206

地理90 | 九谷焼 青九谷 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(5円)

蝦蟇仙人とは蝦蟇を使って妖術を行なったという中国の一仙人。赤い岩石に腰掛け、右手に霊獣を示す3本足の蛙を抱えている。膝の上に置かれた左手に持っている枝はおそらく桃であろうが実は付いていない。

一般的に蝦蟇仙人は無地で質素な着物を着ている姿で表現されるが、本作は立涌意匠の紫色の袴に、黄・黄緑・紫で雨龍の丸文が散らされた鮮やかな青い上着というやや派手な衣装を身にまとっている。一方で肌にはわずかに鉄化粧が施されているがほとんど施釉しておらず、暗い灰色がかかった露胎のままである。骨ばった足のくるぶしや首元にみえる鎖骨、顔を上向かせた時に浮き出る筋やのど仏等、身体の特徴を非常によくとらえた造形は、生々しささえ感じる。顎を前に突出し、口元には薄く紅がさしてある。怪異に笑う表情は人ではない様相を際立たせているが、どこかユーモラスである。彼の頭上に片足を乗せる蛙の姿も愛らしい。蛙の腹部には空気孔があげられている。背面に島津製作所のラベルが貼られている。(尾留川)



## 色絵山水文扇形皿 初代徳田八十吉 九谷焼 1口

Fan-shaped dish with landscape motif, signed "Kutani Yasokichi", made by Yasokichi TOKUDA, Kutani ware

大正

史料館No.221 | ラベルNo.1283

地理170 | 青九谷扇面形鉢 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(10円)

近代九谷の名画工、初代徳田八十吉(1873~1956)によって描かれた扇形の鉢。型打ち成形で扇の細部まで表現された器の見込に古九谷風の山水を描くが、本作の丁寧な描線や広く取られた余白はいわゆる青手古九谷の豪快な山水とは趣を異にし、繊細で落ち着いた印象を与えている。裏面には黄色の花文様があらわれ、高台内には大正6年頃より用いられる「九谷八十吉」銘が書かれている。高台は1.8cmと高めで、七宝繋ぎ文が巡らされた上から紫の釉が覆っている。彼は狩野派の絵師であった荒木探令に日本画を学び、明治期の九谷焼を牽引した松雲堂・松本佐平のもとで研鑽を積んだ。本作は全くの古九谷、吉田屋写しというわけではなく、古典作品にはみられなかった余白を加える等、八十吉独自の創造が加わっている。彼の古九谷や吉田屋への「欽慕」の思いを認めることが出来るが、それを新しい作品へと昇華させる、彼の創造性にも注目させてくれるものである。(川合)





# 染付竹文土瓶 美濃焼

1口

Teapot with bamboo motif, porcelain with underglaze blue decoration, Mino ware

大正

史料館No.155 | ラベルNo.1180

地理88 | 多治見焼 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(1円50銭)

竹籠が編まれたようにデザインされた磁器の急須。胴部だけでなく、蓋部にも同じく意匠が展開する。素地は白く清らかである。高台には砂目が多く残る。伝統的な器種ながら、見事にモダンな雰囲気への作に仕上がっている。

(楠本)



# 銕絵染付松枝図鉢 品野焼

1口

Bowl with motif of pine needles and cones, porcelain with underglaze polychrome enamels, Shinano ware

大正

史料館No.233

地理87 | 瀬戸焼 品野 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所]購入(1円50銭)

鮮やかな<sup>こす</sup>呉須と銕絵という下絵具を用い、白磁の内外全面に松の枝を描いた浅めの鉢である。外側に4本、内側に4本、銕絵で大胆に配した枝に、呉須の青で松葉を軽快に絵付しており、枝には銕絵で松かさ<sup>こ</sup>が内外にふたつずつ描かれている。口縁は不規則な凹凸の付いた5弁の輪花型に成形され、明るい色の鉄釉で口紅が施されている。島津製作所のラベルに記載された品野焼は、近世以降、愛知県瀬戸市品野町(旧品野村)付近で操業した窯場で生産された陶磁器の総称であり、周辺では主に播鉢、土瓶、行平、片口等の雑器が生産されてきた。近代以降は磁器製造に移行し、窯業地瀬戸における生産の一大拠点となった。

(高田)



# 染付梅花渦文碗 瀬戸焼

1口

Bowl with *ume* (Japanese apricot) blossoms in whirlpool design, porcelain with underglaze blue decoration, Seto ware

大正

史料館No.226

地理86 | 瀬戸焼 普通 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所]/購入(2円)

薄づくりの端反りの碗。底面はやや平らで胴部への立ち上がりは斜め上方向へ直線的である。胴部には渦文に充填した上に梅花を散らした文様帯がある。梅はリズムカルに配され、花びら中心部は濃く染められている。瀬戸での磁器生産は江戸時代末期より開始された。輸出品の生産を中心に産業として発展し、近代日本のやきものの生産をリードしていった。底面に島津製作所のラベルが貼られている。(荒川)



# 染付雪月桜輪文水滴

1口

Water dropper with motif of snow, moon and cherry blossoms, porcelain with underglaze blue decoration

年代不詳

史料館No.229

大型の水滴で上面に文様が施されている。月、桜(八重桜)、葉、雪輪が器面に浮彫される。背景はコバルトによって青く装飾されることで主文様は白抜きで表現されている。八重桜はしべが、葉は葉脈が一本一本繊細に彫り出されており、美しさが際立つ。対して、月と雪輪は装飾のない平らな器面が強調され好対照の文様構成となっている。また、一座面は釉薬がかかっておらず、素地が露わになっている。瀬戸・美濃系の可能性が高いが、産地・年代は不詳。(楠本)





## 色絵(釉下彩)梅樹文土瓶 萬古焼

1口

Pottery teapot with underglaze polychrome enamels, motif of ume tree, Banko ware

大正

史料館No.160

地理105 | 萬古焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(50銭)

やや下膨れの萬古焼の土瓶である。萬古焼は、江戸中期に伊勢の沼波弄山が京焼の影響を受けて小向村に窯を開いたことで始まったとされる。一度は廃絶するも、江戸後期になると森有節が再興、発展を担った。有節は煎茶文化に乗じた文人趣味の急須等を得意としていた。

本作は、轆轤目のある白い素地に琳派風の梅樹を釉下彩により描いている小ぶりの器となっている。底面が露胎で、蔓の把手の付く土瓶である。

この土瓶は、有節の活動を受け明治初期に大きく発展した、四日市に興った萬古焼の流れに属するものと考えられる。明治期の四日市萬古は良質な陶土を有し、輸出向けの品の高い製品を生み出していた。京焼風の絵付や轆轤による成形は、国内向けに大量生産を試みた大正期の作と判断される。底面に島津製作所のラベル片が残っている。

(田中玲)



## 布袋置物 伏見人形

1体

Figure of Hotei, clay with decoration, Fushimi doll

大正

史料館No.183 | ラベルNo.1205

地理113 | 伏見人形 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(50銭)

右手に団扇、左手に大袋をもった、豊かな腹と福耳の布袋の伏見人形である。小さな目に眉尻を下げて笑う表情が愛らしい。

伏見人形は京都深草で稲荷大社の土産物として江戸時代初期からつくられたとされる。本作の製作年代は明治以降と思われるが、布袋の造形は江戸初期から変わらない。前後2分割の型成形による素地を合体させたもので底面は塞いでいない。内側を覗くと接着部分と底縁に粘土紐を押し付けて補強している。700～800℃で焼成し、胡粉を塗って膠と顔料を合わせ彩色する。着物は丹色、団扇や袋には緑青を使うのが定法であり、本作も着物に赤、福の字が書かれた団扇と袋の意匠の一部に緑青が施されている。背面は胡粉のみで島津製作所のラベルが貼られている。

京の風習では、家を持つと布袋の伏見人形を年に1体ずつ7年間集め続ける。その間に不幸が訪れたら改めてひとつ目から集めなおさなければならないが、7体揃うと財が太り、火難を免れるという。そのため、伏見人形の中でも布袋は特に量産された。

(尾留川)



## 黒楽茶碗

1口

Black glazed potted tea bowl with inscription, Raku ware

大正

史料館 No.258

地理111 | 楽焼 黒 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(2円)

腰の張ったいわゆる半筒形の楽茶碗で、底面には「楽」印が捺されている。艶のある黒釉が掛けられ、胴部の真ん中が少し引き締まった器形である。

楽焼とは狭義には桃山時代に千利休が瓦工であった楽長次郎に茶碗を焼かせたことに端を発し、以後代々と楽家によって現代までつづられ続ける、茶道具を中心としたやきものである。また、その特徴である手捏ね成形による軟質施釉陶の一群を指して、楽家以外でつくられたものに対しても楽焼と呼ぶ場合がある。黒楽はおよそ1200℃に達する高温で、短時間で焼成される。底面まで釉薬を掛けるものと露胎のものがあるが、本作は底面に釉を掛け残して焼成し、白っぽい胎土が現れている。(川合)



## 赤楽茶碗

1口

Red glazed potted tea bowl with inscription, Raku ware

江戸後期～明治

史料館 No.266

地理112 | 楽焼 赤 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(2円)

高台から斜めに立ち上がる器形をもつ赤楽茶碗。底面に「楽」印が捺されている。この刻印は白楽印(隠居印)といい、楽家11代慶入(1817～1902)の作と推定される。なお、共箱はない。厚く掛けられた釉の表面は窯変して黒い斑が入る。赤楽は手づくね成形ののち、800℃前後の低下度で焼成され、いわゆる軟質施釉陶器に属するが、楽茶碗といえば腰の張った形が多く、このような朝顔形のものは珍しい。(川合)





## 色絵(釉下彩)秋草文四方小鉢 粟田焼 1口

Square bowl with motif of autumn flowers, pottery with underglaze enamels, Awata ware

明治~大正

史料館No.167

地理98 | 粟田焼 | 大正14年(1924)9月3日 | [島津製作所]/購入(1円50銭)

本作は卵色の素地に釉下彩で萩、芒等の秋草を描き、上から細かい貫入の入る釉薬を掛けた粟田焼の小鉢である。成形は非常に丁寧になされており、轆轤で碗形に挽いた後、口縁部に向かって徐々に押さえて口造りを四方形とした器形で、底は基<sup>き</sup>筈<sup>は</sup>底、胎にはほど良い厚みがある。粟田焼は粟田口焼とも呼ばれ、現在の京都市東山区、粟田口周辺の窯場で焼かれたやきものの呼称。粟田口では江戸から明治、大正期にかけ多くの窯が操業し、五条坂、清水と並んで京焼の生産地として隆盛を誇った。本作のような淡黄色の土と釉の組み合わせは粟田焼の典型とも言えるものだが、釉下に盛り上がるほどたっぷり塗られた薄緑、水色、朱等の淡色の下絵具(釉下彩)は明治以降近代になって導入された技術である。絵付は簡素ながら器形、意匠ともすっきりと整理され、京焼らしい瀟洒な雰囲気感を漂わせている。底面に島津製作所のラベルが貼られている。(高田)



## 色絵花卉草虫文手付水注 粟田焼 1口

Pitcher with design of flower and insect marked "Nihon Kyoto Kinkozan zou", pottery with overglaze polychrome enamels, Awata ware

明治

史料館No.204

地理293 | 粟田焼水差 | 昭和7年(1932)5月7日 | 伯爵河村鐵太郎/寄贈

季節の移ろいを描いた煌びやかな水注である。素地は京焼特有の黄みがかった色をしており、その上に色絵・金彩を用いて注口向かって左側から山桜・牡丹等春の草花を描き、注口には柳を、その付近に杜若、露草といった夏草を配する。反対に右側には菊や薄、萩や女郎花等の秋草を配し、それら全てを写實的に描いている。蓋には金繕いがされているが、七宝繫文、蝶、蜻蛉といった意匠を凝らし、手付は稚拙ながらも竜の姿を模して、その上に金彩を施している。本作は注口付近にある「日本京都錦光山造」の銘から明治期を代表する輸出陶磁器業者、錦光山の工房にて製作されたこと、また、箱の添紙に「粟田焼水差伯爵河村鉄太郎寄贈」と書かれていることより昭和天皇の御用を勤めた貴族院議員の河村鉄太郎伯爵による寄贈であることが判明する。本図録に掲載する陶磁器資料の中では唯一、昭和期の寄贈によるものだが、資料としてよりも一作品として格調高い姿をしている。(平)



## 青磁三足香炉 三田焼

1口

Celadon incense burner, made of porcelain, Sanda ware

大正

史料館No.256

地理95 | 三田焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(50銭)

三田青磁はほとんどの作品が型づくりであるという特徴があり、この作品も器面に轆轤目がなく、滑らかな肌を見せていることから型でつくられたものと考えられるが、見込には渦巻文の範影を残している。磁器質の白い素地に青磁釉を掛け、中国・龍泉窯風の明るい色を見せている。やきものの香炉は普通内面は無釉であるが、この作品は内壁にも青磁釉を掛け、見込には鉄釉を掛けている。三田焼は兵庫県三田市で製作された陶磁器である。三田焼には青磁、染付、赤絵等多様な作品があるが、特に土型で陶工内田忠兵衛が天狗ヶ鼻窯で青磁を生産したことから始まり、三田の豪商神田惣兵衛が有田や京都から優れた陶工を招いたことにより最盛期を迎えた。三田青磁の型づくりはその時招聘された京都の陶工欽古堂亀祐によって発展したものと考えられている。三田青磁は明治・大正時代にも三田陶器会社や三田青磁合資会社で引き続き生産され、この作品もその時のものと考えられる。底面に島津製作所のラベルが貼られている。(金)



## 菊花流水文煎茶碗 出石焼

1口

Teacup with motif of chrysanthemums on flowing water, porcelain, Izushi ware

大正

史料館No.269

地理94 | 出石焼 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(50銭)

出石焼は兵庫県北部に位置する但馬東端のやきものである。白磁を主体とした現在の出石焼の流れは、廃藩により失職した士族の救済と製陶業の発展を目指した<sup>いしんしや</sup>益進社が明治9年(1876)に設立され、肥前の技術を導入したことから始まる。益進社は資金難により同21年に廃絶する。同32年には試験所が設立され、金沢から講師を招き、同34年には出石焼陶磁器改良株式会社が組織されたが、同39年に閉鎖した。

出石焼の伝統技法は、轆轤、押型、袋流しによる成形、彫り、透彫、貼付による素地装飾で、煎茶器を中心とした茶器と花器が主力製品である。

本作は、口縁がわずかに外反した小ぶりの煎茶碗で、垂直に伸びる胴部には流水に浮かぶ菊が彫りあらわされている。出石焼の彫刻文様のうち、菊文は牡丹文と並び多くみられるモチーフである。手取りは軽く、畳付以外の器全体に透明釉が掛けられており、純白の器体が清々しい。茶の色が美しくみえる白磁である。

(福永)





## 色絵(釉下彩)秋海棠文蓋付碗 淡路焼 1合

Cup with lid, with begonia motif, pottery with underglaze enamels, with plover trade mark, Awaji ware

明治~大正

史料館No.162・27

地理101 | オノコロ焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所]購入(1円)

明治16年(1883)に創業した、兵庫県淡路島の淡陶株式会社(現ダントー株式会社)製の蓋付の碗で、淡路焼特有の黄味を帯びたうつわに、絵画的な秋海棠の文様が胴部から蓋にかけて伸びやかな筆致で描かれる。秋海棠の文様は釉下彩(或いは、淡路焼独特の釉葉に溶け込む上絵付)技法を用いてたおやかに描かれており、赤味の強い柔らかな表情の絵付と、素地の淡い黄色とが相俟って暖かみのある、可憐な印象をもたらす。筒形の端反碗で、蓋には丸い鈕が付いている。型による成形で、高台内には淡陶社の商標である千鳥の印が押される。裏面には「オノコロ焼」(淡路焼の通称)と書かれた島津製作所のラベルが貼られている。近代の淡路焼はこのような国内向けの食器の他に輸出品も生産した。淡陶社は昭和初期にはタイル製造に特化するため、同社の日用品生産時代の作例として貴重である。また、同じ文様を描いたティーセットも知られており、和食器と洋食器に同じ文様が描かれる先駆的な例としても注目すべき作品である。

(川合)



## 斑釉七宝透文菓子鉢 布志名焼 1口

Pottery square bowl with iron glaze over white glaze, openwork design of *shippo*, marked "Fushina", Fushina ware

大正

史料館No.291

地理177 | 布志名焼鉢 | 大正13年(1924)12月10日 | 購入(5円)

透かしの入った布志名焼の菓子鉢である。面ごとに七宝文と丸文を交互に彫り、口縁には刻み目を施している。

布志名焼は島根県松江市玉湯町布志名を中心に生産されたやきものであり、寛延3年(1750)に船木与次兵衛が布志名にて窯を開いたことがその始まりだとされている。日用雑器を焼いた船木窯、松江藩の御用窯であった土屋窯、永原窯等がある。本作は、高台内にある瓢箪形に「ふしな」の印から船木系に属する双樟窯で焼成されたと考えられる。

布志名焼の中には交趾焼や伊万里焼等、古陶磁をモデルとした製品がみられ、この菓子鉢は特に京焼の要素が取り入れられている。透明感のある白釉に鉄釉を流すことによって色の変化を付けている。黄味がかかった精緻な素地と相まって瀟洒な印象である。

(田中玲)



## 三島手曆文陶器土瓶 楽山焼

1口

Teapot made of pottery, with inscription, Rakuzan ware, marked "Rakuzan"

大正

史料館No.157

地理176 | 楽山焼土瓶 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(1円30銭)

楽山焼は島根県松江市一帯で生産された陶器である。延宝年間(1673~1681)、萩焼の陶工倉崎権兵衛が松江藩に招かれ、西川津村楽山に窯を開いたことから始まった。楽山焼は萩焼からの影響が強く、伊羅保・斗々屋・刷毛目・三島茶碗等、高麗茶碗の写しが多く生産された。本作は近代の土瓶ではあるが、高麗茶碗写しを主とした楽山焼の伝統がよく残っている。焼成の際の火加減により酸化した桃色と還元した灰色が混ざられている肌色は、呉器茶碗や半使茶碗等によくみえる景色である。器面には印花文と曆文の象嵌が施されている。特に篋彫による簡略化された曆文は御本三島茶碗特有の文様であり興味深い。全体的な器形は歪みが目立つつくりで蔓草の取っ手があり、小振りの可愛い姿を見せている。底には「楽山」の刻印がある。(金)



## 煎茶器セット 備前焼

1組

Tea set (pot, pitcher, five tea cups) with rugged texture, stoneware, Bizen ware

大正

史料館No.202 | ラベルNo.1397

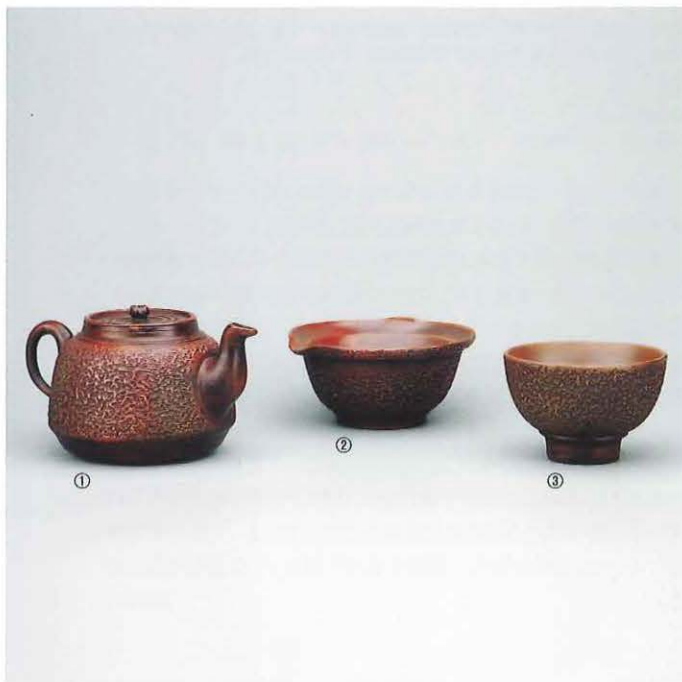
地理250 | 備前焼 茶器 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(3円50銭)

急須(①)、湯さまし(②)、煎茶碗(③)5客の煎茶器セットで、各々の側面は轆轤成形後にゴツゴツした岩肌のような装飾が施されている。備前焼特有の鉄分の多い陶土により器体は赤茶色を呈し、窯入りに際し作品同士の付着を防ぐため作品に巻いた藁が化学反応により赤い線となり器を彩る。特に湯さましには、この火樺と呼ばれる窯変がはっきりと見られ、赤と黒の対比が鮮やかである。

後手急須は重心を下に持つ安定感のある器形である。口縁脇には二重刻線、蓋には蒸気穴が開いた蒂形の抓みと、その周りに陽刻二重線が施されている。高台内には焼成時に敷いた粗殻のようなものの痕跡が残る。

急須に注ぐ湯をさます湯さましは、口径が大きく口縁はわずかに反り立つ。注口は口縁を内側から外側へ押してつくられている。半球形の煎茶碗は、口縁部は口当たりが良いように角がとられ、高台脇には二重刻線があらわされている。

窯元の森陶岳窯は備前六姓と呼ばれる室町時代から続く窯のひとつである。(福永)





## 糸目徳利 備前焼

1口

Sake bottle with lines, Bizen ware

大正

史料館No.268

備前焼の特徴である無釉の焼締めの赤褐色をした1合ほどの小ぶりの徳利である。肩のないゆるやかな曲線を描く形態はらっきょう徳利と呼ばれるものに似る。全体に薄づくりで軽く、口縁部はやや外反する。底には渦形の笥切の跡が残る。表面は口縁部から底面まで全面に細かな轆轤目が施される。薄づくりで表面に轆轤目を施す作風は江戸時代の伊部手の作品に見られる。伊部手は江戸初期頃から意識的に用いられた塗り土を施す備前焼で、一般に薄づくりの茶褐色、黄褐色、または紫蘇色をした技巧的で硬く冷たい印象を与える作風である。

備前焼の徳利は室町末期から桃山時代につくり始めたといわれ、酒器や花器にも用いられた。江戸時代には多様な形態がつくられ、17世紀後期から18世紀に轆轤技術を駆使した薄手の体部に糸目を施した糸目徳利（献上徳利）と呼ばれる形が生み出される。本作は塗り土を施さないがこの系統の徳利に類する近代の伊部手風の作品と考えられる。側面には島津製作所のラベル痕がある。（門脇）



## 梅花文酒器 備前焼

1口

Sake bottle, pottery with carved design of ume blossoms, with natural glaze, Ibe (Bizen) ware

江戸末～大正

史料館No.177 | ラベルNo.1199

地理107 | 伊部焼 赤伊部 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(60銭)

備前焼は平安末期から約800年間主に焼締め陶器を生産した中世六古窯のひとつである。備前焼は釉薬を使わない肌の質朴さと渋い色合い、窯変等にその見所があるものであったが、江戸時代から肥前や京都で生産された施釉陶磁器を意識し、伊部手や細工物等を生産し始めた。本作は赤い土を用いて轆轤で首を成形し、型で成形した四面の胴体に合体させた角徳利である。首と胴体の接合部には蓮弁文様があり、胴体には面ごとに2～3本の区画線があり、一面に水墨画的な雰囲気のある梅花図が彫られている。全体的な雰囲気は鋭く、焼締めとして焼かれて独特な艶がある。このようなタイプの角徳利は広島県福山市の特産薬酒である保命酒を入れるための徳利であったと推定される。備前焼の保命酒徳利は森庄八が天明元年(1781)に初めて製作したといわれ、以後、天保年間(1830～44)備前に導入された連房式登窯である天保窯で量産された。背面に島津製作所のラベルが貼られている。（金）



## 湯さまし 萩焼

1口

White glazed pottedter *yuzamashi* (bowl to cool down boiled water in tea ceremony), Hagi ware

大正

史料館No.263

地理108 | 萩焼 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(80銭)

萩焼は山口県の萩市・長門市等で製作された陶器である。文禄・慶長の役の際に渡来した李<sup>り</sup>勾<sup>こう</sup>光<sup>こう</sup>・李<sup>り</sup>敬<sup>けい</sup>兄弟が慶長年間(1596~1615)に毛利家の御用窯を萩城下の松本(現萩市)にて開いたことから始まった。17世紀中期、李<sup>り</sup>勾<sup>こう</sup>光<sup>こう</sup>系の山村家が深川(現長門市)に移って御用窯を開き、以後松本・深川の両系統を中心に陶器生産が続いた。萩焼は古田織部と毛利輝元・秀元との関係を背景に、高麗茶碗、即ち割高台・彫三島茶碗の写しが盛んにつくられた。また彫三島の檜垣文と割高台をともに持つものもある。本作は近代の作ながら、篋彫による檜垣文と割高台が同時に施され、古典的な姿をみせている。白い藁灰釉にあらわれる細かい貫入、目立つ歪みや轆轤線も織部好みの高麗茶碗を写してきた萩焼の伝統を意識しているようにみえる。(金)



## 白磁波濤文丸皿 砥部焼

1枚

Dish with wave motif, porcelain, Tobe ware

明治~大正

史料館No.215

地理96 | 砥部焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(1円)

イチチン(泥漿を細いチューブやスポイトで絞り出し線描きする技法)で波濤文が見込に施されている。素地は薄く、透光性がある。見込の波濤は、皿の器形に応じてぶつかり波しぶきをあげた瞬間をとらえたかのごとく描かれている。砥部焼は愛媛県の砥部町において生産されている陶磁器で、安永9年(1777)に白磁の焼成に成功した。近代に入ると西日本を中心に販路を広げ、明治中期から昭和初期にかけては中国・東南アジア向けの貿易品を生産した。底面に島津製作所のラベルが貼られている。(楠本)





## 能物置物 博多人形

1体

Figure of woman Noh character, clay with decoration, Hakata doll

明治~大正

史料館No.224 | ラベルNo.1141

地理54 | 博多人形 | 大正13年(1924)2月25日 | 購入(5円50銭)

黒地に金彩の烏帽子に深井或いは小面の面を付け、鮮やかな橙色に金彩が施された唐織をまとう能役者の博多人形である。金の烏帽子は静烏帽子ともいわれ、謡曲船弁慶の静御前の舞姿であることがわかる。

石膏を使った鋳込法で成形し、胡粉を塗り膠と顔料を混ぜて着色している。凹凸がはっきりとした顔立ちは彫刻によって表情を浮き立たせる能面の特徴をとらえており、能面や烏帽子の紐、意匠が施された髪帯の結び目も精緻に彫られ、能装束を忠実に再現している。(尾留川)



## 染付牡丹唐草文稜花皿 伊万里焼

1枚

Dish with foliate rim with peony arabesque design, porcelain with underglaze blue decoration, Imari ware

江戸

史料館No.257

口縁部を稜花につくり琺瑯を施す。見込部には同心円状に文様帯を施している。見込外側部の文様は三方に牡丹文を薄いダミで描いた牡丹唐草文となっている。唐草は輪郭線を描きその内を青く染めているが、その他は輪郭線が描かれていない。裏面の唐草文は流れるような筆致で描かれ輪郭線がある。底面の染付線は二重、高台内の染付線は一重である。18世紀頃の作と考えられる。(楠本)



## 染付楼閣山水文皿 平戸焼

1枚

Dish with landscape motif in underglaze cobalt-blue, signed "Kasho", Hirado ware

大正

史料館No.218

地理97 | 平戸焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(1円)

平戸焼は16世紀末から19世紀末に肥前平戸松浦藩領内に点在する窯で製作された陶磁器の総称。純白の磁肌に呉須で精緻な絵付を施した高級献上品もあり、本作のような素朴な染付とは隔たりをみせるが、本作は中国風の楼閣山水と阿蘭陀風の建物という別種の異国情緒を混ぜた意匠性の面白さがある。右端下部に柳を描き、平行線を重ねて水面を表現している点は、ウィロウ(Willow: 柳)パターン風である。ウィロウパターンは、主に景德鎮窯の染付にみえる楼閣山水図様をモデルに、イギリスで1780年前後に考案された意匠である。ウィロウパターンが対角線構図を用いた遠近表現であるのに対し、本作は中央の塔や真上に雲のように位置する山なみによって垂直方向の構図を取り、平面性が強調されている。口縁部に白抜きで梅を、外側面に唐草を配す。高台に島津製作所のラベルがある。銘は「嘉祥」。「平戸嘉祥」の分家の大正～昭和期の筆跡に類似し、分家による製作の可能性も考えられる。(井上)



## 桜松葉図小杯 八代焼

1口

Small cup with cherry blossoms, made of iron-rich clay, Yatsushiro ware, marked "Takada"

江戸末～明治

史料館No.244

地理109 | 八代焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(1円)

八代焼は熊本県八代市で焼かれた陶器で、高田焼、平山焼ともいう。寛永9年(1632)、細川忠利が肥後(熊本)に転封することにより、細川家に仕えていた朝鮮出身の陶工尊楷が高田手永木下谷で御用窯を開いたことから始まった。特徴としては鉄分の多い胎土を用い、鉄釉や土灰釉を掛け、白土象嵌や刷毛目で装飾することがあげられる。茶碗・茶入・水指等の茶道具を主に生産したが、19世紀には日用雑器を生産し、釉薬の色が明るくなり、象嵌がより精巧になった。本作もこのような19世紀の八代焼の特徴を見せている。鉄分の多い茶褐色の素地に透明釉を掛けて明るい灰色を出し、内面には細かい刷毛目、外面には精巧な桜文様が施されている。このような意匠は『八代焼図案帳一冊』(個人所蔵)104・106・107頁に同じ形の図案がある。高台内には島津製作所のラベルと、八代焼の別称である「高田」の刻印がある。(金)





## 小坏 天草焼

1口

Small cup, pottery with Namako glaze, Amakusa ware  
(Mizunohira kiln)

明治~大正

史料館No.241

地理110 | 天草焼 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(1円)

作品に貼付された島津製作所のラベルには「天草焼 熊本縣」としか記されていないが、釉薬と胎土の特徴から熊本県天草市で現在も生産されている「水の平焼」の作例と推定される。水の平焼は明和2年(1765)に富岡出身の岡部常兵衛が創始したと伝えられ、当初は無釉の雑器を焼造したが、やがて天草陶石を用いた磁器系統の陶土と海鼠釉を特色とするようになった。海鼠釉は通常青味がかかるものが多いが、水の平焼では鉄釉を下薬とし、その上に藁灰釉を二重掛けすることで赤茶色に発色させる「赤海鼠釉」と呼ばれる釉を特に用いる。これは釉薬研究に取組んだ5代の源四郎(1880~1962)が開発したもので、本作も5代の時期に制作されたものであろう。素朴な形の坏であるが、鮮やかな赤茶色の鉄釉と白濁した藁灰釉が器の外面に斑文様で覆い海鼠釉独特の複雑な色合いを見せ、魅力ある小品となっている。器全体に大きなヒビ割れが入り補修されている。(高田)



## 二彩蓋物

1口

Bowl with lid, with two-colour decoration

大正

史料館No.255

土鍋形の実用の調理器・仕器であり、観賞用ではなくあくまで実用向けの資料として収集されたものであろう。このようなタイプの蓋付の土鍋は近代以降につくられたもので、特に「三島手」と呼ばれる刷毛目や象嵌文をもつスタイルが大流行したが、このような緑釉を流し掛けした「二彩」風のものもつくられていた。成形は型によるものと判断される。底面は無釉で碁笥底で、直火にかけ易いつくりとなっている。施釉は蓋の摘みの周辺には緑釉を流し掛けし、全体に透明釉を施している。素焼した後に高火度焼成されたものと判断される。産地は不詳。(荒川)



## 色絵薔薇文双耳皿 東洋陶器株式会社製 1枚

Eared cake plate with rose motif, Toyo Toki Co. Ltd.

大正

史料館No.259 | ラベルNo.1146

地理58 | 耳附鉢 | 大正13年(1924)2月25日 | 購入(1円35銭)

本作は、TOTOの前身「東洋陶器株式会社」により生産された日本製の洋食器である。主として欧米に向けた輸出用につくられたもので、バラの花を中心とした、こまかな西洋風の花文様が上品さを醸し出している。絵付はプリントによるもので、縁には金彩が施される。このような耳付きの皿は、創業初期からカップやポットといったティーセットとともに生産されたものであろう。

「東洋陶器」は、「日本陶器合名会社」から分離して大正6年に北九州の小倉に創業された。当初は欧米からの食器需要が大きく、「日本陶器」の生産を補助する役割を果たしていたとされる。皿裏の印には、俗に「マルキ印」と称される森村家の屋号をあらわすマークが組み込まれている。これは創業初期の同8年から同9年に限定的に使用されたものである。(田中玲)



## 三彩宝船置物 1点

Treasure ship, pottery with overglaze polychrome enamels

大正

史料館No.168 | ラベルNo.1391

地理244 | 珊瑚寶船 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(20円)

いわゆる型物成形による華やかな宝船形の陶磁製置物である。御座船風の船体の上には中央に実際の珊瑚(朱色と桃色と白色の三色)を埋め立てて、その周りには米俵・巻物・七宝・分銅・打出の小槌・金囊・隠れ笠蓑等、徳を招く宝尽くしのモチーフを配す。全体で福德を招く宝船に見立てられている。鮮やかな緑彩を主体に器物を色彩で塗り込めるスタイルは、桃山時代に日本へと到来した「華南三彩」をモデルとしている。

おそらく南蛮船がもたらす南国のパラダイスイメージを表象した造形であろう。本作のように、実際の珊瑚を飾りにした置物は、大航海時代の西欧の王侯貴族に大変愛好され、「クンストカマー(芸術の部屋)」に飾られていた例が知られている。このクンストカマーの装飾物をイメージした置物が、近代の日本で陶磁によって写されたものと推測される。なお、底面には「新窯特許」という印銘が付されている。産地は不詳。(荒川)





## 紗綾形唐草変塗硯箱

1合

Writing box, Tsugaru-nuri

大正

史料館No.196 | ラベルNo.1398

地理251 | 津軽塗 硯箱 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(20円)

方形で丸角、わずかに甲盛のある硯箱。身の内に懸子1枚、下水板1枚を収める。

箱の表面及び下水板表面には、魚々子地に黒漆と青漆で桜唐草、紗綾形を描き、さらに錫粉を蒔き付けて、いわゆる津軽錦塗の華麗な装飾を施す。

津軽塗は、津軽藩第4代藩主信政が、諸国から様々な技術者を招いて、殖産興業を試みた際、この地に定着したといわれる。粘稠な漆や菜種等を用いた変塗の一種だが、多くの工程を要するきわめて手間のかかる装飾法である。

なお、津軽塗には唐塗、魚々子塗等の様々な手法があるが、ここにみられる錦塗は、中でも最も手の込んだものといえる。

(小松)



## 変塗箸箱

1合

Box for chopsticks, Tsugaru-nuri

大正

史料館No.163 | ラベルNo.1208

地理116 | 津軽塗 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(2円)

長方形で甲盛のある箸箱。外殻と箸入れの二部からなり、外殻の一方の端から箸入れを差し込む形をとる。

箱の上面から側面にかけては、津軽塗のうち唐塗と呼ばれる手法で装飾されており、箸箱底面及び内の箸入れは黒漆塗、箸入れの見込は朱漆塗とする。

ここでいう唐塗とは、特殊な筥と粘り気の強い絞漆を用いて器表に斑文を置き、そこに彩漆や透漆を塗り重ね、漆が固化してから研ぎ出す手法をいう。様々な色調の漆が重なり合っているところを一律に研ぎ出すため、華やかな装飾効果が得られる。

箱の上面には島津製作所のラベルが貼られており、この資料の来歴を知ることが出来る。

(小松)



## 山水人物堆朱箱

1合

Box with landscape motif in lacquer carving

大正

史料館No.194 | ラベルNo.1164

地理73 | 小形はがき入 | 大正13年(1924)7月5日 | 購入(2円80銭)

『原簿』には「小形はがき入」とある。底面には、指を入れて身の内に収めた黒漆塗の敷板を押上げるための、直径2cmほどの孔が開けられている。蓋には山水の風景を橋上から眺める人物像、側面には雷文繋ぎの文様と、仙台堆朱で唐物風の装飾が施されている。

仙台堆朱は、大正初期に新潟の村上木彫堆朱<sup>むらかみ きぼりついしゆ</sup>の彫師・川崎康弘(栄之丞)<sup>かうかつしゆ</sup>が、技術指導のために移住した仙台で発明したもので、東華堆朱とも称される。混ぜものをして餅状にした漆を用いて様々な文様を型取りし、それを器物の表面に貼り付ける手法で、廉価であるため、土産物や輸出品として用いられた。

共箱の蓋裏に「商標 大正堆朱 仙臺漆器株式会社/特許 川崎美術彫刻漆器」と貼紙があり、康弘の長男・辰弘の設立した仙台漆器株式会社が、大正堆朱の商標で販売していたものとわかる。(小松・橋本旦)



## 透漆塗方盆

1枚

Clear-lacquered square tray

大正

史料館No.188 | ラベルNo.1209

地理117 | 能代春慶 | 大正13年(1924)9月3日 | 【島津製作所】/購入(3円)

方形、角切で見込の周縁に低い立ち上がりを廻らせた折敷<sup>おしき</sup>形式の盆。見込の右半に条線を等間隔に刻んでいる。

木地は全体を梔子等の染料を用いて黄色に染め、その上に透漆を掛けている。春慶塗には大きく分けて紅春慶と黄春慶があるが、これは色調からみて黄春慶とするの<sup>くちかし</sup>がいいだろう。

なお、底面には「春慶塗」と書かれた島津製作所のラベルが貼られている。春慶塗には、飛騨、能代、栗野、吉野、木曽、日光等いくつかの産地があるが、作品の質、生産量の多さでは飛騨と能代が双璧といわれる。『原簿』には、「能代春慶」とあるので、この資料も秋田県の能代で製作されたものと考えられる。(小松)





## 菊桐文漆絵椀

1合

Wooden bowl with motif of chrysanthemum and paulownia in coloured lacquer painting

大正

史料館No.237

地理123 | 會津塗 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(2円)

身の口縁が外側に反った端反りの椀。大きさからみて汁椀として使われたものと考えられる。

器表は全体を黒漆で塗り、蓋の上面から、身の側面にかけて、デフォルメされた桐と菊の文様を朱漆で大きく描き出す。いわゆる吉野椀を彷彿とさせる表現である。

吉野椀は、黒漆地に朱漆で木芙蓉の文様を大きくあらわした大胆なデザインが特色で、江戸時代に、奈良の吉野地方で大量に生産された。高台に貼付された島津製作所のラベルによれば、この菊桐文椀は会津産のようだが、おそらく吉野椀のデザイン感覚を取り入れて製作されたものであろう。(小松)



## 籬菊蒔絵椀

1合

Wooden bowl with motif of chrysanthemums with woven fence in *maki-e*

大正

史料館No.245

地理115 | 若松塗 蒔繪 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(3円)

蓋付きの汁椀である。全体を朱漆で塗り、金の消粉を用いた蒔絵で文様をあらわす。

ここに描かれている籬に菊の図は、中国の詩人陶淵明の「菊を採る東籬のもと……」という詩に因んだもので、古くから吉祥文として多くの作品を飾ってきた。有名な例では、鎌倉・鶴岡八幡宮の籬菊蒔絵螺鈿硯箱(国宝)をあげることが出来る。

なお、本作に貼付された島津製作所の標本ラベルには「若松塗(福島県)」とあり、これが会津地方で製作されたものであることがわかる。

現在の福島県会津若松市のあたりでは、江戸時代の初めころから漆器の生産が盛んに行なわれ、それらの器物が会津塗と呼ばれてきた。加飾には金の消粉が多用されており、安価でありながら、それなりに華やかな装飾を実現しているのが特徴である。

(小松・吉廣)



## 黒漆塗方盆

1枚

Black-lacquered square tray

大正

史料館No.192 | ラベルNo.1206

地理114 | 若松塗 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(3円)

方形丸角で、わずかに胴張りのある黒漆塗の方盆。口縁を丸く仕上げる玉縁とする。

なお、この盆について、底面に貼付された島津製作所のラベルには「若松塗」とある。No.122の「籬菊蒔絵椀」と同様、漆器の産地として名高い会津地方で製作されたものである。(小松)



## 三保松原図漆絵長方盆

1枚

Rectangular tray with motif of landscape at Mihonomatsubara in mother-of-pearl inlay and lacquer painting

大正

史料館No.187 | ラベルNo.1216

地理124 | 高岡塗 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(2円)

長方形、丸角で緩やかな立ち上がりの付いた盆である。見込には、三保の松原の図を浮彫にし、黒漆を塗ってから茶、褐色、緑色等の漆を用いて彩色を施す。また、富士山頂の雪は錫の金具、舟の帆は鉛板の嵌装、空飛ぶ鳥は螺鈿であらわしている。

見込に貼付された島津製作所のラベルには「漆器(木彫) / (富山県高岡市)」と記されており、本作にみられる木彫彩色の手法にも、いわゆる高岡漆器の特色がよくあらわれている。

文様、技法ともにきわめて粗放な出来であり、海外向けの土産品、いわゆる Souvenir Lacquer としてつくられたものだろう。(小松・吉廣)



## 梅鶯蒔絵長方盆

1枚

Rectangular tray with motif of *ume* tree and *uguisu* (Japanese nightingale) in *maki-e*

大正

史料館No.171 | ラベルNo.1284

地理171 | 金澤蒔繪手形盆 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(4円)

長方形で、緩やかに外反する立ち上がりを付けた盆。

総体黒漆塗。金と青金あおきんの平蒔絵で梅に鶯を取り合わせた文様をあらわす。樹幹に金の切金を散らし、梅の花や蕾に金色の点描を加える等、伝統様式の蒔絵を踏襲した装飾がなされている。

わが国では、古くから桐に鳳凰、松に鶴ずいしん、楓に鹿、竹に虎のように、めでたい植物と動物を取り合わせた瑞禽嘉木の意匠が好まれてきた。いうまでもなく、梅に鶯もその一例であり、この盆は瑞禽嘉木という吉祥文で飾られていることになる。(小松)





## 山水屋舎素彫硯箱

1合

Writing box with design of landscape with figure in *chinkin*

大正

史料館No.246

地理172 | 輪島塗硯箱 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(4円)

長方形丸角、深い被蓋造とし、蓋上面にわずかに甲盛を付けた硯箱。蓋壁（蓋の側板）に手掛けを削り、身の内には内寸いっぱいの大きさの下水板を収める。

蓋表には、山水に屋舎、人物等の文様を、いわゆる素彫の手法で描き、空を飛ぶ鳥だけを彫溝に金を埋める沈金であらわしている。

沈金は、漆を塗った表面を尖った刀で彫り込み、そこに金箔や金泥を埋めて装飾する技法である。中国元時代に盛んに行なわれた鎔金<sup>ろうきん</sup>がわが国に伝わり、沈金と呼ばれるようになった。

江戸時代以降は、能登の輪島を中心に、沈金で飾った作品が数多く製作されていくが、この硯箱のような普及品では、文様の多くを、金を埋めない素彫としたものが多い。（小松）



## 黒漆塗杓子

1本

Black-lacquered scoop

大正

史料館No.195 | ラベルNo.1213

地理121 | 輪島塗 | 大正13年(1924)9月3日 | 〔島津製作所〕/購入(80銭)

杓子は飯用と汁用の2種に大別されるが、これは楕円形の匙に緩やかに湾曲する角形の柄を付けた飯用の杓子である。匙面には「輪島塗（石川県）」と記した島津製作所のラベルが貼付されている。

輪島は、室町時代に始まるわが国屈指の漆器産地で、本堅地と呼ばれる堅牢な下地と入念な塗りの仕上げを特色とする。江戸から明治期にかけては、海運によって日本全国に販路を広げており、今日でも各地の旧家等に大量の輪島製飲食器をみることが出来る。（小松・吉廣）



## 透漆塗袴

1口

Clear-lacquered sake coaster

大正

史料館No.217

地理120 | 高山春慶 | 大正13年(1924)9月3日 | 〔島津製作所〕／購入(1円50銭)

徳利等の酒器を卓の上に置く際にはかせる袴である。円筒形で底に三足を付ける。

漆器の素地には板物、刳物、挽物等いくつかの種類があるが、これは檜、杉等の薄板を蒸して柔らかくし、木型にあてて成形する曲物でつくられている。

No.120の「透漆塗方盆」に較べて、色調にやや赤みが強いところから、下塗りに弁柄等赤色顔料を使った紅春慶とみることが出来る。

なお、底面に貼付された島津製作所のラベルには「春慶塗(岐阜県)」とあり、飛騨、能代の二大産地のうち、飛騨で製作されたものであることがわかる。(小松)



## 朱漆塗箱

1合

Red-lacquered box

大正

史料館No.208 | ラベルNo.1219

地理127 | 根来塗 | 大正13年(1924)9月3日 | 〔島津製作所〕／購入(1円50銭)

長方形、被蓋造の丈の低い箱。全体に朱漆を塗っているが、ところどころ擦れて中塗の黒漆がみえている。蓋表に貼付された島津製作所のラベルには、「根来塗(奈良市)」とある。

平安時代以降、わが国の神社や寺院では、漆を何層にも塗り重ねてつくった堅牢な漆器が、主に飲食器として用いられてきた。根来塗は、そういった普段使いの漆器の通称である。

漆器を日常的に使用した場合、永年のうちに表面の朱漆が擦れて、中塗の黒漆が露わになることがある。そこで朱と黒とが織りなす文様には巧まざる趣があり、そのあたりが根来塗の魅力として、茶人等の間で賞翫された。但し、本作では、明らかに朱漆の表面を研いで黒漆を露出させており、本来の意味での根来塗とは似て非なるものというべきだろう。(小松・吉廣)





## 扇面蒔絵長方盆 象彦

1枚

Rectangular tray with fan motif in *maki-e*, made by Zohiko

大正

史料館No.201 | ラベルNo.1217

地理125 | 京都蒔絵 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(27円)

長方形の盆で、立ち上がり縁を削面とする。

全体に黒漆を塗り、金の平目粉を淡く蒔いた地に、金銀の平蒔絵で開いた扇と閉じた扇とをあらわす。底面は詰梨地とする。

ここにみられるような扇面文様は、古くからわが国の人々に好まれてきた。扇のひとつひとつに物語絵や、四季折々の風物、花鳥画が描かれていて、いわば画中画を鑑賞する楽しみがあること、さらに、扇の「末広がり」に吉祥文としての意味合いがあること等がその理由だろう。さりげなく日常の道具を描いたようにみせかけて、そこに深い慶賀の意を込める。日本の文様がもつ奥の深さ、二重性といったものが、この扇面文様にはっきり示されているといえる。

なお、この盆を収めた箱の蓋裏には「平安 象彦」の墨書があり、江戸中期以来、京都で漆器の製造、販売にあたっている大手漆器商「象彦」の製品であることがわかる。(小松)



## 箔地梅樹蒔絵箱

1台

Box with *ume* tree motif on gold foil surface

大正

史料館No.175 | ラベルNo.1218

地理126 | 京都蒔絵 輸出蒔絵 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(5円)

長方形、わずかに甲盛のある合口造の箱。全体に金箔を貼り付け、蓋表には、漆絵に銀泥を交えて花を付けた梅樹の文様をあらわす。箱の内面は潤漆塗、底面を黒漆塗とする。

全体に金色を施したあたりは、幕末明治期に海外に大量に輸出されていた芝山細工を意識したものとみられるが、技法はきわめて簡略かつ粗放であり、安価な日常品として製作されたものと思われる。(小松)



## 雪月花蒔絵煙草入

1具

Cigarette case with *setsugetsuka* (snow, moon and flowers) design in *maki-e*

大正

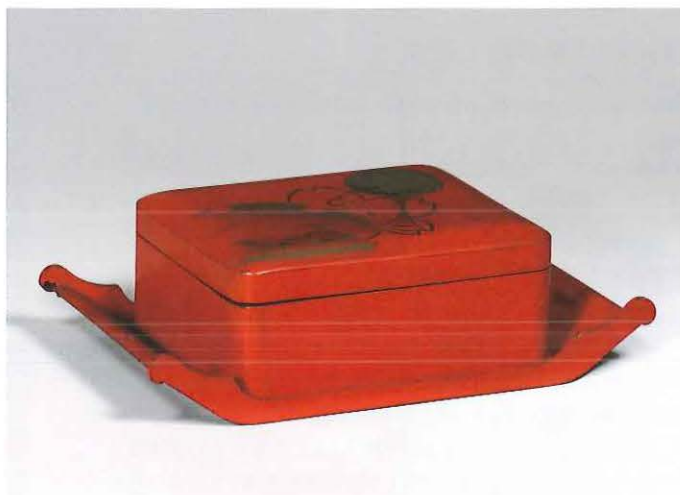
史料館No.248

地理119 | 静岡塗 蒔絵 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所]/購入(2円)

舟を象ってつくられたシガレットケース。紙巻煙草を容れる長方形丸角の箱と舟形盆の二部からなる。台には島津製作所のラベル痕がある。

全体に朱漆を塗り、箱の蓋表には金銀の平蒔絵を用いて雪月花の文様をあらわす。月には芒、桜には網干、雪輪には三保松原の文様がそれぞれあしらわれている。

わが国の工芸品には、扇面散らしのように、画中画を楽しむ工夫が凝らされたものがあるが、本作の図柄もその一種とみることが出来る。(小松・吉廣)



## 菊竹金銀絵方盆

1枚

Square tray with chrysanthemum and bamboo motif in gold and silver painting

大正

史料館No.216 | ラベルNo.1220

地理128 | 黒江塗 金蒔絵 | 大正13年(1924)9月3日 | 購入(1円)

方形で角を丸く仕立てた盆。全体を朱漆で塗り、金銀泥絵に漆絵を交えて文様をあらわす。口縁に金泥を塗って金地とし、底面は黒漆塗とする。

この盆を収めた紙箱には「黒江塗」と記されており、全国屈指の漆器産地である和歌山県海南市の黒江で製作されたことが明らかである。

黒江塗は、天正13年(1585)、豊臣秀吉の根来討伐を免れた工人たちが、この地に流れ着いて漆器の生産を始めたのが起源といわれ、分業化の徹底と大量生産によって、廉価な漆器の製作を可能にした点が大きな特色である。(小松)



## 花蝶漆絵箔絵長方盆

1枚

Tray with flower and butterfly motif in lacquer painting

大正

史料館No.240

地理175 | 八雲塗盆 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(2円90銭)

長方形、角丸の盆。全体を透漆で塗り、朱、緑、黄等の漆に箔絵を交えて文様をあらわす。

本作品に付属する紙製外箱には「出雲國産 八雲塗」とあり、これが現在の島根県松江市のあたりで生産された八雲塗であることがわかる。

八雲塗は、明治時代に広まった安価な土産品。表面に塗った透漆をとおして、色鮮やかな彩漆の文様をみせるのを特色としている。(小松・吉廣)





135

## 竹編流水沢瀉漆絵箔絵方盆

1枚

Woven bamboo tray

大正

史料館No.214 | ラベルNo.1417

地理270 | 一閑張角盆 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(2円)

目の詰んだ四ッ目編で見込を形づくり、立ち上がりに割竹を廻らした方盆。見込から立ち上がりにかけては透漆を塗り、底面を黒漆塗とする。見込には漆絵に金と錫の箔を交えて流水に沢瀉の文様をあらわす。

付属するラベルから、「萩町立工業伝習所」で製作されたものであることがわかるが、この伝習所についての詳細は不明である。(小松・吉廣)



136

## 透漆塗煙草入

1具

Clear-lacquered cigarette case

大正

史料館No.247

地理260 | 光琳形巻煙草入 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(6円)

丸角で胴張、甲盛のある箱。やはり丸角で器体に丸みのある盆が付属している。

器表は、木地を赤い顔料で染めてから透漆を塗る<sup>せきしつ</sup>赤漆の手法で装飾されており、蓋裏から見込、盆の立ち上がりには、わざと<sup>のみあと</sup>鑿跡を残して文様とする。

付属するラベルに「讃岐商会高松市今井戸」とあり、香川県高松市で行なわれてきた彫木漆塗の技法による器物であることがわかる。(小松)



137

## 桜花堆錦箱

1台

Box with cherry blossom motif in coloured lacquer carving

大正

史料館No.184 | ラベルNo.1222

地理130 | 琉球塗 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(2円)

長方形、丸角、被蓋造の浅い箱。蓋表にはわずかな甲盛があり、蓋壁には手掛けを削る。

蓋から身にかけては全体を朱漆塗とし、底面のみを黒漆塗とする。蓋表の桜花文様は堆錦であらわす。堆錦は、餅状にした彩漆の塊を薄く延ばし、文様の形に切って貼り付けるもので、琉球漆器に独特の手法である。

蓋表に島津製作所のラベル「琉球塗(那覇地方)」が貼付されている。(小松・吉廣)



138

## 水仙鳥箔絵蒔絵菓子器

1合

Confectionery bowl with narcissus and birds motif in *haku-e*

年代不詳

史料館 No.230

やわらかい起伏(照りむくり)のある蓋を付けた菓子器。総体を黒漆塗とし、水仙の花や鳥は金の箔絵で、また、水仙の葉や流水文は金の消粉蒔絵であらわしている。(小松)



139

## 蘭螺鈿花入

1口

Flower vase with orchid motif in mother-of-pearl inlay

年代不詳

史料館 No.107

水牛の角を加工してつくられた掛花入。中央に錫製の落としをはめ込み、3ヶ所に紐金具を打つ。

全体に黒漆を塗り、薄貝螺鈿で蘭の文様をあらわしている。

(小松)



140

## 富士帆掛舟図蒔絵硯箱

1合

Writing box with motif of landscape at Mihonomatsubara in *maki-e*

年代不詳

史料館 No.261

大量に製作された安価な土産物のひとつ。

長方形被蓋造の硯箱で、蓋表にわずかに甲盛を付け、蓋鬘に手掛けを削る。身の内に下水板1枚を収めている。

全体を黒漆で塗り、金の消粉を用いた蒔絵に銀蒔きを交えて文様をあらわしている。(小松)





## 中国故事螺鈿乱箱

1口

Lidless box with design based on an ancient Chinese tale, in mother-of-pearl inlay

大正

史料館No.220 | ラベルNo.1274

地理163 | 螺鈿乱箱 | 大正13年(1924)12月4日 | 木村伊三次郎/寄贈

乱箱は、化粧道具、香道具といった小さな器物を仮に収めるための箱。本作品は長方形で、側板に鎬を付ける。全体を黒漆で塗り、見込に「叱石成羊」の四文字と抽象化された人物、羊の文様を螺鈿であらわす。

中国の仙人にまつわる故事を集めた『神仙伝』には、「叱叱羊起」と声をかけて、そこにあった無数の石を羊に変える、という羊飼ひ黄初平の超能力譚が載せられている。これは、そのエピソードを主題としてつくられた作品である。

なお、本作品に付属する『螺鈿漆器普及會趣意書』によって、戦前に、木村伊三次郎という人物が、近代朝鮮螺鈿漆器の研究に携わり、その後、製造、販売を企図していたことがわかる。また、箱蓋裏には「天紅鑑作」の書入と「天紅」印がある。

(小松・吉廣)



#### コラム 4 column

### 関東大震災後の標本収集

大正12年(1923)の関東大震災で、学習院は教材や標本に甚大な被害を蒙った。博物標本はほぼ全焼し、歴史地理標本は一部焼失を免れたが、救い出せたものはわずかだった。

高松宮家をはじめ、各宮家から書籍等の下賜を受けるとともに、帝室博物館へ援助を依頼する等、教材の緊急確保をおこなった。翌年夏期休暇中には、改めて各地へ教員が派遣され、標本類の再収集に努めている。大正13年(1924)7月25日には「今般本院教授板澤武雄ヲ歴史地

理標本蒐集ノ為来ル 月 日頃貴県下ニ出張致サセ候ニ付到着ノ上ハ万事可然御配慮被成下度御依頼申上候」と学習院長名で、新潟、富山、石川、福井、鳥取、島根各県知事への依頼文が出された。博物学飯田謙二教授も博物標本収集のために日本石油東山鉱業所、柏崎製油所、岐阜県神岡鉱山、石川県尾小屋鉱山等へ出向いている。

大正12年10月から翌年12月までに『寄贈品取扱簿甲』(学習院アーカイブズ所蔵)にあらわれる寄贈品は191件にのぼ

る。この中には石田幹之助よりの「満州及支那各地絵葉書」345枚や「モクチンヨン螺鈿乱箱」(No.141 中国故事螺鈿乱箱)等が含まれる。石田幹之助は板澤武雄の先輩にあたる。おそらく、板澤より標本収集の話聞き、手元にある絵葉書を寄贈したと思われる。

白鳥庫吉等が尽力し収集した貴重な標本類が焼失したことは、大変不幸ではあったが、1924年前後という時間を切り取った各地の標本再収集は、貴重なコレクションが形成出来たということでもある。

(長佐古)

## 狸形盆 埋木製

1枚

Tray in shape of raccoon dog (based on a Japanese tale)

大正

史料館 No.209 | ラベル No.1165

地理 74 | 埋木盆 | 大正 13 年 (1924) 7 月 5 日 | 購入 (4 円 50 銭)

狸は、大きく広げた陰囊の皮をかぶせて人を化かすという。これはその「狸の千畳敷」を形にした盆である。美しい木目のある木地に拭漆を施して、深みのある艶を引き出している。

見込に貼付されたラベルに「宮城県」、「原簿」に「埋木盆」とあるところから、本作がいわゆる仙台埋木細工であることがわかる。

仙台埋木細工とは、市内の青葉山、八木山一帯から出土する古木を材料としてつくられた木製品のこと。江戸時代の末期に、仙台藩の下級武士の内職としてつくられ始め、その後、明治、大正を通じ、当地の土産品として人気を集めた。(小松・吉廣)



## 木彫彩色越後人形

1体

Figurine of labourer in Echigo, wood carving, colouring

大正

史料館 No.181 | ラベル No.1279

地理 166 | 越路人形 横引 | 大正 13 年 (1924) 12 月 20 日 | 購入 (1 円 40 銭)

雪中、俵を乗せた轆を曳く農夫をあらわした人形。箱書によって、越後高田市(現新潟県上越市)の木村初造が製作したものであることがわかる。(小松・吉廣)



## 木彫彩色高砂人形

2体(一対)

Figurine with Takasago motif, wood carving, colouring

大正

史料館 No.198 | ラベル No.1396

地理 249 | 奈良人形 | 大正 14 年 (1925) 12 月 12 日 | 購入 (15 円)

能の「高砂」に登場する翁と姥をあらわした人形。一刀彫で、全体に彩色が施され、姥の衣装には金彩が用いられている。いわゆる奈良人形の典型作である。奈良人形は、春日社の祭礼の装飾としてつくられたのが始まりといい、平安以来の古い伝統をもつ。能、狂言を主題としたものが多く、中でも「高砂」は定番となっている。

なお、「高砂」では翁は熊手を持ち、姥は箒を持つというのが定型だが、本作では翁の手が破損しているために熊手を持たせることが出来ず、箒は欠失している。箱裏書に「奈良人形師木島良宗造之印」とあって、これが奈良の人形師木島良宗によってつくられたものであることがわかる。(小松・吉廣)





145

## 木彫鷹置物

1点

Figurine of hawk, wood carving

年代不詳

史料館No.200

まさに岩から飛び立とうとする鷹を彫り出した置物。表面に黒色の塗料を塗って黒檀製を装っている。(小松)



146

## 木彫登山人形

1点

Figurine of alpinist, wood carving

昭和

史料館No.179 | ラベルNo.294

地理294 | 木彫深山人形 | 昭和8年(1933)1月17日 | 田坂文穂/寄贈

直径5cmほどの白樺の枝を用いて、切り立った崖を登る人物、それを上からロープで引き上げようとする人物のふたりを彫り出した置物。白樺の樹皮を彫り残して、ごつごつとした崖の表面に擬えている。底に「一念」の墨書がある。

この作品については、箱蓋表の墨書と『原簿』によって、昭和8年(1933)に田坂文穂から寄贈されたものであることが知られる。この人物及び寄贈の経緯については詳らかにすることが出来ないが、一部の愛好家による登山ブームが到来したこの時期、現地で売られていた土産物を持ち帰り、寄贈されたものであろうか。(小松)



147

## 松樹鯉蒔絵花入 竹製

1口

Flower vase with pine and carps motif in maki-e, bamboo

大正

史料館No.304 | ラベルNo.1390

竹製の大型花入である。表面には金の平蒔絵で松と2尾の鯉をあらわす。松は精気溢れる常緑の植物であり、鯉は滝を登って竜になるという。桐に鳳凰、梅に鶯、松に鶴、楓に鹿といっためでたい植物と動物の取り合わせを瑞禽嘉木というが、この松に鯉の図も、それらと同様、慶賀の意を込めて描かれたものだろう。(小松・吉廣)



148

## 籐編手付籠

1点

Rattan handled basket

大正

史料館No.139 | ラベルNo.1399

地理252 | 蔓細工 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(5円)

籐を細かく編み込んで形づくった籠。果物籠等の用途に供されたものであろう。  
(小松)



149

## 箸・楊枝・菓子切 珊瑚製

1組

Chopsticks, toothpicks, *kashikiri*, white and black corals

大正

史料館No.236 | ラベルNo.1395

地理248 | 白珊瑚海松箸 | 大正14年(1925)12月12日 | 購入(10円)

白珊瑚と海松(黒珊瑚)でつくられた箸、楊枝、菓子切りのセットである。

共箱に貼付された題箋には、「米国／聖路易／萬國大博覧會／名譽／金牌受領／鳥取／名産／珊瑚御箸／鳥取市智頭街道筋／製造元湯本號／岡田長太郎(印)」とあり、これが鳥取市内で製造、販売されたものであること、また、同種の製品が明治37年(1904)のセントルイス万国博覧會に出品されたことがわかる。  
(小松・吉廣)



150

## 竹編瓢箪型花入

1口

Flower vase of woven bamboo in shape of gourd

大正

史料館No.140 | ラベルNo.1409

地理262 | 花生籠(竹製) | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(14円50銭)

本体は瓢箪を象ってつくり、肩の部分に双耳と鐙を付ける。

表面は片締め編みで、密度濃く編み込まれている。竹製の落としが付属している。  
(小松)





## 風鎮 馬蹄石製

一組

*Fuchin, obsidian*

大正

史料館No.186 | ラベルNo.1293

地理180 | 馬蹄石風鎮 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(3円70銭)

掛軸を安定させるため軸端に掛ける風鎮である。共箱裏のラベルには「博覧会共進会受賞特有物産瑠璃水晶馬蹄石美術宝石細工品」とある。本体は馬蹄石と呼ばれる隠岐島特産の黒曜石でつくられ、茶色の糸で組まれた緒と房が付属している。

(小松・吉廣)



## カフリンクス 青瑠璃製

一対

*Cufflinks, blue agate*

大正

史料館No.223 | ラベルNo.1292

地理179 | 青瑠璃カフス釦 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(2円50銭)

ドレスシャツやブラウスの袖口をとめるための装身具である。本体(フェイス)と留具(バックング)を青瑠璃で作り、このふたつの部分を銀の鎖で繋いでいる。

フェイスとバックングの連結方法は幾通りもあって、現在では、T字型のバックングをもつスウィヴル(Swivel)式が一般的だが、資料は古典的なチェーン式となっている。

なお、日本では一般にカフスボタンと呼ばれるが、カフリンクスとするのが正しい。

(小松)



## 屋形船模型 鼈甲製

1点

Miniature boat, tortoise shell

大正

史料館No.178 | ラベルNo.1147

地理60 | 鼈甲和船 | 大正13年(1924)2月25日 | 購入(15円)

鼈甲でつくられた屋形船のミニチュア。精巧につくられ、窓の開閉をすることが出来る。本作の外箱には「長崎市魚ノ町／江崎商店」と記された紙片が入っており、これが今日まで続く長崎の老舗、江崎鼈甲店で製造・販売されたことがわかる。鼈甲は、タイマイの甲からつくられる装飾材料である。江戸時代には、出島のオランダ商館を通じて輸入されたので、長崎で鼈甲細工が盛んに行なわれるようになった。この長崎鼈甲細工は、特に幕末から明治期にかけてわが国を訪れた外国人に人気があり、膨大な数が土産として海を渡った。明治24年(1891)に国賓として来日したロシアの皇太子ニコライ2世も、微行で長崎の街を散策し、鼈甲製品を買い求めたといわれる。(小松・吉廣)



## 櫛 鼈甲製

1枚

Comb, tortoise shell

昭和

史料館No.180 | ラベルNo.1148

地理296 | 鼈甲クシ | 昭和8年(1933)3月1日 | 板澤武雄／[寄贈]

髪飾りとして用いられる縦長の櫛。末広かりの棟に4本の歯を付ける。棟には西洋風の唐草文様が透彫されている。

本作の外箱蓋裏に貼付されたラベルには、「宮内省御用達鼈甲美術品製作所」「各国大博覧会於最高名誉大賞牌受領」「江崎栄造謹製」等の記載があり、これがNo.153「屋形船模型 鼈甲製」と同じく長崎の江崎鼈甲店で製造・販売されたものであることがわかる。(小松・吉廣)



## 濤鶴図鉄瓶 南部

1口

Iron kettle with motif of crane and waves, Nambu ware

大正

史料館No.166 | ラベルNo.1412

地理265 | 鐵瓶 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(10円)

やや口のすばまった寸胴形の鉄瓶。胴に濤に鶴の文様を鋳出し、蓋には松笠を象った鈕を付ける。

南部鉄器は、南部氏が盛岡に拠点を定めた慶長、元和のころに始まったと伝えられる。当初は、茶の湯に用いる釜等の製作が中心だったが、江戸時代の中ごろから、鉄瓶を始め、日常生活に用いる鉄器も盛んにつくられるようになった。

なお、本作に付属する商標紙には、「岩手縣盛岡市生姜町／南部鐵瓶／製造元／鈴木徳之助」のスタンプが捺されており、これが明治26年(1893)、シカゴで開催された万国博覧会で褒賞を受けた鈴木徳之助の工房で製作されたものであることがわかる。(小松・吉廣)





156

## 菊図象嵌壺 銅製

1口

Flower vase with chrysanthemum motif in inlay, bronze

大正

史料館No.231 | ラベルNo.1286

地理173 | 加賀象嵌花瓶 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(10円50銭)

すっきりと整った形をみせる丈の高い壺である。器体は銅でつくられ、金、銀、四分一を象嵌して、大輪の花を付ける菊枝の文様をあらわす。紫檀製の台が付属している。本作に付属する商標紙には「貴金屬装身具／加賀象嵌銅器／製作販賣／金澤市北石坂町／櫻谷亀六」とある。加賀前田家は、2代利長、3代利常のころから、工芸技術の発展に力を注ぎ、陶磁、染織、漆芸等、様々な分野で独自の境地を拓く。金工についても、室町以来の金工の家系である後藤氏を京都から招いて、刀装小道具の制作にあたらせ、加賀象嵌の礎を築いた。(小松・吉廣)



157

## 垂飾文象眼双耳壺型花入 銅製

1口

Two handled flower vase, inlaid with silver, bronze

大正

史料館No.303

地理167 | 銅器象嵌薄端 | 大正13年(1924)12月20日 | 購入(11円)

本体の双耳壺、大きな鐙の付いた受口、三足付き基台の3部からなる花入。双耳壺の胴上部には、垂飾の連続文様を銀象眼であらわす。

どのような場面で使われたものか定かではないが、唐物の花入をイメージして製作されたものであろう。

一般に薄端と呼ばれる形の花器で、鋳物の産地である富山県高岡で製作されたものである可能性が高い。(小松)



158

## 花卉草花文茶入 錫製

1口

Tea caddy with motif of grass and flowers, tin

大正

史料館No.264 | ラベルNo.1143

地理55 | 丸型錫製茶入器 | 大正13年(1924)2月25日 | 購入(4円80銭)

器表に梅竹の文様を鋳出した小壺型の茶入。錫の茶入は密閉性が高く、茶葉の保存に適しているとされる。(小松)



## 刀 銘 信濃守藤原弘包

1口

Katana sword,  
signed "Shinanonokami Fujiwara Hirokane", used by Maresuke  
NOGI

江戸

史料館 No.A6

歴史5 | 黒漆太刀(故乃木院長遺物) | 大正2年(1913)3月15日

緩やかに反りをうたせた刀身に浅い湾れ調の刃文をあらわす。茎には「信濃守藤原弘包」の銘が刻まれており、これが大和手掻派の流れを汲む藤原弘包の作になるものであることがわかる。弘包銘を切る刀工は数代の存在が確認されるが、本作品が何代目の手になるものかは明らかではない。

なお、刀身には銅製の鐙が付属しており、その佩表側に丸に菱三ッ巴、裏に市松四ッ目結の家紋が線刻されている。巴紋については審かにし得ないが、市松四ッ目結は乃木家の家紋であることが知られており、この刀が乃木の所用となつてから鐙が調製されたことがわかる。

拵は黒漆太刀拵。全体を黒漆塗とした太刀拵である。柄には細い緒を巻き詰めて漆で塗り固め菊花紋を象った目貫を付ける。鐙、兜金、口金物、足金物、責金、鐙等の刀装具は全て表面を黒漆仕上げとする。また、手貫緒と帯執の革は紺地に小桜を染め抜き、太刀の緒の革には獅子牡丹の文様をあらわしている。

古様を模してはいるが近代の作であり、弘包銘の刀が乃木の所用となつてから、これを太刀として用いるために造られた拵であろう(→コラム5)。(小松)



## 160

## 刀 銘 長盛

1口

Katana sword,  
signed "Nagamori", used by Maresuke NOGI

江戸

史料館 No.A7

緩やかに反りをうたせた刀身に浅い湾れ調の刃文をあらわす。茎には「長盛」の銘があるが、「長」の上方に茎表面を削り取った痕があり、本来は「平長盛」の三字銘が刻まれていたと推測される。平長盛には数代あって、室町末から江戸前期にかけて豊後高田を拠点に活動していた家系であることが知られている。時代の上がる作刀に二字銘を切ったものが多いため、「平」の文字を消して古作を装ったものとも考えられる。

なお、茎に4つの目釘孔があるところから、何回かの磨上げを経て現在の形になっていることがわかる。

拵は石地塗打刀拵。鞘は雲文を浮かび上がらせた石地塗とし、柄は鮫皮で包み、紺色の糸を巻いて銅製、二ッ巴の旗指物を象った目貫を付ける。鐙、縁頭、栗形、鐙等の刀装具はいずれも銅製で、鐙の表裏には柳に馬、流水に桜の文様を線刻し、他の金具には二ッ巴を彫り出す。

漆工、金工ともに凝った装飾は施されておらず、全体に地味な作行をみせる。質実を旨とした乃木の好みに合ったものであろうか。(小松)





## スナイドル銃

1挺

Snider-Enfield imported to Japan in the late Edo period

19世紀

史料館No.A8

歴史133 | 古式銃 | 昭和8年(1933)5月5日 | 有馬純尚/寄贈

スナイドル銃は1866年に使用され始めたイギリス製の銃である。イギリスで1853年に開発されたエンフィールド銃を後装式に改造したもの。エンフィールド銃は、発射前に火薬を銃口から注ぎ、棒を使って弾丸を押し込むという動作が必要であったが、スナイドル銃は薬莖と弾丸が一体になっているため、装填から発射までの時間が大幅に短縮された。幕末の日本にはエンフィールド銃が多く輸入されており、スナイドル銃に改造する方法が伝えられると全国各地で改造が行なわれた。戊辰戦争では新政府軍の主力小銃として用いられ、明治陸軍でも主力小銃として採用された。西南戦争では警視庁から派遣された巡査隊も装備した。明治13年(1880)に国産の村田銃が陸軍に正式採用されると民間に払い下げられた。弾丸は鉛製で、いわゆるダムダム弾と呼ばれるものである。非常に高い殺傷力を持つため、1907年のハーグ条約によって使用が禁止された。有馬純尚はNo.31の寄贈者有馬華子の長男。

(長谷川)



## スペンサー銃

1挺

Spencer repeating rifle

19世紀

史料館No.A9

歴史133 | 古式銃 | 昭和8年(1933)5月5日 | 有馬純尚/寄贈

スペンサー銃は、1860年にアメリカのスペンサー社によって開発された管状弾倉装填式・手動操作式のレバーアクションライフルである。チューブ式の弾倉を銃床尾に挿入する、世界初の後装式連発銃である。南北戦争において北軍が使用したことで知られている。当館所蔵の銃は銃身が短く、馬上での取り回しがしやすく改造された騎兵銃(Spencer carbine)である。通常のスペンサー銃と比較して騎兵銃の命中精度は低い。また、装弾機構に故障が多く、弾倉の強度に問題があったため、米国陸軍で正式採用されることはなかった。

スペンサー銃・スペンサー騎兵銃は南北戦争の払い下げ品が幕末に輸入され、大鳥圭介が率いる幕府歩兵隊や鍋島藩が装備していた。戊辰戦争や西南戦争でも用いられたが、比較的高価であったため国内での現存数は少ない。

(長谷川)



## 鳥追銃砲

1挺

Firearm for deterring birds

年代不詳

史料館No.A10

歴史133 | 古式銃 | 昭和8年(1933)5月5日 | 有馬純尚/寄贈

一見したところ、ライフル銃と同様の形態であるが、銃身の先端下部にレバーが付けられており、一般的な銃弾の発射は出来ない。「鳥追い銃砲」として鉄砲刀剣類所持等取締法に登記されていることから、猟銃として生産された銃を改造した特殊なタイプと考えられる。薬莖が付属した弾頭を銃口に挿入してレバーを引き、銃尾(射撃する際に肩に当てる部分)を地面に付け、45～60度の角度で斜めに発射するものであろう。発射する弾頭の種類は、散弾或いは手榴弾型と考えられる。戦前の学習院における教練に使用されたとすれば、擲弾筒(小型の迫撃砲)の発射訓練用とも考えられる。なお、本資料には銃口と薬室に鉄の棒が挿入・溶接されている。また薬室と銃身にスリットが施され、トリガー・メカニズムは動作しない。

(長谷川)



## 火縄銃

1挺

Matchlock gun

年代不詳

史料館No.A11

歴史133 | 古式銃 | 昭和8年(1933)5月5日 | 有馬純尚/寄贈

構造の特徴としては外バネ式であること、目当(照準器)は前方に向かって緩やかにカーブする袖型であることが挙げられる。八角形の銃身を持ち、銃身と銃床は目釘ではなく鉄製のリングで固定されている。全体の形状を見る限り、用心鉄(引き金を取り囲む金具)が取り付けられていることを除けば、備前で製作された備前筒の特徴と多くが合致するが、製作年代や生産地等の詳細は不明である。江戸時代の作とは思われるが、江戸の中期以降、主要な生産地以外でも全国的に広く火縄銃の製作は行なわれており、形状のみで生産地や時代を判別することは困難である。

銃床には花の形の飾象嵌があるが、無銘。カラクリ(発火装置)は正常作動し、火蓋の開閉にも問題はない。なお、本来銃身の下に収まっているカルカ(薬杖:弾丸装填用の棒)は失われている。

(長谷川)





## 西南戦争使用銃弾

30点

Bullets, used in Kagoshima Rebellion (Seinan War)

明治

史料館No.191・210・213・219・185

歴史185 | 明治十年西南ノ役使用小銃弾 | 昭和13年(1938)6月29日 |

久米正七郎ノ寄贈

西南戦争で用いられた銃弾類。ドングリ型をしたものは、使用前は動物性グリスで塗り固められた紙製薬莢に収められており、エンフィールド銃、スペンサー銃、スナイドル銃等の銃弾がこれにあたる。球体のものは、火縄銃等、旧式銃の弾丸と推定される。薬莢は、エンフィールド銃を後装式に改造したスナイドル銃のものであろう。西南戦争では新旧の銃が入り乱れて使用されたことから、本資料にも各種の銃弾が混在している。

火縄銃を除き、西南戦争で用いられた銃(ミニエー銃の派生型)の銃身内部にはらせん状の筋(ライフル・旋条)が入っているため、銃弾は高速で回転しながら発射され、威力が高い。また、銃弾にはタミシエ・グルーヴと呼ばれる線が刻まれており、空中での安定性を確保する。銃や弾丸の改良によって銃弾の威力は増したが、これら鉛製の銃弾は、被弾の際に変形して潰れ(いわゆるダムダム弾)、人体に大きな損傷を与えることから、後に陸戦法規で使用が禁止された。

(長谷川)



## コラム5 column

### 乃木希典

学習院第10代院長を務めた乃木希典は、長州出身の陸軍軍人である。西南戦争、日清戦争、日露戦争に出征し、また陸軍の軍紀肅正にも関与した。日露戦争においては、第三軍司令官として旅順要塞攻略作戦を指揮した。作戦は多大の犠牲を伴い、その激戦は203高地の戦いに象徴される。日露戦後、乃木は皇孫教育を明治天皇から託され、学習院長に就任した。全寮制を導入するとともに、質実剛健を旨とするいわゆる乃木式教育を行ない、大正元年(1912)に自決するまでそ

の任にあった。現在も、学習院には乃木ゆかりの建築や史料が多く残されている。

乃木が学生と起居をともにした宿舎は「乃木館」としてキャンパス内に保存されている。またその横には「御榊壇」がある。これは、明治42年(1909)に行なわれた明治天皇の学習院行幸を記念し、乃木が自費で造営したモニュメントである。台湾、朝鮮半島、樺太や旅順要塞等、「日本帝国」の国境から採集した80個の石が前方後円型の壇を取り囲み、中央には天覧の榊が植えられている。

学習院大学史料館、学習院大学図書館、学習院アーカイブズには、関連の史料が所蔵されている。乃木の死後、遺された親族から多くの遺品が学習院へ寄贈されたからである。それは例えば、剣道具や着用していた軍服・靴といった日常の品から、自筆の書、写真、花瓶等多岐にわたっている。軍服や刀剣、盃、煙草入等は「院長在世中ノ寄贈品」とともに歴史地理標本室に保管され、学生の教育資料としても活用されていた。

(長谷川)

## 紺紙金泥大般若經断簡

1枚

Fragment of *Daihannya-kyo* (Mahaprajnaparamita Sutra)  
written in gold letters on dark blue paper

奈良

史料館No.321-45 | ラベルNo.1484

歴史94 | 紺紙金泥寫經断片 | 昭和4年(1929)11月13日 | 浅野長武/寄贈

この断簡は、唐の玄奘三蔵の訳になる大般若波羅密多經(いわゆる大般若經)600巻のうちのもので、巻89のなかの「初分求般若品第27の1」の一部であるが、書写年代は不明。現状では、巻子の貼り継ぎがはがされていて、料紙1枚分のみが残されており、表面右端には、はがし取った際の糊跡が2mm幅で残る。上下端は原状のまま。寄贈者浅野長武は東京国立博物館館長を務めた。(鐘江)



## 紺紙銀泥華嚴經断簡(二月堂焼経)

1枚

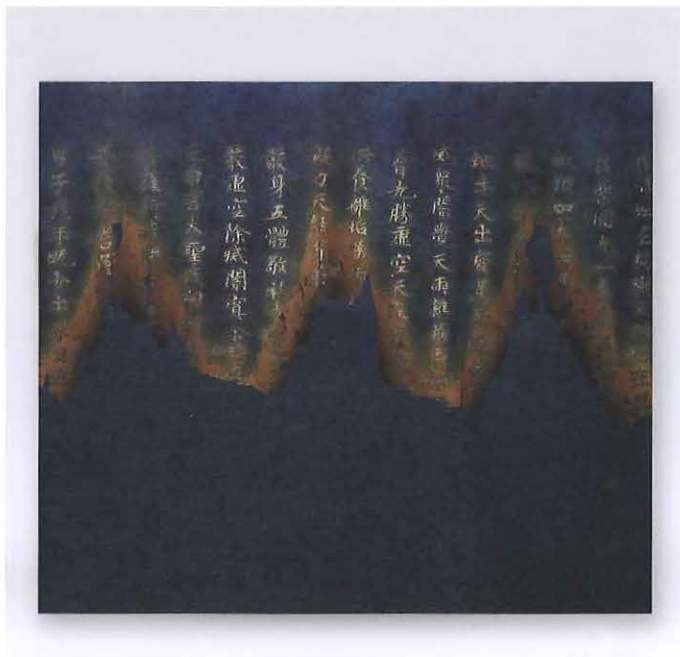
Fragment of *Kegon-kyo* (Avatamsaka Sutra) in silver letters on dark blue paper (Nigatsudō Yakegyo)

奈良

史料館No.321-46 | ラベルNo.1485

歴史95 | 紺紙銀泥寫經断片 | 昭和4年(1929)11月13日 | 浅野長武/寄贈

下半に焼けた痕跡があり、寛文7年(1667)2月13日夜から翌朝にかけての東大寺二月堂のお水取りの際に二月堂が失火炎上し、その焼跡からみつかったいわゆる二月堂焼経のひとつとみられる。二月堂焼経は奈良時代の天平年間のもので、紺紙銀泥経としては、日本に現存する最古のものである。この断簡は、東晋の仏馱跋陀羅(ブッダバッタラ)の訳になる60巻本の大方便華嚴經(いわゆる華嚴經)の巻48「入法界品第34の5」の一部で、善財童子が教を求めて様々な人々に出会う話が記されている。(鐘江)





## 東山道鎮撫総督達（高札）

2枚

Official bulletin board erected by Pacification Governor  
General of Tosando Road during the Boshin War

江戸  
史料館 No.131

本資料は、戊辰戦争中に、新政府軍側の東山道鎮撫総督執事が東山道諸国村々の役人に出した達の刷り物を板に貼ったもので、高札の一種といえよう。高札は、法令や禁令を板札に墨で直接記すのが一般的であるので、このようなタイプのものは珍しい。

戊辰戦争は、慶応4年(1868)1月3日鳥羽・伏見の戦いに始まり、1年5ヶ月にわたって西日本、東北、北海道等各地で繰り広げられた内戦である。新政府は、全国平定のために東征軍を編成し、東海道、東山道、北陸道に分けて進軍を行なった。東山道は畿内と東山道諸国を結ぶ幹線道路で、東山道鎮撫総督には岩倉具定(具視次男)が任命され、1月21日に京都を進發した。関東下向にあたって、東山道鎮撫総督は、軍の統制を図り、人民の信頼を得るために達を数通出している。そのうちのふたつの達(高札)で、①は、街道筋の窮民の救済や忠臣・孝子・義父・節婦等評判の高い者には褒美を与えるので申し出よ、という内容。②は、滋野井(公寿)や綾小路(俊実)の家来と偽り、略奪・無法なことをする者達がいたら捕えて本陣へ訴え出、もし手向かえば討ち取っても良い、という内容。公卿の滋野井や綾小路は、当初官軍の先鋒として認められていたものの、のちに偽官軍とみなされ処分された相良総三率いる赤報隊の結成に関わった人物である。(丸山)



## 『校刻日本外史』板木

2枚

Woodcuts of "Nihon Gaishi", a book written by Sanyo RAI in the Edo period

明治  
史料館 No.124

『日本外史』は武家の興亡を書いた頼山陽の著作(1827年成立)で、幕末の尊王攘夷運動や勤王思想に多大な影響を与えた。明治以後は漢文の素読教科書に採用された。

出版された『日本外史』は80余種に及んだが、本資料は一面10行22字で、訓点・頭注はあり、ルビはない。これらの特徴と板木上部に「松平家」と刻まれていることから、「川越版日本外史」と呼ばれる博諭堂のち松平家蔵版『校刻日本外史』と推察される。

博諭堂は、直基系越前松平家8代目当主で川越藩主松平齐典(1797~1850)が創設した藩校である。『校刻日本外史』は藩儒保岡嶺南の校訂により天保15年(1844)に成立。全22巻12冊。博諭堂蔵版は第1・2版までで、改刻後の第3版から第14版までは松平直方・伯爵松平基則が継承し、明治39年(1906)に版權は消滅した。

現在、学習院大学史料館には巻3について表・裏2丁張、2枚の板木がある。『校刻日本外史』の板木は川越市立博物館松平大和守家文庫にも収蔵される。(藤實)



## 『山陽先生金剛山懷古詩帖』板木

5枚

Woodcuts of "Sanyo-sensei Kongo-san Kaiko shijo", a book of Chinese poems on reminiscences of Mt. Kongo written by Sanyo RAI

明治

史料館No.65 | ラベルNo.1506

歴史113 | 山陽書木版 | 昭和6年(1931)5月6日 | 小林茂/購入(30円)

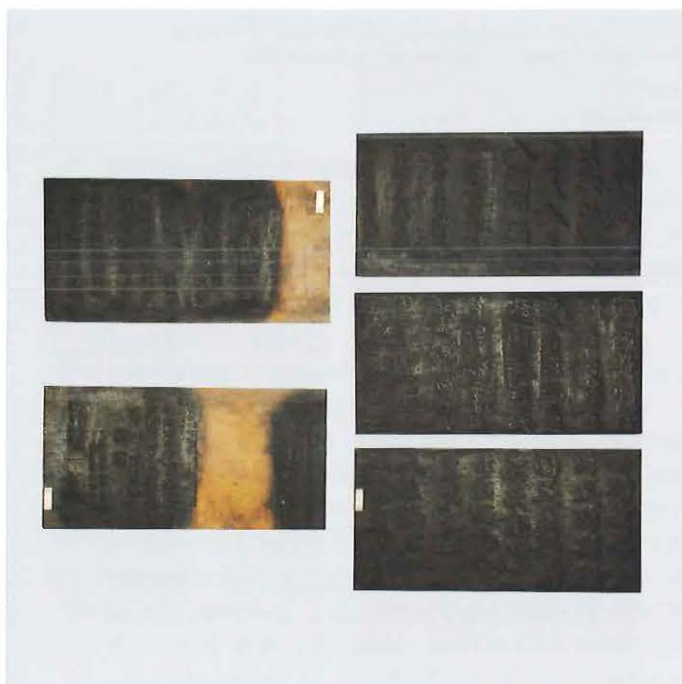
頼山陽は職業書家ではなかったが、彼の書は多くの人々を魅了し高い評価を受けた。山陽没後、その名声が高まるにつれて、その遺墨を求める人も増えていった。

書名『山陽先生金剛山懷古詩帖』は板木に刻まれた題簽による。板木には刊記「明治十五年八月十二日御届、同年同月出版」、翻刻人の名前が「静岡県遠江国磐田郡見付宿百六番地古沢良作」とある。但し、刊記・名前ともに木片で繕う「埋め木(入木とも)」が施されており、古沢良作は版權を他から購入したものと推察され、従って成立年代は明治15年(1882)を遡る。

本文は一面4行5字の大きな文字で、左右の天地が逆になっている2丁張。1丁分の料紙の横幅は狭く、折本の習字用教科書の板木であると思われる。

現在、学習院大学史料館には表・裏2丁張、5枚の板木がある。

(藤實)



## 明治教科書板木

6枚

Woodcuts of textbooks made in the Meiji period

明治

史料館No.33・13 | ラベルNo.1507

歴史114 | 古木版(版木) | 昭和6年(1931)5月6日 | 小林茂/購入(9円)

①・②明治8年(1875)文部省刊、師範学校編『日本略史』下巻。

③明治15年刊、古沢喜代作編『開明字林大成』。出版人は古沢良作。

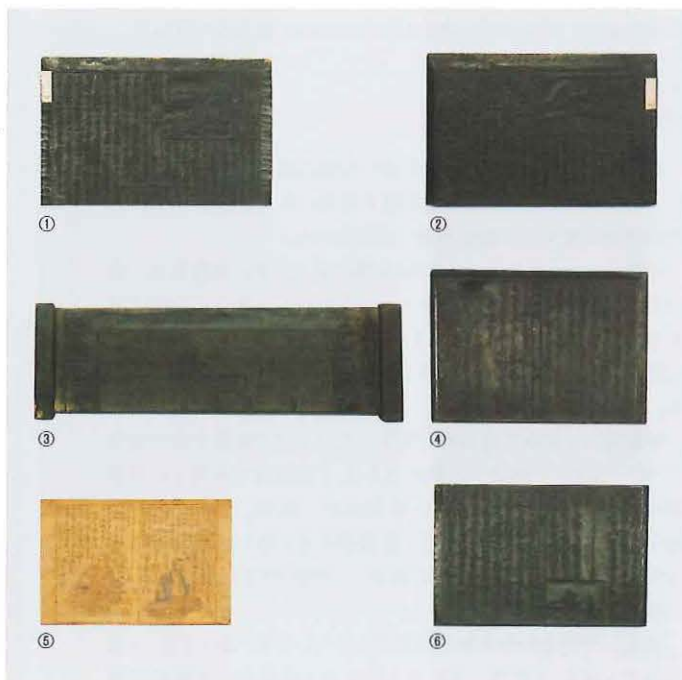
④明治15年刊、阪部退園編『日用自在 女要文』。出版人は古沢良作(静岡県下遠江国磐田郡見付宿百六番地)。

⑤多色摺り用の板木で、板面の形式は上段に松平太郎・寺島宗則、玉乃世履・三好重臣についての120字ほどの略伝、下段に肖像画と和歌を載せる。

⑥文部省刊『小学読本』巻2。各府県で発行されており出版人は不明だが、内容から田中義廉が編輯したアメリカのウィルソン・リーダーの系統とわかる。

③④以外には挿絵があり、いずれも本文と同じ板木に彫られている。つまり、明治20年代に盛行する木口木版ではなく、板目木版である。従って、年代不詳の⑤⑥も明治10年代までに彫られた板木であろう。

(藤實)





## 帝室博物館と学習院

明治10年(1877)華族会館により開校した学習院は、同17年宮内省所管となった。同5年に開館した博物館は同19年宮内省図書寮の付属になり、学習院と同じ宮内省所管となった。博物館は同33年に帝室博物館と改称された。

同じ省内であったことから、学習院では関東大震災直後の9月6日には博物学教授飯田謙二を帝室博物館に派遣し、助力を依頼している。

帝室博物館は長年、動・植・鉱物標本を主とする天産部関係資料の譲渡先を模索していた。大正13年(1924)8月16

日には帝室博物館総長大島義脩より学習院長宛に「当館天産部列品ヲ文部省へ引渡ノ件ハ進捗致シ候間貴院ニ於テ御希望ノ列品ハ此ノ際至急其ノ品名御申越相成度候也」との照会がきている。これに対し学習院は「亜米利加獺」等10点と陳列箱の保管転換を回答した。最終的には記録上3040点の標本が学習院へ保管転換されている。これらの標本(約300点)と陳列箱は現在学習院高等科標本保管室に収蔵されている。なお、この時期の帝室博物館総長大島義脩は初代女子学習院長を務めた後に帝室博物

館総長に異動し、着任3日後に関東大震災に遭遇した。

その後も大正15年(1926)には「歴史及美術ニ関スル写真版絵葉書類」寄贈を、昭和2年(1927)には「ブラングインのエッチング額5面」の借用を、同4年には「正倉院御図録」の寄贈を願い出ている。

帝室博物館は昭和22年(1947)より国立博物館に、同27年より東京国立博物館と改称された。歴史地理標本室へNo.166「紺紙金泥大般若経断簡」を寄贈した浅野長武も同26年より国立博物館長を務めている。(長佐古)

## 宮内省移管資料

学習院には昭和大礼(即位礼・大嘗祭)に際して調製され宮内省から保管転換された装束類が伝存している。洋装が取り入れられた近代日本において、大日本帝国憲法下における登極令に基づいて初めて行なわれた大正の即位礼に際しては、儀式に応じて多数の装束が調製された。『大礼書類』十八ノ五には大礼以後における束帯・衣冠等の取り扱いが記録されている。「大礼ニ関スル儀式ニ於テ職務上束帯又ハ衣冠ヲ着用シタル者ニハ其束帯・衣冠ヲ附属品ト共ニ(威儀物ヲ除

ク)下賜スルコト」とされ、「大礼使高等官(奏任取扱ノ嘱託ヲ含ム)ニシテ職務上束帯ヲ着用セサル者ニハ、其ノ官階ニ応シ即位礼当日ニ着用シ得ヘキ束帯ヲ下賜スルコト」となり、予備として調製されたものと頒賜の残余は内閣と宮内省に引き継がれた。

大正大礼を先例として行なわれた昭和の即位礼に際しても、大礼後に装束は着用者や関係機関に賜与された。昭和の『大礼録』二二引継ノ部によると、昭和4年(1929)5月30日に、内閣・恩賜

京都博物館・遊就館・徴古館に対して宮内省大臣官房用度課からの送付が確認される。この中には当時宮内省の管轄下にあった学習院への装束類の保管転換についての記述はみられないが、同月20日付で学習院に今日に伝わる装束類が保管転換され、翌年2月に『原簿』登録されている。奉仕者に賜与された装束類は、戦中戦後の社会変動の中でその多くが今日に姿を留めていない中で、一具が揃って伝わる貴重な資料といえよう。

(田中潤)

## 伝心神陵古墳出土水鳥埴輪

1体

*Haniwa figure of waterfowl*古墳  
史料館No.285

嘴と尾の先端部を欠くが、ほぼ完全な水鳥形埴輪である。低い円筒台部の<sup>つば</sup>に乗る水鳥は丸く膨らみをもつ。丸い頭部前面に一对の円穴による眼があり、体部上半に一对の翼が付き、翼下から鰐上まで粘土紐による脚が附加されるが水かきは表現されていない。頭部・脚部を除く全面に刷毛目が施され、円筒台部内面には輪積痕跡が見られる。胎土には石英・黒雲母の小礫が混じる。焼成は著しく良好堅致で、表面は須恵質に近い灰白色を呈する<sup>あながま</sup>窖窯焼成品である。

この資料は、『原簿』には記載されておらず、収蔵の経緯・年代が不明ながら、昭和24年(1949)春に歴史地理標本室が解体されるまで「畿内某帝陵出土 水鳥埴輪」のラベルが付されており、宮内省から譲渡された資料であり、「某帝陵」とは河内の心神陵と伝承されていた。現在、東京国立博物館には明治45年(1912)に宮内省諸陵寮から移管された心神陵(誉田御廟山古墳)出土の類似した水鳥形埴輪が12~13体収蔵されており、同22年6月の心神陵内濠浚渫工事中に出土したことが知られている。本資料も、これらと同時の出土であろう。東京国立博物館所蔵の心神陵出土水鳥形埴輪には大小2種があるが、資料は小型に属し、大小とも5世紀初~前半の製作と推定される。(岡田)



## 子持ち台付壺形須恵器

1点

*Pot with high stand made in the 6th century AD, of the late Kofun era, Sue ware*古墳  
史料館No.A12

祭祀用の須恵器で、丸い壺の上部に3個の小形埴、一段透し孔が三方にある高台が付く。古墳時代後期6世紀の作である。昭和24年(1949)の歴史地理標本室解体時には完形であったが、現在は破損後に接合復元され、小形埴1個が失われている。『原簿』には記載されていないが、歴史地理標本室解体時まで「奈良県磯城郡柳本村出土」のラベルを伴っていたので、水鳥埴輪と同じく宮内省諸陵寮からの移管と考えられる。高台の内面に後に書かれた「奈良県柳本」の文字がある。(岡田)





# 砧中学校7号墳出土遺物

一括

Relics excavated from the 7th Tombs of Kinuta Junior High School, including iron swords, spears and arrowheads

古墳

史料館No.115・119・123・312

本資料は東京都世田谷区砧中学校古墳群（旧喜多見古墳群）7号墳の出土遺物で、①鉄刀2点、②鉄剣・鉄ヤリ6点、③鉄鏃11点がある。鉄刀は中央被葬主体を挟む位置から出土したと推測される。刀身部の半ばと鞘口付近には木質が多く遺存し、断面倒卵形の鞘を有する。鉄剣、鉄ヤリは別個体の柄部の木質が付着しているものもあり、複数重ねて納置されていたことが窺える。鉄鏃は銅鏃を模倣したいわゆる「柳葉形鉄鏃」である。

戦前、喜多見古墳群は宮内省御料地に編入されており、学習院中等科施設の建設が予定されたことから、帝室博物館内藤政光の指導のもと昭和17・18年（1942・43）に学習院史学会により発掘調査が実施された。これらの資料は南武蔵の古墳文化を語る上で重要な考古資料として高く評価されている。（橋本佐）



# 多賀城跡出土手描き重弧文軒平瓦片

1点

Roof tile for eaves of Tagajo Castle

奈良

史料館No.150

多賀城跡は宮城県多賀城市市川にある古代城柵跡で、陸奥国府が置かれ、奈良時代には鎮守府も併置された。養老・神亀年間（717～729）に創建され、天平宝字6年（762）前後に改修、宝亀11年（780）の反乱、貞観11年（869）の地震で被災したが、その都度復興された。軒平瓦は建物屋根の軒先を飾る瓦で、2本の手書き沈線で瓦当を飾り、顎下に鋸歯状の沈線がある。多賀城創建期の瓦である。（岡田）



## 不破関跡出土平瓦片

1点

Roof tile of Fuanoseki Barrier

奈良  
史料館No.35 | ラベルNo.35

上面に布目圧痕、下面に縦方向の縄叩き痕のある一枚造り平瓦の破片で側面と下端の一部を残す。添付の明倫中学校付属博物館ラベルに「古瓦片一枚 明治四十五年二月十五日侯爵家ヨリ下附 美濃国不破ノ関ノ古瓦破片ナリ 本館備品」と記され、収納の木製小箱蓋に「不破関古瓦一個」、蓋裏に「明治四十五年十月十五日奥方様美濃関ヶ原故蹟御実視之砌同所附近ナル三輪善四郎方ニ御休憩在ラセラル其折同人ヨリ之ヲ献ス(云々)」が墨書されている。不破関は、古代東山遣の関所のひとつである。(岡田)



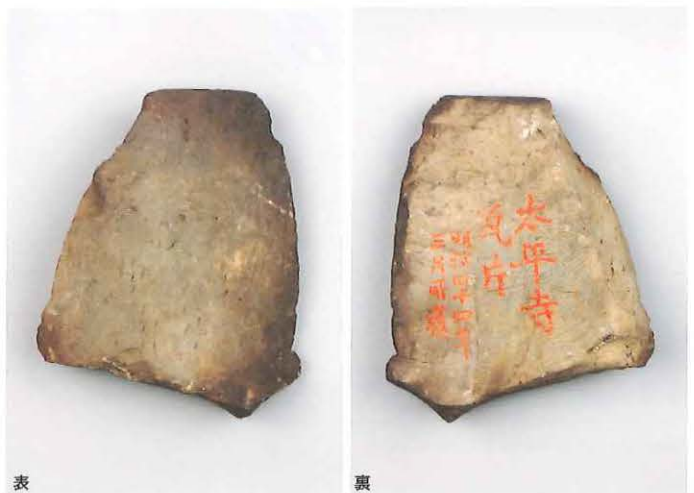
## 智識寺跡出土丸瓦片

1点

Roof tile of Chishikiji Temple

奈良  
史料館No.47

智識寺は河内国大県郡(現大阪府柏原市)にあり、奈良時代に民間の仏教信仰者によって建立された薬師寺式伽藍配置の寺院で、天平12年(740)立寄った聖武天皇が安置された丈六の盧舎那仏を拝して大仏造立を發願したといわれる。平安時代以降次第に衰微し、現在は廃寺。資料は行基葺きの丸瓦片で、内面に「太平寺瓦片 明治四十四年三月所獲」と朱書される。(岡田)



## 八王子付近出土平瓦片

1点

Roof tile of the Nara period, excavated near Hachioji

奈良  
史料館No.58

下端と左側面の一部を残す平瓦片で、上(凹)面には全面に布押圧痕(布目)、下(凸)面には一部磨り消された斜格子叩き文が認められる。下面に「八王子附近 □□□」の墨書がある。東京都八王子市から多摩市のいわゆる南多摩丘陵には多数の古代窯跡群が点在し、武蔵国分寺等に製品を供給していたことが知られるが、同時に竈に瓦を使用した竈穴住居跡があるので、資料が窯跡出土品とは断定出来ない。(岡田)





# 宝塔形泥塔

4点

Clay stupas

平安

史料館No.117

泥塔は、『仏説造塔延命功德經』『無垢浄光大陀羅尼經』に依拠した密教の修法の「泥塔供養作法」により清浄な粘土をこねて型に入れてつくられた小塔で、末法思想が普及した平安時代後期から鎌倉時代に多数製作、供養された。これらの資料は『原簿』に記載されず出土地不明ながら、同一遺跡出土と推定される。いずれも平安時代後期の作で、①は雲母細片混じりの粘土を表裏ふたつの型にいて成型し、円形の台・塔身・傘・相輪からなる宝塔形を呈する。底面の中央に小穴がある。②・④も①と同様だが、③は小形で底面の小穴が無い。(岡田)



# 法華經第六卷瓦経片

1点

Ceramic plate with written sutra

平安

史料館No.4

瓦経は粘土板に經典を簞等で陰刻書写し焼成したもので、末法思想が流布した11世紀後半から12世紀後半にかけて日本で製作された。資料は良質な粘土製の瓦経断片で、表裏両面に界線と縦罫線で割付けられた経文が24行にわたり簞書されている。経文は「妙法蓮華經第六卷 分別功德品第十七」の一部である。資料の側面下部に「三重縣経峯出土」と墨書されるが、三重県内には類似した瓦経を出す「経峯」は無く、類似した瓦経が出土する遺跡は三重県伊勢市内の小野塚経塚と菩提山経塚に限られる。特に小野塚経塚出土の承安4年(1174)5月29日伊勢神宮外宮禰宜の度会氏一族を檀越として製作された妙法蓮華經第六卷末尾奥書の瓦経片に、資料と同質で近似した筆跡をもつものがあり、資料は同時につくられた瓦経と推定出来る。『原簿』では確認出来ないが、明倫中学校付属博物館からの移管資料と推定される。(岡田)



## 東福寺銘軒丸瓦片

5点

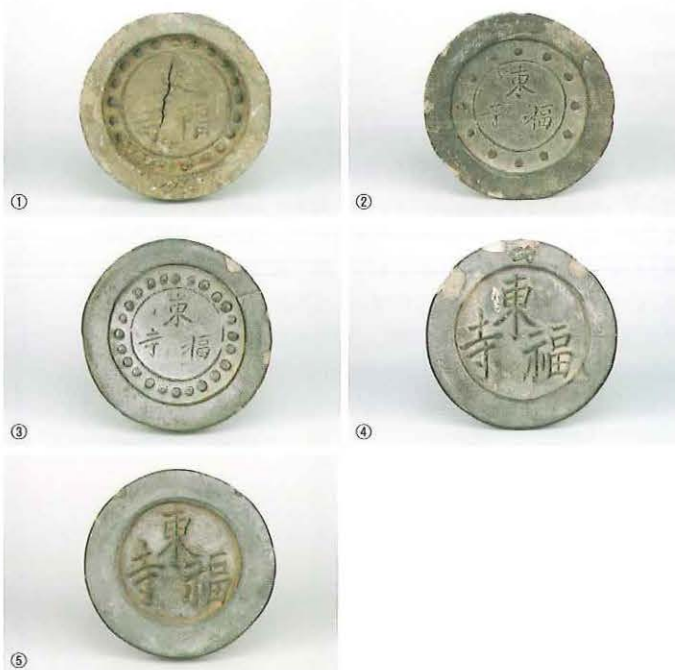
Roof tiles for eaves of Tōfukuji Temple

①室町 ②～⑤江戸

史料館 No. ① 64, ② 67, ③ 66, ④ 3, ⑤ 55

歴史 162 | 東福寺及仁和寺瓦 | 昭和 11 年 (1936) 10 月 10 日 | 明倫館中学博物館／移管

東福寺は、京都市東山区本町にある臨済宗の禅寺、鎌倉時代初期の公卿九条道家の発願で東大・興福両寺の一字をとり名付けられた。建設の途中で禅宗を取入れ、聖一国師円爾を開山とした。全堂宇の完成は文永10年(1273)で発願以来35年を要した。東福寺の堂宇は仏殿・法堂・方丈等の禅院伽藍、五重塔・灌頂堂等教学の堂塔、最勝金剛院(阿弥陀堂)等があり、禅・天台・真言三宗兼修の道場であった。鎌倉時代末の元応元年(1319)の大火で伽藍主要部が焼失、再建工事は応永年間(1394～1427)まで遅れた。室町時代の五山官寺制度下で京都五山に列し、豊臣氏・徳川氏にも庇護された。①は瓦当面が完存するが丸瓦部を欠き、瓦当内区珠文帯内に「東福寺」の3文字を配する。裏面貼紙に「東福寺聖一國師開祖 建築ニ係ル嘉禎年間ノ物 古瓦」と墨書されるが応永年間再建時の瓦である。②・③は珠文帯内に寺名を配する軒丸瓦の瓦当部破片で、丸瓦部を欠く。范は異なるがともに慶長年間の作。④・⑤も瓦当のみの資料であり、内区に「東福寺」の大きな文字を配する。「福」字は「福」で①～③の「福」と異なる。ともに享保年間の修理瓦。(岡田)



## 京都方広寺出土軒丸瓦片

3点

Roof tiles for eaves of Hōkōji Temple

①②桃山 ③江戸

史料館 No. ① 59, ② 40, ③ 25

方広寺は、京都市東山区大和太路正面茶屋町にある天台宗の寺。天正14年(1586)豊臣秀吉が建立、大仏を安置した。慶長元年(1596)の大地震で倒壊、同17年秀頼が再建したが梵鐘銘文を巡り徳川幕府と不和を生じた。寛文2年(1662)の震災で破壊、寛政10年(1798)に木造大仏も雷火で焼失し、天保年中(1830年代)に再建された。①は瓦当の内区に肉厚の五三桐文(豊臣氏家紋)を入れた軒丸瓦で、瓦当左半部の破片で丸瓦部を欠く。裏面に「京都大仏」の朱書と「正覚庵僧曾我五鼎の識」の墨書があり、添付された標本札に「古瓦 豊公ノ建築ニ係ル物 寄贈者曾我徳丸」と書かれている。天正年間の製作。曾我徳丸は岐阜県出身の陶画工である。曾我から明倫中学校付属博物館を経て、学習院に移管されたと推定される。②は瓦当面のみの瓦で同じく五三桐文が内区にあるが線描。秀頼再建時と思われる。③は丸瓦部を削り落とした瓦当のみの瓦で、内区の珠文帯の中央に左巻三巴文を入れる。江戸時代の再建瓦である。(岡田)





## 名古屋七ツ寺所用鬼瓦片

1点

Ridge-end tile of Nagoya Nanatsudera Temple

江戸

史料館 No.63

七ツ寺は愛知県名古屋市中区大須にある真言宗智山派の長福寺の別称。はじめ尾張国中島郡七ツ寺村に所在と伝えられるが、慶長16年(1611)現在地に移転、享保15年(1730)尾張藩主の祈願所、一国の触頭となった。焼し焼成された暗灰色の鬼瓦の側面部破片で鬼面は遺存しない。外面に「元禄三〇」(元禄3年、1690)と大きく筆書される。また、裏面に「名古屋七ツ寺」と朱書される。明倫中学校付属博物館よりの移管資料とみられる。

(岡田)



## 仁和寺銘軒丸瓦片

1点

Roof tile for eaves of Ninnaji Temple

江戸

史料館 No.29

歴史162 | 東福寺及仁和寺瓦 | 昭和11年(1936)10月10日 | 明倫館中学校博物館/移管

仁和寺は、京都市右京区御室大内にある真言宗の寺院で、光孝天皇御願で造営、仁和4年(888)金堂竣功で年号により仁和寺と名付けられた。宇多上皇は当寺で出家し、法皇の御室(僧房)がつくられた。以降、江戸時代末まで代々皇族の御室がつくられ、平安時代から鎌倉時代にかけて寺内の子院や周辺に多数の寺院が造営されたが、応仁2年(1468)に堂塔全焼した。寛永年間(1624~44)皇居の紫宸殿・清涼殿が金堂・御影堂として移建されると、五重塔等の堂塔・子院が再興された。資料の瓦当は完存するが丸瓦部はわずかに遺存するに過ぎない。瓦当の内区に「仁和寺」の3文字を配する。裏面に「京都 御室 御所」と墨書された和紙が貼付される。寛永年間以降の再興で使用された瓦である。

(岡田)



## 東大寺大仏殿銘軒平瓦・軒丸瓦片

2点

Roof tiles for eaves of Tōdaiji Temple

江戸

史料館No.①20, ②54・6

東大寺は奈良市雑司町にある華嚴宗総本山。聖武天皇の金銅盧舎那仏造立の発願により建立された寺院。天平勝宝4年(752)大仏開眼供養が行なわれた。大仏殿は治承4年(1180)平重衡の兵火で炎上、重源の勸進で建久6年(1195)再建。永禄10年(1567)三好・松永の兵火で再び焼亡、公慶の勸進で宝永6年(1709)規模を縮めて再建された。①は軒平瓦左半の破片で瓦当内区の7個の円内に「東大寺(梵字)大佛殿」を配する。②は軒丸瓦破片で、瓦当内区珠文帯内に①と同じ文字を配する。ともに江戸時代の再建瓦である。①に「曾我徳丸」の墨書があり、曾我から明倫中学校付属博物館を経て学習院に移管されたと推定される。(岡田)



## 唐招提律寺銘軒平瓦片

1点

Roof tile for eaves of Tōshodaiji Temple

江戸

史料館No.7

唐招提寺は奈良市五条町にある律宗総本山。鑑真和上が天平宝字3年(759)寺院を建立、唐招提寺と名付けた。平安時代に荒廃したが、鎌倉時代に復興が図られ、江戸時代にも徳川綱吉の母桂昌院らの庇護を受けた。瓦当の内区に「唐招提律寺」の5文字を配した江戸時代の軒平瓦である。(岡田)



## 長崎税関銘軒棧瓦

1枚

Roof tile for eaves of Nagasaki Custom-House

明治

史料館No.89

歴史155 | 明治六年菊御紋付長崎税関屋根瓦 | 昭和10年(1935)11月15日  
| 長崎税務署/寄贈

長崎税関は長崎市にあり、長崎運上所の後身で、関税・噸税徴収、輸出入貨物・船舶等の取締り、保税倉庫の管理等を行なう機関。資料はほぼ完全な軒棧瓦で、丸瓦の軒先に十六弁菊花紋、平瓦の軒先に「長崎税関」の4文字が陽刻されている。(岡田)





## 工部大学校所用ジェラルール洋瓦

1枚

French-style roof tile of the Imperial College of Engineering,  
made by Gerard

明治

史料館No.76 | ラベルNo.129

歴史129 | 旧工部大学瓦 二枚 | 昭和7年(1932)11月2日 | 若王子文健/  
寄贈

男爵若王子文健から受贈した資料で、「A GERARD YOKOHAMA」銘文乾拓と「震災記念品 旧工部大学屋根瓦」と墨書の和紙が添付される。工部大学校は明治時代初期に工部省が設置した工業技術の高等教育機関で、東京市麹町区三年町(現千代田区霞ヶ関)の虎ノ門にフランス人建築家ポアンヴィル設計の大学校本館・左翼館により明治11年(1878)開校した。同18年工部省廃止によって文部省直轄、帝国大学(現東京大学)の工科大学となり、同校の同21年本郷へ移転によって学習院の校舎となった。3年後に学習院が四谷に移転すると宮内省の諸機関が置かれたが、大正12年(1923)の関東大震災で被災し、取り壊された。資料は、工部大学校本館の屋根に葺かれたフランス式洋瓦で、右端に隣接瓦に重なる丸瓦状の隆起のある扁平な瓦。下面に「A GERARD YOKOHAMA」の文字が上下二段に陰刻された銘文があり、ジェラルール瓦と呼ばれる。ジェラルールは、明治時代初期に横浜で洋瓦製造を行なったアルフレッド・ジェラルール(1837~1915)の名で、彼の工場で作られた洋瓦である。

(岡田)



## 189

## 工部大学校所用植松銘洋瓦

1枚

French-style roof tile of the Imperial College of Engineering,  
made by Naomasa UEMATSU, imitating Gerard's tile

明治

史料館No.22-3 | ラベルNo.129

歴史129 | 旧工部大学瓦 二枚 | 昭和7年(1932)11月2日 | 若王子文健/  
寄贈

工部大学校所用ジェラルール洋瓦を模してつくられた日本人作の洋瓦で、収蔵時には縦に二分されていたが現在では接合されている。工部大学校所用ジェラルール洋瓦とほぼ同じ大きさだが若干重い。裏面に「植松直正製」の文字が陰刻される。明らかにジェラルール瓦の模倣品であり、屋根修理の際に導入されたものか。(岡田)



## 古鏡模型標本

1組

Set of 10 model mirrors including old Chinese, Korean and Japanese styles

大正

史料館 No.91

歴史44 | 古鏡模型 10個 | 大正13年(1924)9月3日 | 島津製作所/購入(35円)

10点一式で、第1～4号は中国鏡、第5号は高麗鏡、第6～10号は和鏡の古鏡模造品。2点は欠失。金属製彩色仕上げで、島津製作所のカタログ『地理及歴史用標本日録』(1930年発行)にも掲載される。専用の二段の木箱に入れられ、木箱上蓋にはラベルが貼られていたが、紙が劣化し毀損している。但し、残った部分に「鏡」の最終画らしい残画があり、「古鏡模型」と書かれていたかと推測される。木箱内で模型各点が収められた箇所にもラベルが貼られている。①第1号には「神人龍虎鏡/漢式時代前期」のラベルがあり、カタログには「遼到ナル模様ハ所謂漢魏式ヲ發揮セリ」とある。②第2号は「四神四獣鏡/漢式時代後期」のラベルがあるが、現品は失われている。カタログには「流暢ナル手法ハ六朝式ノ特色ヲ示セリ」とある。③第3号は「八花双鸞鏡/唐式時代」のラベルがあるが、現品は失われている。カタログには「斯学研究上趣味ヲ有セル巧妙ナル模様ハ燦爛シテ唐

時代文化ノ特徴ヲ見ルベシ」とある。④第4号は「八花湖州鏡/宋朝時代」のラベルで、現品裏面左寄りに「湖州真石家/念二奴聞子」の銘がある。カタログには「製産品旺盛タリシ時代ノ作品」とある。⑤第5号は「朝鮮鏡/高麗時代」のラベルがあり、カタログには「旧時代ノ作品中優等ナルモノ」とある。⑥第6号は「菟葉茅花蝶鳥鏡/和式時代藤原期」のラベルがあり、カタログには「温雅ニシテ優美ナル時代精神ヲ窺フベシ」とある。⑦第7号は「菊花蝶鳥鏡/和式時代鎌倉期」のラベルがあり、カタログには「鏡背ノ模様漸ク複雑トナリシ事ヲ見ルベシ」とある。⑧第8号は「浮線綾紋双雀鏡/和式時代足利期」のラベルがあり、文様上部に双雀、その下に綾織の如く菊花が4つずつ描かれた五円を配する。カタログには「従来踏襲セル好尚ヲ離レ新生面ヲ拓キテ古式ノ復興セラレツ、アルヲ見ルベシ」とある。⑨第9号は「蓬萊山柄鏡/和式時代徳川期」のラベルがあり、10点中唯一の柄鏡で、文様は中央に亀、上部に双鶴、下部に松を配する。カタログでは第10号の扱いとなっていて「手法凝滞見ルニ足ラズト雖モ柄鏡ノ標本トスベシ」とある。⑩第10号は「蓬萊山鏡/和式時代徳川期」のラベルあり。文様は、中央の亀と左側の双鶴が三者とも口を合わせ、下部に子鶴3羽、上部には松に囲まれて五三の桐が配される。文様内右下に「天下一」の銘あり。カタログでは第9号の扱いで「手法ノ繁雑ナル当時代ノ特色ヲ徴スベシ」とある。

(鐘江)





## 古代土器複製標本

12点

Replicas of Japanese prehistoric potteries

昭和

史料館No. ①101, ②277, ③100, ④110, ⑤109, ⑥113, ⑦112, ⑧111, ⑨278, ⑩69, ⑪143, ⑫71

本標本は昭和25年(1950)頃、ドルメン教材研究所が製作・販売したもので、当時中等科長であった児玉幸多によって購入された。第一集(写真上段)は「彌生式土器標本」で、弥生時代の阿方式(前期)壺・甕形土器、新澤式(後期)壺・甕・高坏形土器、登呂式(後期)壺・台付甕形土器で構成される。史料館には阿方式甕形土器を除く6点が収蔵されている。各型式は明治大学の杉原莊介が設定した編年に基いており、標本の選定や製作には杉原莊介が深く関与していたと思われる。器面調整(ハケメ、ナデ)、櫛歯状工具による直線及び波状文、凹線文等、原型は土器の観察結果から想定される製作方法により復元されている。

第二集(写真下段)は「後期・晩期縄文式土器標本」で、縄文時代の堀之内Ⅱ式(後期)浅鉢形土器、加曾利BⅠ式(後期)注口土器、加曾利BⅡ式(後期)深鉢形土器、安行Ⅰ式(後期)深鉢形土器、大洞BC式(晩期)皿形・注口土器の6点である。型式毎に縄文原体を変えていることや、磨削縄文の手法を忠実に再現している点から、東京大学の山内清男による指導・助言があったと考えられる。標本は一部を除き原寸大である。

原型は益子焼の陶芸家、濱田庄司が担当しており、土器の実測図を基準に外形をつくり、土器片を参考にしながら器面調整や施文を行なっている。完成した原型は石膏で型取りされた後、押型により複製された。これら複製を担当していたのは陶芸家、島岡達三である。粘土は益子の土で試作したものを用い、標本専用の窯を特別につくる等、実物資料への徹底した模倣の姿勢が窺える。なお標本の悪用を防ぐため、焼成前の底面に「D」印が押された(→コラム8)。

各集には芹澤長介による指導者用の解説書が付されていた。また第二集以降、埴輪、縄文時代中期及び早期・前期、土偶、土師器、須恵器の標本が販売される計画であったが、実現には至っていない。

戦後、学校教育において実資(史)料に基く歴史が要求されたことを背景に、考古資料模型をはじめ、「考古掛圖」「貝塚貝類獣骨類実物標本」等多様な教材が開発された。また「古代土器複製標本」と同時期には、縄文土器の文様が再現出来る「縄文式土器施文具セット」が東京教習具製作所から販売されている。

こうした専門性の高い教材は、考古学者が学問と社会の接点を教育現場に見出し、研究成果を積極的に還元しようとした結果である。と同時に、実物資料や実物に酷似した模型標本の製作は、考古学が周知されたことで生じた、遺跡の乱掘という弊害に対する研究者の保護策でもあったのである。(平田)



## 考古資料標本(土・陶製遺物)

3点

Models of Japanese archaeological relics (clay and ceramic relics)

昭和

史料館No.①99, ②90, ③8・9

③歴史93 | ③陶棺模型(約五分一大) | ③昭和4年(1929)7月12日 | ③上野製作所/購入(15円)

No.191「古代土器複製標本」を除く土・陶製遺物標本のうち、史料館に現存するのは3点である。

宮崎県岩戸出土弥生土器(写真②)は明治35年(1902)、大野雲外が弥生土器の標式資料として図示したひとつで、東九州の弥生時代中期を代表する土器である。器面調整(ハケメ、ナデ)は表現されず、また本来13条ある突帯は11条しかなく、底部穿孔も再現されていない。

茨城県不二内古墳出土埴輪女子(写真①)は、明治22年に

発見されたもので、発掘当初から腕部と胴部以下が欠損している。標本は約1/2大であるが、胴部に比して頭部が小さく、横幅が広い印象を受ける。島田髻の飾り紐も板状に省略されている。

これらは明治時代以来、考古学界で知られていた遺物の標本であるが、製作水準から鑑みて、大量生産(弥生土器)や、古都旧跡等で土産物として販売(埴輪女子)されていた可能性がある。

一方で、京都帝國大學考古學教室の初代教授、濱田耕作が主導し、上野製作所が製作・販売した「考古學關係資料模型」のひとつが、岡山県平福遺跡出土陶棺(写真③)である。明治29年山林開墾中に発見され、帝室博物館に献納された本資料は、側面に「異様な形像」を有する陶棺として当時から注目されていた。模型は石膏製で、内面は打放しとなっているが、分割された形状や突帯の本数をはじめ、棺蓋の接合部に至るまで精巧に再現されている。昭和4年、「銅鐸」「ピラミッド」及び「ドルメン古墳」模型とともに上野製作所から購入したものである。(平田)





## ドルメン教材研究所

「古代土器複製標本」は戦後、学校教育において考古学が必要であると考えていた藤森栄一が、白崎俊次や当時教材販売を行っていた有賀貞章と相談し、土器模型の製作を発売したことに端を発する。藤森栄一は白崎俊次に、旧友で明治大学考古学研究室の杉原莊介を紹介し、事業内容を説明するとともに製作協力を打診する。後藤守一、杉原莊介の監修、芹澤長介が実務と解説書を手掛ける等、明治大学考古学研究室が全面的に支援したのはこうした理由があった。

その後、村岡景夫(女子美術大学)や合田好道(陶芸家)も加わり、標本の原型は村岡景夫の紹介で、濱田庄司が担当することとなった。濱田庄司は原型製作に際し、明治大学考古学研究室や東京大学人類学教室、武蔵野郷土館の所蔵資料を見学、山内清男、甲野勇、八幡一

郎、吉田格、江坂輝彌ら考古学者の助言を受けている。

原型製作と並行して藤森栄一が行なったのは、販売等の事務を行なうドルメン教材研究所の設立である。研究所は日本教育会館内(千代田区神田一ツ橋)、業務部は片倉ビル(中央区京橋)に昭和24年(1949)頃開設し、白崎俊次が企画と製作、有賀貞章が資金と運営を担当していた。パンフレットには「古代土器複製品製作販賣 地方別郷土考古学讀本發行遺跡發掘後援 遺物交換アツセン 考古學關係圖書出版 遺跡見學旅行臨地講習」と業務内容が明記されているが、実際の事業は「古代土器複製標本」の製作・販売のみであった。

標本の製作には濱田庄司のほか、島岡達三(陶芸家、土揉みと型抜きを担当)、島岡米吉(組紐師、縄文原体の製作と焼



成)らが携わり、銘印(写真、原寸大)は芹澤長介の父、芹澤銑介がデザインする等、益子焼の陶芸家や民藝運動に関わった人たちの手を経て完成した。なお、「古代土器複製標本」の副産物として、島岡達三による縄文施文と三島手を融合させた「縄文象嵌」の手法や、濱田庄司による磨消縄文を用いた「縄紋茶盃」や「飴釉縄紋茶盃」等の作品が生まれた。

第一集が2,500円、第二集は3,200円と非常に高額であったことから販売数も伸び悩み、ドルメン教材研究所は昭和26年(1951)頃には解散となった。「古代土器複製標本」はわずか2年ほどの販売であったため、現存するのは管見の限り史料館を含め2例に過ぎない。しかしながら、これら標本は、戦後の考古学者や益子焼の陶工らの気概を今日に伝える資料として高く評価されよう。(平田)

## 島津製作所標本部

本図録は島津製作所から購入した教材資料を多数掲載している。現在島津製作所は、精密機器や医療機器等の理化学系の器材製作会社として著名だが、かつて歴史地理系の教材資料を製作・販売していたことはあまり知られていないだろう。

島津製作所は明治8年(1875)、初代島津源蔵が京都で理化学機械の製造業を始めたことに端を発する。開業地が京都舎密局に程近かったこともあり、様々な実験器具や学校教育用器具を開発し

た。同28年、製作所内に「標本部」が新たに設けられた。ここはこれまでとは全く別の分野である動物の剥製や人体骨格等の教材を製作する部署である。標本部の設置は、かねてより人体の生理的構造や動植物の生態について、単に黒板と講義だけでなく視覚や触覚によって学ばせる必要性を説いていた、初代源蔵の念願したものであった。標本部のカタログをみると、「初等教育博物学用標本」や「鉱物岩石及び地質学用標本器具」、「地理及歴

史学用標本」等、多岐にわたって製造・販売していることがわかる。

近年、大学等が所蔵する戦前期の教材資料の調査・研究が進むとともに、島津製作所の標本の存在が確認されつつある。学校の分野や教育方針に関わらず、多くの学生が島津製作所の教材標本を手にとったことが想像される。

(橋本佐)

## 石鹼製造順序標本

1組

Specimen of 16 materials for soap-boiling including six samples in process of boiling

大正

史料館No.51 | ラベルNo.1223

地理131 | 石鹼製造標本 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(12円)

石鹼の原材料16種類、製造過程のサンプル6工程分、石鹼9種類がひとつの箱に収められている。原料の油やグリセリン、香料等の液体や粉末は、島津製作所の社章の入ったガラス瓶に入れている。各々には番号札が貼られており、本資料箱蓋裏に貼付された番号順の説明と一致する。さらに、説明書が1冊付属しており、石鹼の種類や製造法に関する詳細が記されている。本資料は、大正13年(1924)に地理教材として購入されたが、島津製作所のカタログ『初等教育 博物学標本目録』(1933年発行)のうち「一般工業に関する標本」の項目の中にも「石鹼製造過程標本」が含まれており、長く教材として販売されていたことが窺える。

(鎌田)



## 鉛筆製造順序標本

1組

Specimen of materials and samples showing manufacturing process of pencils

大正

史料館No.49 | ラベルNo.1232

地理140 | 鉛筆製造順序 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(5円)

島津製作所が販売していた標本類のうち、「新案カード式庶物標本」のひとつである。30×45cmほどの台紙に、鉛筆の芯になるセダー材から1本の鉛筆が出来上がるまでの一連の製造過程が実物のサンプルを伴って説明されている。本資料が販売されていた当時の箱もともに残っており、その蓋裏にはこの標本シリーズの広告が貼られている。それによると、本シリーズは全部で40種類あり、鉛筆以外にゴムや硝子、磁器、紙等、様々な日本の産品品からなる。また、台紙には紐が通されていて「教室や廊下に掛けて常に児童に観察せしむるに便である」と記されており、教材としての目的と使用方法が明らかとなる。鉛筆は児童にとっては身近な存在でありながら、第一次世界大戦後に日本からの輸出量が大幅に増加した物品で、我国を支える産業のひとつとして教材に選ばれたと考えられる。

(鎌田)





## 陶磁器製造順序標本

1組

Sample models showing process of ceramic production

大正

史料館No.103 | ラベルNo.1246

地理148 | 陶磁器製造順序標本 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(25円)

陶磁器の製作過程、及び道具類等をミニチュアにて製作した模型である。内容としては轆轤や磁器焼成に必要な鞘型等から、素焼き-絵付け後の過程を実際の陶磁器にて製作したものや釉薬の原材料、そして縮小版の窯といった陶磁器製作における一連の製作過程を概観出来る構成になっている。島津製作所のカタログによれば、窯に関しては「京都市五条坂」にある登窯の中で最も模範的なものを採ったとのこと、当時京都における窯業の様子を知る上で興味深い標本である。(平)



## 七宝製造順序標本

1組

Examples of the process of cloisonné manufacturing

大正

史料館No.207 | ラベルNo.1128

地理44 | 七寶製造順序標本 | 大正12年(1923)12月5日 | 高松宮/御下賜

6口の小壺をもって、有線七宝の工程を示した資料。高松宮から関東大震災直後に下賜された。

下絵付から界線の植え付け、釉薬の盛付、数次にわたる焼成と、有線七宝による装飾が完成するまでを、順を追って確認出来るようにつくられている。(小松)



## 緑展茶標本

1点

Specimen of green tea leaves

明治～大正

史料館No.193 | ラベルNo.1234

地理142 | 磚茶 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(9円)

箱いっぱい焦げ茶色の茶葉が詰められ、ケースの表に貼られた島津製作所のラベルには「緑展茶」と書かれている。葉は大きく茎も残ったままである。

茶葉は多年生の常緑樹である茶樹の芽からつくられ、発酵度合いにより、緑茶、紅茶、青茶(烏龍茶)、白茶、黄茶、黒茶に分けられる。緑茶とは茶樹の新芽からつくられた非発酵茶で、茶葉と茶湯の色から緑茶と呼ばれている。中国茶のうち最も銘柄の多いのは緑茶である。

名称にある展茶とは、広げられた茶葉、或いは碾茶てんちやと同義とれば、挽臼を意味する「碾」によって粉碎される茶葉となる。すなわち、揉捻ろうてんの過程を経ない、様々な種類の茶葉に加工される可能性をもった茶葉である。

資料からは、強い後発酵茶である黒茶のプーアル茶のような匂いがするが、年月を経て緑色の茶葉が発酵して茶色になったのだろう。(福永)



## 紅展茶標本

1点

Specimen of tea made for export to Russia

20世紀

史料館No.199 | ラベルNo.1234

地理142 | 磚茶 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(9円)

『原簿』には「磚茶」と記されている。「磚」は中国語で煉瓦を指す漢字であり、茶葉が煉瓦状に固められていることに由来する呼称であろうと推測される。本資料にはキリル文字で“ХАНЬ КОУ КИТАЬ” (漢口・中国)と記載されており、ロシア向けの輸出製品の標本であると考えられる。また、「裕泰公司」の型押がある。裕泰公司は1887年に北京で創業した製茶会社である。当時、湖北省漢口(現在の武漢市の一部)は中国茶の一大集散地として知られていた。詳細は不明ながら、裕泰公司は漢口を拠点のひとつとして活動していたのであろう。箱には「紅展茶」と書かれた島津製作所のラベルが貼られている。(長谷川)





## 樺太産板紙標本

1組

Specimen of paperboards made in Sakhalin (Karafuto)

大正

史料館No.314 | ラベルNo.1266

地理157 | 板紙 | 大正13年(1924)10月20日 | 王子製紙会社大泊工場／寄贈

板紙とは厚紙を指し、段ボール等の包装用に用いられる。製紙業は、明治以降の日本の重要な産業のひとつで、特に樺太の発展に大きく寄与しており、地理の好教材になったと考えられる。本資料の製造元である王子製紙の樺太・大泊工場は大正3年(1914)の創業。樺太には、エゾマツ、カラマツ、トドマツ等のパルプ原料に適した針葉樹林が存在しており、パルプの生産に適した土地として王子製紙が開発した。本資料のラベルには「原材料 蝦夷松」「原材料 樺松」のどちらかが記されている。『原簿』によると、王子製紙大泊工場からは板紙のほかに、重亜硫酸石灰液、石灰岩の小塊、蝦夷松の断片、樺松の断片等、パルプ製造の原材料も一緒に寄贈されている。(鎌田)



## 200

## 木材標本

1組

Specimens of 45 kinds of lumber common to Japan

明治~大正

史料館No.159

地理266 | 木材標本 | 大正14年(1925)12月21日 | 購入(17円)

日本全国に生息する樹木のうち45種類を、 $7.0 \times 3.5 \times 0.3\text{cm}$ の大きさの小板に切り揃えた標本。現在は、ひとつの箱に収められている。ヤマモジミやブナノキ、クリ、エゾマツ等がある。ひとつひとつの木材には、和名、英語の学名、属名が印で捺されており、こうした木材の標本が数多く作製されたことが窺える。鳥津製作所のカタログ『地理歴史学用標本及模型目録』(1930年発行)には、本資料と同じような、木材の断片を数十種類集めた標本がいくつか掲載されており、国産の有用木材の標本が地理の教材として普及していた様子がうかがえる。(鎌田)



## 宮崎製石鹼

1点

Soap made in Miyazaki

明治~大正  
史料館No.225

製造年代、製造会社ともに不明。「佐改 宮崎製」という文字と、三角形(山形)の線の下に「工」という文字が入っている。

近代日本における石鹼製造は、堤磯右衛門によるものが有名である。堤の石鹼事業は上海や香港といった海外輸出を展開する非常に規模の大きなものであった。徐々に、堤以外にも同業会社が誕生し、石鹼は明治中期には日本の輸出産業としても発展した。本資料も、明治~大正頃にかけて製造されたものであろう。

(長谷川)



## 蛭石

少量

Vermiculite

年代不詳  
史料館No.243

雲母や緑泥石、滑石に類似した鉱物で、六角形、層構造を成している。蛭石の名称は熱すると層の間に含まれた多量の水分が膨張して間隔を広げ、蛭のように延長することに由来する。アメリカのモンタナ州や南アフリカが最大の産地で、日本では福島県や山梨県で産出する。なお日本では一般的に黒雲母の風化したものを指すことが多い。断熱材や防音材として建築に用いられる。また、高温で焼成したものは多孔質で保水性が良いことから園芸用土(土壌改良用・栽培用)として使用される。

(長谷川)



## 地層構造模型

6点

Six models of geological formations

昭和  
史料館No.82 | ラベルNo.1251  
地理151 | 地層構造模型 | 大正13年(1924)9月3日 | [島津製作所] / 購入(23円)

直方体の木製空洞箱に、赤、黄、緑、白の絵具を着色、色分けによって地質学上特徴的な地層を示した模型。各模型には島津製作所標本部のラベルが貼付され、「地壘地溝」「餅盤」等、各地層の学術用語が記されている。本資料と同一の模型写真が、島津製作所のカタログ『初等教育 博物学標本日録』(1933年発行)に掲載されている。この目録によれば、全18種類の模型があり、そのうち6種類の特殊な地層に星印がふられており、学習院が購入した6模型はこれらに相当する。

(録川)





## 飛驒山脈地形模型

1点

Three-dimensional contour map of Hida Mountains (Northern Japanese Alps), made of plaster

明治～昭和

史料館 No.94

地理 283 | 石膏製五万分一 飛驒山脈 | 大正14年(1925)12月27日 | 購入(25円)

富山県・岐阜県・長野県・新潟県にまたがる山脈、いわゆる飛驒山脈(北アルプス)を中心とする地形を、等高線に従って起伏を付けた立体模型。海や河川、湖等は青、平野は緑、山岳は茶色と、段彩(グラデーション)が施されている。本資料は石膏製で木枠に嵌められており、型どりして大量生産されたとみられる。地名や山岳名、河川名、路線名等には、貼紙が用いられている。

こうした立体の地形模型が地理の授業で使用されている様子が明治末の双六に描かれており、また島津製作所のカタログ『地理歴史学用標本及模型目録』(1930年発行)にも類似する地形模型写真があり、戦前の地理教育において全国に普及していたことが知られる。

(鎌田)



## 日本海々戦記念塔模型

1点

Model of the Battle of Tsushima monument

昭和

史料館 No.169 | ラベル No.1494

歴史 103 | 日本海々戦記念塔模型 | 昭和5年(1930)6月20日 | 寄贈

朝鮮・鎮海に建設された日本海海戦記念塔の模型である。上部の避雷針部分は紛失している。

この記念塔は、昭和4年5月27日の日本海海戦25周年を記念し、日露戦争中に連合艦隊が根拠地としていた朝鮮・鎮海(兜山山頂)に建設された。

建設委員会総裁の池上四郎(朝鮮総督府政務総監)が同3年2月に外務省に送った書簡によれば、設立の趣意は「往年の戦勝を永遠に国民精神作興の一助」とする、というものであった。委員会には、東郷平八郎をはじめ当時の軍、政界のトップが名を連ねた。

同委員会は、「寄附金は成るべく国民全般より募集」という趣旨から、田中義一外務大臣(首相と兼任)に対し在外居留邦人にも寄付を呼び掛けるよう依頼した。外務省では吉田茂外務次官が担当となり、世界各地61ヶ所の在外公館に連絡した結果、居留民会や邦字新聞社等から多額の募金が集まった。塔は鉄筋コンクリート製、戦艦三笠の司令塔を模したデザインで、高さ約33m、総工費7万円。なお、現在は取り壊されて現存しない。本模型は関係者に配布されたものであろう。

(長谷川)



## 地球儀

1台

Globe used for teaching the earth's rotation and revolution

大正～昭和  
史料館No.305

戦前の地球儀。日本は「大日本帝國」と記されており、凡例には「委任統治」を示す線が明記されている。本地球儀には円形の台座があり、その上には円盤状に十二ヶ月と二十四節気、四季が区切られて記されている。地球儀の垂線下には指針棒が取り付けられており、この指針を動かすと地球儀が回転し、上記の区分に針を合わせることでその時期の太陽と地球の位置関係を把握出来る仕組みになっている。台座部には「神戸 地文館 東京教授用公転地球儀」と印刷されており、単なる地球儀ではなく地球の自転、公転と暦の関係を示す教材であったことがわかる。

(鎌田)



## 地球儀

1台

Globe used for teaching the earth's rotation and revolution

昭和  
史料館No.A13

本地球儀の底面近くに奥付があり、監修者や発行年、発行所、縮尺等の情報が明らかとなる。これによると、監修者は東京帝国大学教授の地理学者、辻村太郎(1890～1983)と東京文理科大学(現筑波大学)教授の地理学者、田中啓爾(1885～1975)で、昭和11年(1936)10月27日に東京地人社から発売された。地人社は戦前期に地図や地誌を発行していた出版社。

縮尺は1900万分の1である。本地球儀は、塗布された茶色から青色のグラデーションにより水深を示し、また無線電信局の印や航空路線、海流を記す等、現代の地球儀とは異なる要素も多い。さらに、地軸と黄道に木製のリングが取り付けられている。地軸には角度情報が示され、黄道には12星座名が記されており、このふたつのリングの組み合わせから黄道座標値がわかり、地球の公転を教示出来る特徴をもつ。

(鎌田)





ペスタロッチにより提唱された直観(実物)教授とは、具体的な実物や、ものごとの現象を生徒に直接示したり、触れさせることにより、理解や体験を得られるような指導を行なう授業方法である。日本にはアメリカ留学した東京師範学校校長高嶺秀夫によって伝えられ、「開発主義教授法」として教育界に普及した。各学校は実物や標本を取り揃え、授業に資していた。

学習院では、歴史地理標本室に先んじて博物学標本室が出来ており、数多くの標本類を収蔵していた。博物学標本室も関東大震災で焼失するが、帝室博物館天産部標本、明倫中学校付属博物館標本、樺太植物標本(久邇宮、高松宮下賜)等の寄贈を受け再構築された。現在も学習院高等科標本保管室には数千点にのぼる博物学標本が収蔵されている。

学習院初等科にも数多くの標本が保管されており、そのいくつかは平成24年度学習院大学史料館特別展「近代日本の学びの風景——学校文化の源流」展にて展示公開をした。

学習院大学理学部は長年、南1号館を教室・研究室として使用してきた。この建物は関東大震災で焼失した理科教室(博物学標本室を含む)に代わるものとして、昭和2年(1927)に建築されたもので

ある。平成23年(2011)理学部が南7号館へ移転する際に多くの理科実験器具が南1号館に遺された。特に建物に備え付けられていたドラフトチャンバー等は、科学史上特筆すべきものである。南1号館改修後もこれらの科学遺産は保存され、公開されることとなった。

今回、歴史地理標本室標本のうちモノ資料を図録掲載したが、当時最も活用されていたであろう「掛図」や「写真」「絵葉書」等の資料群については、調査途上である。その一部は学習院大学東洋文化研究所HP上で公開しているが、全容を明らかにするまでには至っていない。「近代アジアへの眼差しと教育——学習院コレクションの総合的活用」プロジェクトにおいて引き続き調査とデジタル化及び公開をすすめる。

明治末期から大正初期、各地の高等師範学校においては、直観教授に基づいて「歴史標本室」が相次いで設立されていることが、今回の調査において判明した。現在その標本群はどのようになっているのか。お茶の水女子大学、奈良女子大学、京都教育大学等と一部と連携の兆しが見えてきているが、今後の広がりが大いに期待される。また、この図録を御覧下さった方からのさらなる御教示をお願いする次第である。

(長佐古)

## 歴史地理課教員一覧

	明治21年(1888)	明治	大正	昭和
市村瓊次郎	21.12	41.12		昭和21年(1946)
白鳥庫吉	23.8		10.4	
大森金五郎		31.8	[5.11 ~ 7.11休職] 8.6	
瀬川秀雄		32.9		5.3
真崎誠		35.9	2.5	
堀竹雄		41.3	[7.6 ~ 休職] 9.6	
白石正邦		[41.4 ~ 女学部] 4.1	9.1	
池内宏			3.6 5.8	
大谷勝真			5.8 15.3	
牧野純一			5.11 7.9	
池田俊彦			6.5 5.4	
遠藤金英			7.4 8.3	
長寿吉			8.12 14.2	
今井鑄			9.7 10.12	
橋本捨次郎			9.9 [11.7 ~ 休職] 13.7	
板澤武雄			10.3 13.3	
石山乾二			14.8 [13.4 ~ 休職] 15.3	
白鳥清			15.4	21.3
出石誠彦			5.8 12.9	
清水二郎			5.12	21.10
村松繁樹			7.3	24.3
児玉幸多			13.4	55.3

\*本表は旧制学習院中・高等科歴史地理課教員の在職期間をグラフで示したものである。教師名は『学習院一覧』(学習院アーカイブズ所蔵)より挙げ、在職期間は教職員カード(学習院アーカイブズ所蔵)による。雇用の開始・退職の年月は棒グラフの始めと終わりに記した。休職期間及び学習院女学部在職期間は[ ]で示した。(戸矢浩子作成)

# 法量一覽

番号	名称	法量 (cm)
I アジアへの眼差し		
1	穀粒文玉璧	外径16.3 孔径4.3 厚0.3
2	玉璋	長(29.6) 最大幅6.0 厚0.2
3	方格規矩鏡	外径11.8 厚0.9
4	宜子孫銘方磚	縦32.5 横29.6 厚5.8
5	牛車型明器	(牛)奥行21.3 幅8.3 高11.5 (車)奥行34.5 幅21.2 高14.8
6	緑釉倉明器	胴径15.5 鐐径20.1 孔径4.6 高30.0
7	緑釉狗明器	奥行4.2 幅3.6 高2.3
8	北魏造像銘石片	縦23.3 横31.2 厚5.1
9	唐三彩馬俑	奥行33.9 幅13.6 高32.8
10	唐三彩鎮墓獸俑	奥行10.1 幅14.5 高29.2
11	唐武人俑	①奥行9.0 幅12.1 高41.6 ②奥行8.5 幅12.2 高35.8
12	唐男性俑	奥行5.3 幅5.2 高25.2
13	唐女性俑	奥行6.0 幅8.0 高28.2
14	唐女性俑	奥行5.0 幅6.8 高28.9
15	唐女性俑	奥行5.5 幅7.9 高33.6
16	唐女性俑	奥行5.5 幅8.7 高34.1
17	明十三陵所用黄釉竜文軒平瓦片	縦(13.2) 横(30.2) 厚(3.0)
18	清昭陵所用黄釉半竜文軒丸瓦	長39.1 径16.9
19	黄釉竜文磚片	縦12.2 横(15.6) 厚6.6
20	緑釉唐草文磚片	縦8.5 横(6.8) 厚3.0
21	黄釉丸瓦片	縦(6.4) 横(6.8) 厚1.4
22	施釉熨斗瓦	縦18.0 横22.5 厚1.7
23	鉄鉢石	389g 縦7.0 横6.6 厚3.4
24	焼結鉢	145.0g
25	還元焙焼鉢	118.0g 縦6.8 横5.0 厚3.2
26	撫順露天掘採集石炭	278.0g 縦8.6 横9.7 厚4.3
27	中国貨幣・齊法化鑄型片	①(台紙小)縦18.9 横36.6 (台紙大)縦28.9 横36.6 (銭貨小)外径1.1 (銭貨大)外径2.6 ②(箱)縦22.6 横16.5 高2.4 (刀銭小)長4.6 幅2.4 (刀銭大)長18.1 幅2.8 厚0.3 ③-1縦(9.7) 横13.7 厚3.8 ③-2縦(10.2) 横(8.7) 厚3.5
28	殷代環首刀模型	長18.0 幅1.9 厚0.4
29	対華二十一ヶ条文飾り扇子	縦33.3 横52.1
30	太王陵出土太王陵銘条磚	縦16.0 横30.6 厚2.4
31	新羅焼片耳付広口壺	口径9.4 最大径12.0 高10.6
32	珠文縁重弁十六葉蓮華文軒丸瓦片	長(13.3) 径14.0
33	弘慶寺跡出土瓦片	①縦(12.0) 横(10.9) 厚2.0 ②縦(10.9) 横(9.8) 厚2.0
34	朝鮮家屋模型	奥行58.1 幅49.2 高27.7
35	朝鮮農民風俗人形	(男)奥行8.3 幅5.2 高(15.6) (母子)奥行5.2 幅5.6 高(14.3)
36	朝鮮木靴ミニチュア	長9.6 幅3.1 高4.4
37	竹筏模型	(船体)長34.5 幅13.6 深7.9 (帆柱)高35.0 (帆)縦16.8 横14.3 (櫂)長7.7 幅1.6 厚0.4
38	台湾産蛇木	外径11.5 内径8.2 高21.0
39	台湾産苧麻	長30.0
40	台湾蘭草製下駄表	長28.5 幅15.0 厚0.1
41	台湾蘭嶼ヤミ族帽子	径29.2 高16.3
42	台湾蘭嶼ヤミ族土製人形	①奥行5.5 幅9.3 高13.1 ②奥行5.0 幅7.0 高11.3
43	千里眼・順風耳立像	①奥行4.4 幅5.4 高13.7 ②奥行4.5 幅4.8 高13.8
44	土製蓋付壺	口径12.5 底径14.0 胴径20.0 高11.4 (蓋)径10.5 高4.0



番号	名称	法量 (cm)
45	パラオ諸島アバイ模型	長150.7 幅78.0 高95.6
46	マーシャル諸島武器	①長199.0 径3.0 ②長197.8 径3.3 ③長239.2 径2.65 ④長200.5 径2.2 ⑤長162.0 径3.6
47	マーシャル諸島帆船模型	(帆船)長115.8 幅76.6 高131.2 (海図)縦37.5 横123.0
48	ミクロネシア狩猟・漁撈具	①長241.0 径1.7 ②長243.5 径1.6 ③長159.0 径3.0 ④~⑩長99.3 径0.9 ⑪長82.3 径1.4 ⑫~⑮長99.7 径0.9 ⑯⑰長80.0 径0.7 ⑱長131.0 径0.8 ⑲長121.5 径0.9 ⑳長47.5 径1.8 ㉑長90.5 径2.0 (箱)縦248.5 横16.9 高15.4
49	ヤップ島石貨	長径36.0 短径29.5 孔径4.0 厚5.5
50	ヤップ島首飾り	(箱)縦45.4 横28.0 高10.4
51	貝製品	①長9.2 幅3.0 厚1.7 ②長10.8 幅4.3 厚3.2 ③長55.0 貝径1.1
52	南洋特産物標本	(椰子の実)最大径20.2 (シュロ製うちわ)面縦29.4 面横30.0 持手長13.6 (ニツパ椰子)縦43.0 横29.5 (藤の葉)縦42.0 横30.0 (ゴムの木)枝長29.5 葉長16.3 (マングローブの枝葉)長43.0 (外箱)縦46.9 横32.4 高21.8 (内箱)縦45.3 横30.4 高4.4
53	ココヤシ葉製籠	①長径41.3 短径25.8 高15.2 ②長径41.5 短径29.5 高15.2 ③長径43.0 短径30.0 高15.5
54	パラオ諸島木皿	①口径23.3 高台径17.6 高3.8 ②長径35.5 短径19.9 高台長径18.5 高台短径12.8 高5.2
55	ボンベイ島腰蓑	丈48.0 胴回72.8 幅147.0
56	カンジキ	①長41.9 幅23.1 厚1.0 ②長45.9 幅21.8 厚3.4
57	鮭皮靴	①長24.0 幅12.0 高18.2 ②長42.3 幅20.5
58	わらし	長25.7 幅11.3 厚約2.0
59	織機	長73.0 (開口保持具)縦5.7 横4.2 高10.0 (綜紵)長37.5 (筵)縦41.0 横10.2 厚0.8
60	矢筒・矢	①長62.0 幅14.0 厚4.7 ②長(32.5) 径0.8
61	ペラ	長24.4 幅5.4
62	石造菩薩坐像	奥行4.8 幅13.0 高20.4
63	石造宝冠如来立像	奥行10.5 幅22.2 高27.8
64	盾	径26.0 高13.2
65	ハンジャル	全長29.0 柄長9.2 幅4.3 厚0.5 (鞘)長20.2 幅4.0 厚1.4
66	パークカヌー模型	(船体)長58.0 幅11.7 深12.5 (櫂小)長22.7 幅1.4 厚0.3 (櫂大)長25.0 幅1.9 厚0.3
67	花筵	長177.0 幅76.0

## II 日本を知る

68	束帯(奏任官用緋袍)	(縫腋)桁110.5 丈165.0 (下襲)桁78.5 丈95.0 (裾)幅77.0 丈104.7 (単)桁81.5 丈89.0 (表袴)幅88.5 丈96.5 (大口)幅83.0 丈97.5 (石帯 本帯・上手)幅5.0 長70.0 (笏)長39.0 (松扇)長30.1 (帖紙)縦13.0 横24.6
69	束帯(奏任官用縹袍)	(縫腋)桁110.5 丈165.0 (下襲)桁78.5 丈95.0 (裾)幅77.0 丈104.7 (単)桁81.5 丈89.0 (表袴)幅88.5 丈96.5 (大口)幅83.0 丈97.5 (石帯 本帯・上手)幅5.0 長70.0 (笏)長39.0 (松扇)長30.1 (帖紙)縦13.0 横24.6
70	衣冠単(奏任官用夏緋袍)	(袍)桁111.0 丈165.5 (単)桁82.5 丈92.5 (指貫)幅42.0 丈134.5 (笏)長39.5 (松扇)長30.3 (帖紙)縦10.7 横26.5
71	冠	(冠)長径19.0 短径17.0 高19.4 (纓)長49.0 幅10.7
72	挿頭	長23.3 幅11.0 厚5.3 (箱)縦27.5 横21.4 高11.1
73	鞆	長27.0 幅10.7 高17.0
74	竹製汗除肌着	着丈61.5 桁25.0
75	綿糸見本	(束小)長19.7 幅2.6 (束大)長21.3 幅4.4 (箱)縦29.4 横64.0 高4.4
76	織維見本	(小)縦(24.5) 横(27.6) (大)縦65.0 横46.7
77	織維見本	(小)縦30.3 横18.3 (大)縦79.8 横28.3
78	麦稈真田紐	①(束)長50.0 幅11.5 ②(束)長48.5 幅10.5 ③(束)長49.1 幅5.0
79	麦わら帽子	鍔径33.1 高9.6
80	麦稈製糸巻	縦5.7 横5.7 厚0.3
81	襖張用芭蕉布	縦46.0 横21.5
82	博多織袋物	縦17.0 横21.9 (箱)縦22.7 横19.8 高2.4
83	灰釉流走駒文浅鉢 相馬駒焼	口径16.1 高台径7.2 高4.9
84	色絵金彩絹に丸文蓋付徳利 九谷焼	(器)口径2.5 底径4.4 胴径7.5 高14.2 (蓋)径3.0 高2.6 (箱)縦8.0 横17.4 高16.2
85	色絵金彩鳳凰文蓋付碗 九谷焼	(器)口径6.9 底径3.6 高6.4 (蓋)径7.7 高2.0 (箱)縦9.4 横18.6 高10.9
86	達磨置物 九谷焼	奥行9.7 幅10.2 高27.5
87	蝦蟇仙人置物 九谷焼	奥行5.5 幅13.5 高22.5

番号	名称	法量 (cm)
88	色絵山水文扇形皿 初代徳田八十吉 九谷焼	口径28.1 高台径15.5 高5.1 (箱)縦23.0 横22.8 高9.4
89	染付竹文土瓶 美濃焼	(器)口径6.1 底径6.4 胴径12.3 高7.9 (蓋)径7.1 高3.2
90	銕絵染付松枝図鉢 品野焼	口径15.5 高台径6.8 高6.1
91	染付梅花渦文碗 瀬戸焼	口径15.3 高台径6.1 高7.4
92	染付雪月桜輪文水滴	縦9.7 横12.7 高6.7
93	色絵(釉下彩) 梅樹文土瓶 萬古焼	(器)口径5.8 底径5.5 胴径11.1 高7.0 (蓋)径5.2 高2.3
94	布袋置物 伏見人形	奥行8.0 幅15.0 高19.5
95	黒樂茶碗	口径10.5 高台径4.4 高7.5
96	赤樂茶碗	口径13.6 高台径4.7 高6.6
97	色絵(釉下彩) 秋草文四方小鉢 粟田焼	口径9.6 底径5.2 高7.6
98	色絵花卉草虫文手付水注 粟田焼	(器)口径7.9 高台径7.0 胴径17.5 高22.0 (蓋)径8.0 高5.7 (箱)縦21.7 横14.6 高23.4
99	青磁三足香炉 三田焼	口径7.1 底径3.5 高5.7
100	菊花流水文煎茶碗 出石焼	口径6.6 高台径3.9 高6.0
101	色絵(釉下彩) 秋海棠文蓋付碗 淡路焼	(器)口径6.9 高台径4.0 高7.4 (蓋)径7.0 高2.6
102	斑釉七宝透文菓子鉢 布志名焼	口径17.6 高台径9.4 高8.9 (箱)縦21.4 横21.7 高12.0
103	三島手唐文陶器土瓶 楽山焼	(器)口径7.0 底径6.3 胴径 高8.1 (蓋)径6.1 高2.3 弦長21.2
104	煎茶器セット 備前焼	①(器)口径5.0 底径5.2 胴径13.5 高6.6 (蓋)口径4.4 高1.6 ②口径9.4 底径4.4 高4.4 ③口径7.3 底径3.2 高4.7
105	糸目徳利 備前焼	口径3.1 底径5.1 胴径7.6 高12.9
106	梅花文酒器 備前焼	口径4.4 胴径7.9 高20.5
107	湯さまし 萩焼	口径12.7 高台径4.0 高4.8
108	白磁波濤文丸皿 砥部焼	口径16.0 底径6.0 高4.0
109	能物置物 博多人形	奥行5.6 幅10.8 高27.8
110	染付牡丹唐草文菱花皿 伊万里焼	口径24.7 高台径13.9 高4.0
111	染付楼閣山水文皿 平戸焼	口径15.7 高台径7.8 高2.6
112	桜松葉図小坏 八代焼	口径7.5 高台径3.5 高4.5
113	小坏 天草焼	口径7.4 高台径3.1 高4.25
114	二彩蓋物	(器)口径13.0 底径5.4 胴径14.0 高6.3 (蓋)口径12.1 高台径4.8 高3.2
115	色絵薔薇文双耳皿 東洋陶器株式会社製	口径22.8 高台径14.2 胴径24.4 高3.6
116	三彩宝船置物	(船体)長21.3 幅10.2 深8.8 (珊瑚)奥行2.7 幅20.6 高14.5 (箱)縦25.5 横22.4 高13.0
117	紗綾形唐草変塗硯箱	縦25.8 横20.6 高5.1
118	変塗簞箱	縦26.3 横3.4 高2.4
119	山水人物堆朱箱	縦15.3 横10.3 高3.4 (箱)縦18.0 横12.7 高4.6
120	透漆塗方盆	縦22.9 横23.3 高1.9
121	菊桐文漆絵椀	(器)口径12.5 高台径6.6 高5.2 (蓋)口径11.3 高台径4.2 高3.5
122	籬菊蒔絵椀	(器)口径12.4 高台径4.8 高5.4 (蓋)口径11.5 高台径4.0 高3.4
123	黒漆塗方盆	縦21.5 横21.5 高3.5
124	三保松原図漆絵長方盆	縦21.3 横33.1 高1.9
125	梅鸞蒔絵長方盆	縦26.8 横16.9 高2.0
126	山水屋舎素彫硯箱	縦24.1 横19.7 高4.2
127	黒漆塗杓子	長24.5 幅5.8 厚1.2
128	透漆塗袴	口径7.9 底径8.2 高3.8
129	朱漆塗箱	縦16.4 横11.3 高2.6
130	扇面蒔絵長方盆 象彦	縦22.9 横16.3 高1.7 (箱)縦26.6 横17.7 高2.2
131	箔地梅樹蒔絵箱	縦12.1 横9.4 高5.3 (箱)縦13.1 横10.3 高6.0
132	雪月花蒔絵煙草入	(煙草入)縦9.8 横12.1 高5.1 (盆)縦10.9 横18.9 高2.7
133	菊竹金銀絵方盆	縦23.3 横23.3 高2.7
134	花蝶漆絵箔絵長方盆	縦25.7 横34.8 高3.2
135	竹編流水沢瀉漆絵箔絵方盆	縦27.5 横26.8 高2.5
136	透漆塗煙草入	(煙草入)縦14.8 横11.3 高4.8 (盆)縦19.4 横15.1 高1.7
137	桜花堆錦箱	縦16.7 横11.8 高3.5
138	水仙鳥箔絵蒔絵菓子器	(器)口径17.2 高台径11.1 高5.4 (蓋)口径17.2 高台径2.2 高4.5



番号	名称	法量 (cm)
139	蘭螺鈿花入	長66.0 厚7.2
140	富士帆掛舟図蒔絵硯箱	縦18.9 横10.4 高3.4
141	中国故事螺鈿乱箱	縦23.0 横30.3 高5.1
142	狸形盆 埋木製	縦21.5 横25.6 高1.7
143	木彫彩色越後人形	(男)奥行8.0 幅6.8 高10.7 (荷)奥行5.4 幅7.6 高4.6 (台)縦7.3 横15.1 高1.0 (箱)縦20.5 横12.5 高6.2
144	木彫彩色高砂人形	(翁)奥行6.7 幅8.0 高12.5 (姥)奥行6.7 幅7.7 高12.2 (熊手)長9.7 最大幅2.0 厚0.2 (箱)縦9.3 横19.7 高15.3
145	木彫鷹置物	奥行5.4 幅12.9 高14.2
146	木彫登山人形	径5.4 高14.5
147	松樹鯉蒔絵花入 竹製	径16.5 高68.6
148	藤編手付籠	口径35.2 底径26.0 高10.2 弦長85.7
149	箸・楊枝・菓子切 珊瑚製	(箸小)長19.2 径0.6 (箸大)長23.8 径1.2 (楊枝)長6.2 径0.3 (菓子切)長10.5 径0.3 (箱)縦30.2 横34.7 高5.0
150	竹編瓢箪型花入	(籠)口径13.8 底径15.7 胴径26.0 高30.7 (落とし)径10.6 高27.1
151	風鎖 馬蹄石製	(玉)縦4.2 横3.3 厚2.5 (緒)丈11.9 (箱)縦22.3 横10.8 高5.1
152	カプリンクス 青瑪瑙製	縦2.8 横2.1 厚0.3 (箱)縦7.2 横10.0 高3.4
153	屋形船模型 鼈甲製	(船体)長18.7 幅5.0 深3.7 (屋形)奥行5.1 幅4.1 高2.5 (箱)縦19.8 横7.1 高6.7
154	櫛 鼈甲製	縦13.0 最大幅8.8 厚0.3 (箱)縦18.1 横11.8 高3.8
155	清鶴図鉄瓶 南部	(器)口径13.2 高台径8.2 胴径19.5 高26.8 (蓋)径13.5 高4.1 弦長38.0
156	菊図象嵌壺 銅製	(器)口径3.5 底径4.8 胴径7.6 高18.0 (箱)縦8.9 横9.0 高21.8
157	垂飾文象眼双耳壺型花入 銅製	口径11.5 底径9.2 胴径20.5 鐔径30.1 高26.3
158	花卉草花文茶入 錫製	(器)口径3.8 底径4.8 胴径7.8 高9.7 (蓋)径4.4 高2.1
159	刀 銘 信濃守藤原弘包	拵総長102.8 刃長74.5
160	刀 銘 長盛	拵総長103.6 刃長73.4
161	スナイドル銃	長103.0 銃身長54.6 口径1.4
162	スペンサー銃	長94.0 銃身長46.5 口径1.3
163	鳥追銃砲	長94.0 銃身長55.5 蓋径2.0
164	火縄銃	長83.3 銃身長66.0 口径0.7
165	西南戦争使用銃弾	(銃弾小)底径<1.5> 高<2.0> (銃弾大)底径2.2 高4.2 (葉莢小)底径<1.8> 高<0.8> (葉莢大)底径2.0 高5.5 (砲弾)縦<6.0> 横<5.0> 厚<1.5> (箱)縦10.2 横10.2 高4.3
166	紺紙金泥大般若経断簡	縦25.0 横57.0
167	紺紙銀泥華嚴経断簡(二月堂焼経)	縦23.2 横31.0
168	東山道鎮撫総督達(高札)	①縦31.2 横62.1 厚1.8 ②縦32.3 横67.2 厚1.8
169	『校刻日本外史』板木	①縦20.3 横41.3 厚3.8(反り止めを除く本体)縦18.5 横36.2 厚1.7 ②縦20.3 横41.0 厚3.8(反り止めを除く本体)縦17.6 横36.2 厚2.0
170	『山陽先生金剛山懷古詩帖』板木	①～⑤縦27.0 横53.0 厚1.2(反り止めはない)
171	明治教科書板木	①縦20.0 横30.4 厚1.7(反り止めはない) ②縦20.0 横30.4 厚2.4(反り止めはない) ③縦15.9 横47.6 厚3.3(反り止めを除く本体)縦13.7 横43.2 ④縦19.9 横28.4 厚3.0(反り止めはない) ⑤縦16.5 横24.9 厚1.5(反り止めはない) ⑥縦18.8 横28.2 厚2.0(反り止めはない)
172	伝心神陵古墳出土水鳥埴輪	奥行29.1 幅22.5 鐔径22.8 高42.8
173	子持ち台付壺形須恵器	口径4.5 底径8.3 胴径8.5 高15.4
174	砦中学校7号墳出土遺物	(鉄刀小)長<31.2> 刃幅<3.0> (鉄刀大)長73.6 刃長59.6 刃元幅3.0 (鉄剣小)長<7.1> (鉄剣大)長36.2 刃長26.0 刃幅闊部2.7 (鉄鏃小)長<4.2> (鉄鏃大)長10.0 鏃身幅2.8
175	多賀城跡出土手描き重弧文軒平瓦片	縦<12.0> 横<18.0> 厚5.8
176	不破関跡出土平瓦片	縦<12.3> 横<11.0> 厚2.1 (箱)縦13.4 横15.0 高5.7
177	智識寺跡出土丸瓦片	縦<12.6> 横<10.2> 厚3.0
178	八王子付近出土平瓦片	縦<15.0> 横<15.5> 厚2.0
179	宝塔形泥塔	①底径4.0 高7.5 ②底径4.0 高7.2 ③底径3.6 高<5.9> ④底径3.8 高<4.3>
180	法華経第六卷瓦経片	縦<12.1> 横<23.0> 厚1.8
181	東福寺銘軒丸瓦片	①外径18.3 厚3.5 ②外径16.0 厚3.4 ③外径15.9 厚3.2 ④外径18.7 厚3.2 ⑤外径17.4 厚3.4
182	京都方広寺出土軒丸瓦片	①縦<12.6> 横<10.8> 厚5.0 ②外径25.5 厚3.3 ③外径22.0 厚3.3
183	名古屋七ツ寺所用鬼瓦片	奥行<9.1> 厚<2.9> 高<24.5>
184	仁和寺銘軒丸瓦片	外径13.8 厚1.7

番号 名称	法量 (cm)
185 東大寺大仏殿銘軒平瓦・軒丸瓦片	①縦10.5 横<30.0> 厚9.9 ②外径27.5 厚2.2
186 唐招提律寺銘軒平瓦片	縦12.2 横27.0 厚1.8
187 長崎税関銘軒棧瓦	縦29.2 横21.4 厚2.3
188 工部大学校所用ジェラル洋瓦	縦28.4 横21.4 高2.8
189 工部大学校所用植松銘洋瓦	縦31.7 横31.0 高3.1
190 古鏡模型標本	①径20.5 厚0.4 ④径17.9 厚0.4 ⑤径16.9 厚0.4 ⑥径10.8 厚0.3 高0.9 ⑦径10.6 厚0.2 高0.8 ⑧径9.5 厚0.2 高0.8 ⑨鏡径19.5 柄長11.5 厚0.4 ⑩径11.7 厚0.3 高1.2 (箱)縦34.8 横48 高12.5
191 古代土器複製標本	①口径12.5 底径6.7 器高22.2 ②口径12.8 底径7.6 器高19.5 ③口径13.8 底径6.8 器高20.3 ④口径12.9 脚部径7.2 器高16.9 ⑤坏部径19.2 脚部径10.0 器高20.2 ⑥口径(推定)10.4 底径6.0 器高21.8 ⑦口径25.5 底径6.4 器高29.3 ⑧口径12.8 胸部最大径18.2 器高10.6 ⑨口径22.4 底径4.8 器高25.1 ⑩口径21.8 底径7.2 器高5.6 ⑪口径19.7 底径10.4 器高14.0 ⑫口径7.3 胸部最大径13.7 底径7.4 器高13.6
192 考古資料標本(土・陶製遺物)	①胴径5.4 高18.5 ②口径20.8 底径5.4 器高24.3 ③全長37.0 最大幅13.6 高20.0
193 石鹼製造順序標本	(瓶)口径2.4 底径2.6 高9.2 (石鹼小)縦5.2 横4.0 高3.1 (石鹼大)縦6.1 横4.8 高3.4 (箱)縦34.5 横50.3 高3.8
194 鉛筆製造順序標本	(台紙)縦44.8 横30.0 (鉛筆)長17.7 径0.8 (箱)縦46.8 横31.4 高3.8
195 陶磁器製造順序標本	(窯)奥行41.0 幅21.1 高16.5 (釉薬瓶)口径4.0 底径4.0 胴径4.2 高8.2 (器小)口径5.9 高台径2.9 高3.1 (器大)口径6.5 高台径2.9 高3.5 (箱)縦34.0 横45.0 高24.2
196 七宝製造順序標本	(器)口径2.3 底径2.8 胴径4.7 高8.9 (箱)縦24.3 横22.0 高7.9
197 緑展茶標本	縦32.8 横14.8 厚3.0 (箱)縦34.0 横16.3 高4.8
198 紅展茶標本	縦23.3 横18.6 厚1.9 (箱)縦24.8 横20.7 高3.2
199 樺太産板紙標本	縦24.0 横30.6
200 木材標本	縦3.5 横7.0 (箱)縦14.7 横8.0 高3.3
201 宮崎製石鹼	縦15.0 横15.0 厚3.3
202 蛭石	2.0g 径0.2
203 地層構造模型	縦19.7 横25.6 高9.0
204 飛騨山脈地形模型	縦67.5 横35.0 高18.5
205 日本海々戦記念塔模型	奥行10.6 幅14.2 高<13.5>
206 地球儀	球径40.0 高55.0
207 地球儀	球径85.0 高127.0



「地理歴史標本」(『大礼奉献学習院写真』学習院、1915年発行)



## 執筆者及び協力者

- ・本図録の執筆者は次の通りである。(五十音順)

青木俊介(学習院大学PD共同研究員)  
浅見龍介(東京国立博物館学芸研究部調査研究課東洋室長)  
荒川正明(学習院大学文学部哲学科教授)  
乾尚彦(学習院女子大学国際文化交流学部教授)  
井上海(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
大澤顯浩(学習院大学外国語教育研究センター教授)  
岡田茂弘(国立歴史民俗博物館名誉教授)  
門脇慶(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
鐘江宏之(学習院大学文学部史学科教授)  
鎌田純子(学習院大学史料館助教)  
川合加容子(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
金東均(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
久慈大介(学習院大学EF共同研究員)  
楠本竜崇(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
小松大秀(秋田市立千秋美術館館長)  
近藤雄紀(学習院大学文学部哲学科)  
齊藤涼子(学習院大学PD共同研究員)  
佐々木利和(北海道大学アイヌ・先住民研究センター特任教授)  
平竜次(学習院大学文学部哲学科)  
高田瑠美(菊池寛実記念智美術館学芸員)  
高橋裕子(学習院大学史料館館長)  
田中潤(学習院大学文学部助教)  
田中玲奈(学習院大学文学部研究生)  
戸矢浩子(学習院大学RA)  
長佐古美奈子(学習院大学史料館学芸員)  
橋本旦子(学習院大学RA)  
橋本佐保(学習院大学PD共同研究員)  
長谷川怜(学習院大学RA)  
平田健(東京都教育委員会学芸員)  
尾留川麻里亜(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
福島恵(学習院大学EF共同研究員)  
福永愛(学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻)  
藤實久美子(ノートルダム清心女子大学現代社会学科准教授)  
丸山美季(学習院大学史料館学芸員)  
村松弘一(学習院大学学長付国際研究交流オフィス教授)  
吉田愛(学習院大学東洋文化研究所客員研究員)  
吉廣さやか(学習院大学史料館学芸員)

- ・英文翻訳はジョンストン基子が監修した。

- ・編集は根岸美季、橋本旦子、橋本佐保が行なった。

- ・掲載写真は小松大秀、田中潤、平田健、諸星真澄などが撮影した。

- ・本図録作成に当たり、多くの方々にご協力いただいた。記して謝意を表したい。

足立吉博 飯島善明 大出尚子 梶田明宏 桑尾光太郎 坂井隆 佐藤浩司  
佐藤進 志賀祐紀 徐瀛洲 徐韶仁 末吉武史 谷本晃久 辻大和  
ディヴィット・ヘンリー・マッコイ 富田ゆり 長佐古真也 中島諒 難波知子  
西山直志 福田舞子 本多葵美子 松崎元樹 皆川隆一 森一欽 山口昭彦  
山口加津子 林美鵬 横川公子 和崎光太郎

お茶の水女子大学 大阪市立愛珠幼稚園 大阪大学適塾記念センター  
京都市学校歴史博物館 国立民族学博物館 徳川林政史研究所

学習院アーカイブズ 学習院大学学長付国際研究交流オフィス

学習院大学図書館 学習院大学東洋文化研究所

# 百聞ハ一見ニ如カズ

旧制学習院歴史地理標本室移管資料

平成25年(2013)3月31日 発行

編集

学習院大学史料館

デザイン・制作

D\_CODE

発行

学習院大学史料館

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1  
03-3986-0221(内線 6569)

© 2013 学習院大学史料館







S E E I N G   I S   B E L I E V I N G